
私の願いごと

h i d a k a

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

私の願いごと

【Nコード】

N2433D

【作者名】

hidaka

【あらすじ】

僕は、普通の高校三年生。そのはずだった。だが、ふと気づけばいきなり摩訶不思議な「裏世界」という名の死後の世界にいた。そこで姿も見えない“存在”から「おまえは死んでいる」と言われ、僕の物語は始まった……第37話、更新日未定。（3度目の大改修中……）

私の願いごと

第一部　プロローグ：人生の終わりは突然に（前書き）

今回のプロローグは、書き直し前とはほとんど変わっていません。変わってくるのは第2話以降です。

人は、自分の知らない世界、知らない状況、知らない他人に会った時、心にぐらっと動揺を感じる。それを、戸惑いという。そこから、全ては始まる――

第一部　プロローグ：人生の終わりは突然に

僕は、気が付くと小さな木製の椅子に座って、遙か遠いところを見ていた。

ハツとして、時間が気になる。とつさに腕時計に視線だけ向けてみるが、何故か目盛りが霞んで見えない。

椅子から立ち上がるうとすると……足が、動かない。

足を動かそうとすると、足がそれとは逆に地面に吸い込まれていくような感覚を受ける。

自分に乗せた何かが一気にスーツと深い谷底の下へ向かって落ちているようなその感覚に、背すじから膝、そして手先が自然に震えてくる……

こういう時はとにかく、何も考えずにじっとしている事だ。冷静にならないと、どうにもならない。

そう自分に言い聞かせ、無理矢理気を静めてみる。

そもそも、何故僕はこんな“異常な感覚”の中に陥るまでボーっとしていたのだろうか？

一生懸命ここに来るまでの経緯を思い出そうとしても、何一つ思いつけない。何とも不気味だ。

次に、無意識に周りを見渡してみる。

すると、いつか何処かで見た事があるような景色が目の前に広がっていた。

確か、この景色は小学校に入学するもつと前、ずっとずっと昔に1回見たような気がするんだ……

僕は、そろそろ肌で悟ってきた。ここは、普通の場所じゃない。

嫌な予感がする、と。

『この“普通ではない状態”から何とか抜け出そう』と頭の中をフル稼働して考えてみる。

が、ここから逃げようと思ったり、とにかく走り出そうと思っても、身体に全く活が入らないのだ。

『身体』と『心』が真つ二つに分かれてしまっているように

僕の身体を今支配している、気持ち悪い感覚に僕は戸惑った。

普通ならば、『動きたいと思っても身体が動かない』という状態は、恐怖以外の何物でもない。しかし不思議な事に、今僕の心はそれほど恐怖を感じていない。勿論、不快で気味が悪い、とは思っているが。

今の僕の心理状態は、何と表現すれば良いのか？

まあストレートに言うとする、『心の中自体が真つ白』とでも言うのだろう。

心が妙に『落ち着きすぎている』。こんな異常事態なのに。

とはいえ、このまま何もしない訳には行かない。

僕は頑張ってみる事にした。しばらく辛抱強く自分の両足を手で優しく叩き続けていると、ようやく身体が少しだけ自分の思う通りの動きができるようになってきた。

こうなれば、しめたものだ。

僕は一安心した。これで、助けを求められる所までたどり着けば良い。

しかし、現実はその甘くは無かった。

確かに、地面を踏みしめ、転ばないように注意しながらゆっくり

とならば進む事は出来た。けれども、ぎこちない身体でどれだけ進んでみても、気が付けば風景が全く変わっていないのだ。まるで、同じ場所ですつと足踏みをし続けているように。

時間が分らないから正確なところは分からないが、僕はかなり頑張った気がする。だけど、明らかに事態は良い方向には進んで行かなかった。

次に、自分の頭を思いっきり殴ってみる。けれども、周りは何も変わらない。

そして、誰かに助けを求めべく、思いっきり声の限りに叫んでも誰も答えてくれない。

結局、僕にできる事は、何も無かった……

僕は、無力だった。

そう一瞬意識した時、目が霞んだ。そして、強烈な眠気が襲ってくる。

この『眠たくなってきた』という気持ちをどれくらい自分の中で維持していられたのかは分からない。その直後に感じた。意識しないうちに静かなところにフワツと自分が移動していくのを。

移動した先は、一言で言えば『何も無い空間』を絵に描いたようなところだった。

どう言えば良いのだろうか。自分の周りに形が無く、色が無く、奥行きも感じないというこの感じを。

しばらくボーっとしていると、何か遠くから声が聞こえてきた。

それに、まわりの風景がぐにやりと歪んで、今度は真っ暗になった。僕は、さっきからの風景の変化に耐えられなくて、ちよっと気持ち

ち悪くなってきた。

今、僕がいるところは、白一点も無い、完全なる黒の空間だった。

「おい。そこにいるおまえ」

フツと自分の近くにいきなり人の気配が現れ、先程から呼びかけている声が急に大きくなった。姿は見えない。

「誰だ！」

不意にあらぬ方向から声をかけられて、心臓が止まる思いがした。でも、とりあえず返事を返すことはできた。

「私はおまえのいた世界のことなら何だって知っているし、その世界で起こった出来事を変えることだってできる。そんな存在だ」

そう僕に言った声は、何やら得意げそうにも感じた。

僕は言われたその言葉の意味をすぐに飲み込めなかった。

「おまえは今、何かやり残したことがあるのだろうか？」

だから今、私のいるところにおまえはいる」

その“存在”は、そんな事を突拍子もなく言った。

その“存在”の声のした方向から、まるで僕を品定めでもしているかのような鋭い視線を感じる。

この視線、何か禍々しくて落ち着かない感じがする。

私の願いごと

僕はまともな言葉を一言もその“存在”に対して返すことができなかった。とにかく、さっき、『世界のことを何でも知っている』

と言われた時から、思考回路が停止していた。

一体何なんだ？

黙っていては何も進まない。

自分の中の『恐怖』にかろうじて打ち勝って、思い切って、

「あなたは誰？」

ともう一度聞き返してみた。しかし、もう相手は一言も言葉を発しようとしなない。名前を明かせない事情がなにかあるのだろうか？

しばらく沈黙が走った。僕はこの種の沈黙が苦手なので、とにかく何かを言おうとした。

すると、一番気になることが真つ先に口から出ていた。

「あなたは本当に私のいる世界を変えることができるのか？」

その“存在”は、この問いにはすぐに答えた。

「もちろん、先ほどの言葉に嘘は無い。しかし、条件があるのだ。その条件とは、誰かの為になり、その誰かが望む通りに世界を変えること」

「じゃあ、僕がその誰かになってもいいのか？」

「構わない。というか、むしろおまえが私を必要としていそうだから声をかけてやったんだ。それに、もうおまえはもといた世界と違

った世界に今はいるのだぞ。自覚が無いのか？」

僕は相手の意図が全く分からなかった。

『世界を変えたいか？ 変えたくないか？』

と問われれば、大抵の人、100人中96人ぐらいまでは、世界とまでは行かなくても、何かを変えたいとは思ってはいないだろうか。そして、つつい口車に乗ってイエスと答えてしまう人もいるのではないだろうか。

でも、それはおかしくはないだろう。当然のことだと思う。

誰だって、自分の周りの環境に100%満足している、というわけではないだろう。逆に、自分の周りの環境に100%満足している人は、こういうと失礼だが、極めて特殊な人ではないだろうか？

例えば、お金を溢れるほど持っていて、私は幸せでないという人だっている。

少なくとも、聞いたことはある。

だから、『世界を変えられる人』は、世の中の大抵の人に必要とされているはずである。

じゃあ、この“存在”は、世の中のほとんどの人に、こうやって声をかけているのだろうか？

それに、僕が今いる世界が、これまで生活していた世界と違う世界にいる、というのはどういう意味なんだ？

そのようなことをその“存在”に聞き返すと、

「おまえは全然、今の自分の状況を分かっていない様だな。

気の毒だが、一言で、今のおまえの状況を説明しようとする」と、

『死んでいる』

としか言い様がないんだよ。

それに、私は、そんなに多くの人に、声をかけている訳ではない。私が声をかけるのは、生前の『世界』に未練を残して死んだ人間のうちで、私が目をつけた人物だけだ」

とさらっと言われた。

まともなお悔やみの言葉すらなかった。

僕は死んでいるのか？

この妙な身体感覚、今僕がいる変な『世界』は、死後の世界なのか？

とにかく僕は、何をすればいいのか分からなくなって、手始めに大声で吼えた。

「これは、悪夢だ！

さっさと目を覚ましてくれ！」

この時は、こんな馬鹿げた、だけどリアルすぎる話なんて、とてもじゃないけど信じる気にはなれなかった。

こんな事をいきなり初対面の訳の分からない“存在”に言われて、一発で信じるほうが変わだ。

後から思えば、これが全ての始まりだったんだ。

第一部　プロローグ：人生の終わりは突然に（後書き）

次から、話がだいぶ変わってきます。

本当に申し訳ないのですが、前の設定は、頭から捨ててください。

（はじめて読んでくださっている方々には関係ないですが）

でも、書きたいことの根っこは同じです。

これからはちょっとずつ更新していくので、また続きも読んでくださったら、無上の喜びです。

第1話：僕は死んでなんかいない！（前書き）

ここから本題に徐々に入っていきます。

お互いの意見が食い違う。当然、お互いが自分こそは正しいと思っ
ている。だから、議論は続く。エンドレスに。

その議論において、どちらかの意見が正しい事が『証明』できれ
ば一応は解決するのだろうか？

しかし世の中、『証明』はそうたやすい事ではない。

そして、その果てにお互いに分かり合うことも……

第1話：僕は死んでなんかいない！

どれくらいの時間が過ぎたのだろうか。そんな事さえも分からない。

また、そんな事がどうでも良く思えるくらいに、僕を威圧してくる真つ暗闇。

そして、その中で……

僕とその不思議な“存在”はまだ、死んでいる、死んでいないの押し問答を繰り返していたのだった。

「おまえは、どう考えても死んでる。こればかりは仕方ないんだよ。

理由を説明できる方法があつたら教えて欲しいのはこっちの方なんだ。

いい加減諦めろ！」

真つ暗な、文字通り一寸先も見えないこの空間で、“存在”の聲が響く。

“存在”は、ひたすら僕への説得を試みているらしい。しつこい。

「いや、そんなの信じないぞ！ どうして僕がある日突然気が付いたら急にあの世に逝っていなければならぬんだ。

……冗談じゃないんだよ。そんなたちの悪いジョーク、今更受けないんだよ。

そこまで言うのなら、はっきりと証明してくれ。僕の目の前で！」

僕はそれを断固跳ね除ける。そんな訳ないじゃないか。

「そんなに簡単に証明できるんなら私だって何の苦勞もないんだよ。じゃあ言うが、おまえこそ、今確かに自分は生きていると証明できるのか？」

「……うっ」

“存在”の声に、僕は一瞬どう返せばいいか分からなくなる。

確かにそうだ……ずっと感じている、身体からの違和感。これが僕の弱みだ。

しかし、ここで弱腰になったら相手の思う壺だと思い、とにかく槍を返す。

『自分が生きているって、今の僕のこの状態が全てだろうに。それ以外に何があるんだよ！』

そして、“存在”が、おまえも証明できないじゃないかと言い、僕が、それに斯々云々と切り返す。

ひたすらこれの繰り返し。きりが無い。

その後……

先ほどから終わるともなく続いてきた、お互いの死んだ死んでいない論争に、お互いが疲弊し、論争自体が下火になってきた。

そのつばせり合いが終わる最後、口を開いていたのはその姿の見えない“存在”だった。それは、不快感と呆れ果てた気持ちを剥き出しにして、はっきりと繰り返し言った。

まるで、もうそんなのはこれまでもたくさん聞いてきたよ、といわんばかりの声で。

「おまえはもう100%、確実に死んでいるんだよ。これは、何をやっても変わらない、歴然とした事実なんだ。
……さ、分かっただらもう叫ぶな。これ以上叫ぶんならここを追い出すからな」

どすの利いた太い声。今頃になって、思えばももとの“存在”の声がちよつと甲高い感じのする声だったのに気づいた。

“存在”の発したその言葉を聞いた途端、僕は、背筋に氷点下の汗を感じた。

姿も見えない、摩訶不思議な“存在”に冷静に『おまえは死んでいる』と言われた。

目の前の、存在すら見えない不思議な奴は、自分の名前も、そして形だけのお悔やみの言葉すらも述べず、僕にそうはつきりと言いつ放った。

一体ここはどういうところで、あいつは一体誰なんだ？

僕は一体どうなってしまったんだ……

そして、もしあの“存在”のほうが正しかったら、こんなに理不尽な事はない……

“存在”は怖かった。不気味だった。

でも、そんなのは二の次だ。

とにかく、僕は気分を立て直してもう一回その“存在”に怒鳴り返した。至極当然のことを。

「どうしてあなたにそんな事が分かるんだ？」

ここはすごく不気味なところだし、あなたの声にも聞き覚えが一度もない。

もしも、もしも僕が本当に死んでいたとしても、それがどうしてあなたには分かっているんだ？
理由を言ってみるよ！」

ここでこのまま、「はい、そうですか」と引き下がる訳には絶対にいかない。

『これは僕の見ている悪夢じゃないのか？』
何気なく放った一言だった。

しかし、それを聞くと、これまで堂々と槍を交えていた“存在”の態度が、急におかしくなった。

「夢、なんて言ったら全てそうなってしまっじゃないか。そんなこと、私には分からない……」

でも、……少なくとも私は、私はそんなの認めない！」

説明に窮しているように感じるのは僕の気のせいだろうか。

しかし、“存在”がその言葉を吐き終わった後に、その方角からは、困惑に満ちたような、重く深いため息が1つ漏れていたような気がする。

僕は、戸惑った。なぜいきなり相手が怯んだのか。それが分からない。

こっちにしてみれば悪い事じゃない。そうは言っても、なんだか気味が悪いのだ。

でもしかし、僕に向かってあれだけの事を言っておきながら、その態度は何なんだ！

僕はそんな“存在”のはっきりしない態度にはむっときた。

「人に『おまえは死んだ』とか言っておきながら、大変説得力のある態度ですね。僕は頭が悪くて到底理解には及びそうにございませんよ、ええ」

僕はいやみつたらしく言い放ってやった。(……自分で言うのもなんだが、何と中途半端な嫌味だろう)

やっぱりそうだ。冷静に考えてみれば、これは悪い冗談に違いない。あの“存在”は僕を騙そうとしているだけだ。何故騙そうとしているのかは分からないけれど……

きつとこの空間だつて、この間友達が言っていた“なかなか目覚めない悪夢”つてところだろう。

それを聞いた“存在”の声は急に震え出し、興奮し、すごい抑圧感と共に僕に襲い掛かってきた。

「分かりやすく説明できればどんなにいいか。できないから困ってるんだよ。

……おまえに一体何が分かるっていうんだ。おまえみたいな若造に言われたくはないさ。

私は、私はなあ。これで、ずっと苦しんできたんだよ!」

“存在”はかんかんに怒っているようで、それでいて悲しそうな裏を感じた。

え!?

僕が怒るのは分かるだろう。いきなり死んだことにされたんだから。

でも“存在”がこの場面でどうしてこんなに逆上するんだよ?

僕の方は至極当然、当たり前前の反応だろうに。

周りが真っ暗な中で、時間だけが罵声と共に過ぎていったように思える。

けれども、この頃になって、僕はなんだか得も言えぬものを感じ出したんだ。それは、決して冷たいものではなかった。よくは分らなかったけれど。

黒い空間は、はじめはその圧倒的な暗さで僕を寄せ付けなかった。次に、その緊張感を突破すると、今度は自分の視覚が満足に働かない事に不安を覚えた。この二つは、自分でも分かる。

その次が不思議だったんだ。

どう言えばいいのだろうか？ 姿も見えない“存在”と一生懸命に言い合いをしていたら、それらの黒い霧が、自分の中に一つの塊として、徐々に受け入れられるための用意のようなもの下地ができてきたように思えたのだ。

そう言ったって闇がすっかりと晴れてきた、という訳では無いし、闇はまだ怖いけれど。

僕には、それが何故だか分からなかった。

お互いがある意味うんざりしてきていた。

それに、僕の方は次第にすごく苛立つてもきた。

あの“存在”のいうのは多分嘘だと、そうは思っているけど、よく考えてみれば、

ここが僕がこれまで普通に暮らしてきた世界である、ということを確認する方法もないのだ。

ここで僕が死んでいる、ということも証明できないし、生きてい
るといふ確証も持てない。

つまり、お互い相手に有効打を与えられないうちに、体力を使い
切ってきたという事か。

さあ、これからは精神力と体力の持久戦だ、とお互いが覚悟を余
儀なくした時、

急にこの真つ暗な空間に“第三の声”が響いてきた。

『シエワードよ、おまえもどうやら本格的に仕事を始める時が来た
らしいのう』

それを聞いた“存在”は、突然声を沈めてしまった。
それを好機だと見て取った僕が、続けてさっきの論争の続きを始
めるが、全く手応えがない。

しばらく経ってから、その“存在”はようやく口を開いた。

「あ、あなたは……」

あの者が、わ、私の“パートナー”だということですか？ 「冗談で
はありません。何かの間違いです！」

すっかり冷静さを失っている“存在”。僕と口論していた時の声
とは180度違っていた。

まるで、どこかのお偉いさんに接しているような感じの口調にな
っている。

そのおぼつかないような、地面に足がついていない声に、さらに
第三の声が追い討ちをかけた。

『私がいうことが間違っている、ということとは過去にも未来にも、もちろん現在にもない。』

おまえの目の前にいるあいつがきつとおまえの“パートナー”になる者じゃろっ』

それっきり、“第三の声”もその“存在”も黙り込んでしまった。

へ！？ 僕が何の“パートナー”になるんだ？
訳が分からないよ。

僕は一体、これからどうなってしまうのか……

第1話：僕は死んでなんかいない！（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。

第2話からは、文字数を少なめに読みやすい区切りで少しずつ更新していきたいと思っています。

そして、お話の進行速度が遅いのは僕の悪癖の1つなので、ご了承ください。

私の願いごと

第2話：展開は思いも寄らぬ方向に（前書き）

見えないもの。自分の意識していないところで、自分の及ばない所で何かが動いている感じがする。

気づけば、それは傍にいる。寸前まで、僕は気づかなかつた。

運命も、それと同じような物かもしれない……

第2話：展開は思いも寄らぬ方向に

天から聞こえてきた声が、状況をあつという間に動かし始めた。真つ黒で、何にもとらえどころの無い空間の中。しかし何かが急に動き出した。

“存在”が、落ち着いてきた頃合を見計らっていたのだろうか、しばらくの沈黙の後、その“第三の声”が再び響く。どこかに、貫禄というかなにかを感じさせる、そうそう、平たく言えば僕の爺さんのような声だった。

「おまえにも、ついにパートナーができたか。これで、ようやく仕事が始められる、といった感じじゃな。

何をそんなに慌てておる。せつかく見つかったパートナーじゃぞ？」

その、シエワードと呼ばれている“存在”は、その天から聞こえてくる声に、嫌悪感をあらわにした声ではつきりと答えた。

「恐れ多いのですが、どうしてあれが私のパートナーだとあなたには分かるんですか？」

あれは、私にはどう見ても自分とはそりが合わない感じがするのですが」

要するに何の事かは知らないが、あの“存在”は、僕にパートナーなるものにはなつて欲しくないらしい。ま、僕にしてみれば、訳の分からない奴らとはなるべく関わりたくないし、お互い利害は一致しているよな……

不機嫌なのは、“存在”が落ち着くにつれて、僕をあれこれと物

扱いはじめたことだけだ。

でも、僕は自分では心が広い人間だと思っているので、それくらいは許してやるう。それに、だ。 あいにく僕は、不気味な奴ら2人に逆らって、戦って生還できるほどの戦闘能力は持ち合わせていないだろうから。

いや、むしろそんな事は今はどうでも良いのだろう。

もし本当に僕の帰る場所がなくなっていたとしたら。

僕が、あいつらの言う通りとつくとくに死んでしまっていたとしたら。そっちの方が一大事だ。

そんな事が、急に不安になってきた。

もともと不安だったけど、改めていざ真正面から向かい合ってみると、自分が間違っている気がしてくる。

自分に言い聞かせているだけでは不安だ。

何か、確たる証拠が欲しい。

自分がしっかりと立っていた土台の上には立っている。それを示してくれるものがあつて欲しい。

僕は更なる勇気を振り絞って、“第三の声”の主にも話し掛けてみることにした。

きっと、この訳の分からない世界に来てからの、毎度毎度の僕の表情は、自分では見えないけれど後から言葉では語りきれないだろう。自分の表情が自分で見えない辺りが、ちょっと安心で、ちょっと残念な所だ。

そして、びくびくしながら僕は言葉を搾り出した。

「あなたは、どなたなんですか？

というか、あなた達二人はどうして姿が見えないんですか？」

いかにも普通だと思われることを、順当に聞いてみた。
どんな答えが返ってくるか。それに注目だ。

「どなた、といわれてもな…… 今の段階では何にも説明できないんじゃないよ、私達については。」

そうだな。おまえが、私の目の前にいるシエワードに協力してくれるというのなら、多少の事は囁いてやってもよいが？」

“第三の声”の主は、なぜだか僕が“存在”のパートナーなるものになつて欲しいらしい。

さっぱり訳が分からない。僕のどこに、そんな特別な物が備わっているというのだ？

その言葉を聞いた“存在”は、慌ててその声に反応する。ま、大方向を言いたいのかは予測がつく。

「だから、どうしてあなたはあれを私のパートナーにしたがるんです？

人間なら、これまでもいくらかはここにやってきたのに、あなたがこんなに積極的になるのは珍しいように思います。

どの辺りにそんなに確信を持っていらっしゃるんですか？」

“第三の声”は、そこで一気に声のトーンを落としたり。荘厳とした、重々しい声に近くなり、威厳が見え隠れする。

「私は、これまでにいくらかも人間達を見てきた。奴らには、数え切れない程のタイプがある。」

おまえだって、それはこれまでから承知している事じゃろう。

私は感じるんだよ、あれから。おまえが足りない所を、あれは助けてくれる。」

あれは、ぱつと見そんな逸材には見えないが、中に何かを秘めている。あれの死に方からして分かるわい」

え、死に方!?

僕の顔から、さつと血の気が失せていくような気がした。あんなのはでまかせだ。あいつらがグルになって、僕を陥れようとしているのだらう。

それは分かる。でも、あの“第三の声”の今の台詞、明らかに猿芝居とは違ったような気がした。嘘をついている奴は、どこかに奢り、もしくは相手への侮蔑を持っているものだと思う。でも今、そう言ったものを全く感じなかった。

鈍感だ、と言ってしまえばそれまでだ。でも、僕の感覚は必死に訴えてくる。これは真である、と。

でも、とにかくあいつが知っている僕の死因なる物を聞いてみたくなった。

どこまでそれがリアルな物なのか。それを試してみたくなった。

「今、あなたは僕の死に方を知っている、見たいな発言をしてましたが、どういうことか詳しく……」

ここで、思いもよらぬ横槍が入った。いきなり“存在”が声高々に“第三の声”のする方に向かって宣言したのだ。

『あれを私のパートナーにどうしてもしたいと仰られるなら、あれの実力をテストしてもらえませんか？

あなたのことを信用しない訳ではありませんが、実際に私の目で見極めてみたいですし』

僕は、この刹那嫌な予感を背筋に、いや、全身をもって感じた。その悪寒で、作り話であろう自分の死因なるものについて聞く余裕も奪われてしまった。

僕にこれ以上、何をしろというんだ。訳が分からないんだよ！

しかし、僕のそんな思いとは裏腹に、“第三の声”は高らかに宣言した。

『良からう。実際に役に立つか立たないかを見届けて決めた方が、お互いに納得がいくじゃろうしな。』

では、これから“臨実試験”を始める』

第2話：展開は思いも寄らぬ方向に（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。

次回からも、ちょびちょびと更新していきます。

前回の教訓から、早足更新をするとダメだと悟ったので、むしろ不定期更新ですね……

でも、1話5日以内には進みますよ。

第3話：お互いの世界の距離（前書き）

距離。縮まることも、広がることもない状態を正常という。

二つの物は互いに適当な距離を定め、自ずからそれを守ってきた。バランスを取る為に。不必要な軋轢を避ける為に。

でも、そうとは限らない。

近づきたいと思っっているものもたくさんある。その多さを意識していないだけで。その結末は、神のみぞ知る……

第3話：お互いの世界の距離

“臨実試験”とは一体何なのか？

僕がそれを口にする前に、“第三の声”の主はまたしても声のトーンを変えて話し出した。

「……でもまず、おまえはこの世界のことをいくらかは知っているのか？ 知らないと、試験上で色々と不便で敵わんからな。」

それを聞いた僕は、はじめは馬鹿にされているのかと思った。

「この世界って、そりゃあ知ってますよ。僕だってもう高校三年なんです。これまでこの世界で17年生きてきたんですよ？」

はつきりと、誰にとっても聞き取りやすい声で答えた。

僕を舐めないでくれ。そこまで、僕はどうしようもなくはないぞ。

しかし、僕の答えを聞いた“存在”と“第三の声”の主は、同時にため息をついた。

「……おい、シェワードよ、これはどうしたら良いのじゃ？」

「す、すみません。試験以前に問題が一つ……」

こいつは、自分がまだ死んでいないと思ってるんです。そんな奴に、この『裏世界』の仕組みを説明したって、分かってもらえないでしょうしね。」

私の願いごと

二人して、疲れた声でヒソヒソ話をしているようだ。というか、

当事者たちは、それで僕に聞こえていないつもりらしい。

その気配を何となく察していると、さっきまで心に一旦沈めておいたものが、急に浮かび上がってきたのを感じた。

僕は死んだのか、死んでいないのか、本当の真実が知りたい。ということ。

さらに分からないのは、あいつらの狙いは何なのか。

僕が待機して次にかかる言葉を待ち受けていると、咳払いが一つ聞こえ、“第三の声”が再び語り始めた。説得口調、と言うべき声で。

「……おまえ、それではこの『裏世界』じゃ生きていけないぞ。

そうだな　私は、おまえが惜しい。じゃから、おとなしくこれからの話をちよっとだけでいい。聞いて欲しいのじゃ」

僕にとって、この世界で生きていけない、なんて言われたのは初めてだった。

親に、受験に失敗したら生きていけないと極端な事を言われたことはある。でも、今のようなリアルな意味を感じながらにして、伝えられたのは初めてだ。

何か、雲行きが怪しい。

よくよく冷静になってみれば、理由はまったく分からないけれど“第三の声”の主のほうは、僕をかなり高く買っているらしい。

そいつが僕に向かって『生きていけない』と言っただ。何かある。

少なくとも、ここの空間が普通ではない、というのは間違っではないのではないか。

しかし、そうなる僕は何処にいるんだ？
僕のいる場所は、言葉で言えばどう表現される場所なんだ？

僕は困った。どう返事すべきか、はたまたいつそのこと自分の殻に閉じこもって、自分の論理で徹底抗戦するべきなのか。

ここで、下手な例え話を幾つか頭の中で組み立ててみたりしてみる。この場合に適切なものであるかどうかは分からないけれど。

例えば、とにかくしつこいセールスマンを追い払うには、相手にしないのが最善なのだろう。

悪徳業者からつまらない物を買ってしまったら、相手の根城へ直接交渉に行くより、できるものならさっさとクーリングオフしてしまった方が良い。

そして、いたずらメールや、いたずら電話は、腹を立てて応戦したら負けだ。

こう考えてみると、無視するのが最上の策のように思えてくる。

でも、僕には弱みがあった。この空間での、身体に感じる浮遊感。これだけは、どんなに自分の中で理論の肉付けをしても払拭できなかった。

一つでも疑いが完全に晴れないとなると、他も怪しく思えてくる。疑心暗鬼だとは分かっているけど、疑いだしたら止まらない。

僕の中で、運命のサイコロはころころと回りつづけていた。

そんな時、さっきから沈黙気味だった、シエワードと呼ばれている“存在”が、急に優しくそうな声で語り掛けてきた。

「……私が悪かったところもあった。どこかで私が悪いところがあったのかもしれないってだけは認めるよ。」

私はシエワード。そういう名前。大事な人に付けてもらった名前。……あんたが、自分を死んでいないと思うんだったら、あんたの世界ではそれが正しい事。

それじゃ、私といくらドンパチやっても切りがない。

だからお互い、一旦はこの言い合いは落ち着けよう。……これ

でいいか？」

運命は、その一言で転がったかもしれない。

僕の中のサイコロは、回転速度を緩め、最後の判決を下そうとしていた。

第3話：お互いの世界の距離（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

ストーリーは、少しずつ大きい方向に向かっていきます。頑張つて、内容の濃いものを書いていきたいと強く思っていますので、よろしく願います。

第4話：『異世界』を認める勇気（前書き）

名前。生まれた時に、親に付けてもらうもの。

誰にだって生が在り、だからこそ死が在る。名前をもらうという事は、生を他に認めてもらうことではないだろうか？

だからこそ、その証を一生大事にしたいと思う。

だからこそ、何だかんだで名付け親を敬い、一目置いて、辛気臭くても孝行したくなったりする。

それは何処でも変わらなく……

そして、変わらなくあつて欲しいと願う。

第4話：『異世界』を認める勇気

僕は、確かにいきなり死んだ事にされて苛立っていた。頭に血がカツと昇っていた。

それで相手の、シエワードとかいう“存在”の意見を冷静に聞いていなかったんだ。

闇は怖い。でも、真つ暗なものは良かれ悪かれ真つ直ぐだと思っ素直に何か、感じる物がある。それに気付くのは、この場に呑まれないようになってきた証拠なのだろうか。

考えれば、そうだ。普通に生きていて、『さあ、今ここでおまえは死んでいるのか、いないのか、きつちりと理由をつけて説明してください』

と言われたら誰だって、理由、そして決め手には何かしら事欠いたりしないだろうか。

僕は今、空気を吸って生きているじゃないか。心臓だってバクバク言っている。血の流れだって感じるんだぞ。

残念な事に、この程度では、相手から『夢の中の幻影じゃないのか？』と言われたら、きつちりは切り返せないだろう。言われた事の次元が違うのだから。少なくとも、僕だったらダメだ。

今の状況において、さらに厄介さに拍車をかけているのは、お互いの住んでいる世界が多分全く違うらしいという事だ。

……僕はここが死後の世界だ、なんて信じた訳ではない。これだけは断っておくが。

同じ世界同士、お互いに生きているのが当たり前だと思っている世界でも『夢才子』を証明せよと言われたら困る。

今の状況は、生きていて当たり前だと思っている僕。そして、その僕が火花を散らしている相手は、死んでいるのが当然だと思っている“存在”なのだ。

当然の事だったのだろう。僕も“存在”も、さっきまでの論戦の中、お互いに分かりあえるように示せる確たる証拠がなかった事は

こういう状況で、『おまえの言うことは屁理屈だ』と軽々しく叫び出す人がいる。

お互いがお互いの常識、元となっていることを疑わずに、相手の言いが自分の認められる範囲を越えていたら、そういう人は迷わずに叫ぶ。

『そんな屁理屈、通用しないんだよ』と。

もし相手が、その屁理屈を正しいと思って常識を作っていたとしたら。

相手にしてみれば、とんでもなく腹が立つ。自分の常識を確たる証拠も無く、単に屁理屈と思われただけで無下にされるのだから。

今は、お互いに共通の理屈なんて無い。だから、そういう行為は火に油を注ぐ事となり、結局は自分の首を自分で締める事になる。

それでは、話し合いは成立しなくなる。

異文化、異なった立場の人間がお互いに分かり合うのは難しい。言葉の表せるものには、どうしても隙間がある。その隙間が時に争点となる。

でも、“存在”はその点立派だった。
自分の意見だけでなく、僕の側の意見も一応は『僕の中で正しい』
ということを確認してくれた。口は悪かったような気はしたけど……
良いところもあるんだな、あいつ。

こうなつては、僕にとつてもこれ以上不毛な言い合いを続ける意味が分からなくなってきた。
確かに、自分が死んでいるというのはおぞましい。一刻も早く無念を晴らしたい気持ちはある。

けれど、この議論、どうせ決着がつかないと頭では分かってきた……
それに、相手から停戦交渉を持ちかけてくれたのだ。それを断ると、今度こそさらなる泥沼化は必至だろう。

「こつちも言い過ぎたよ…… 仕方ない、この問題は置いておこう。
僕の名前は九条。九条涼太。両親からもらった、大事な名。
……この世界の常識、つてやつを僕に教えてくれないか？」

何だか、どうにも決まりが悪い。やりづらくって、姿が見えない
“存在”から目をそらすと目を自分の思うそっぽへと向けてみる。
自分が、この空間に来てからなんだかもどかしく、違和感を感じる……

それを聞いた“存在”はホツとしたらしい。もとの軽い口調に戻っていた。

「ああ、私の事はシェワードでいい。でも、私はおまえのことをおまえと呼ぶからな」

――

『あの坊や、ようやく第一関門を突破したな。ふっ、やはり私が見初めただけあつたわ。』

シエワードよ、おまえさんはとんだ幸せ者かもしれんぞ。色々な意味で……』

第三の声の主は、声にならない安堵をそつとこぼした。

その脳裏には、とある男の姿が浮かんでいた。それを、シエワードと僕が知るはずもなく……

第4話：『異世界』を認める勇気（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

これから3日ぐらい用事があるので更新が止まります。これまで、毎日更新できていたんですけど、残念です。

前にも言っていた通り、物語のスピードは、かなりスローです。ご了承ください。

第5話：この世界を、人は『裏世界』と呼ぶ（前書き）

裏とは何か？

表の反対の事である。素直ではない事である。

コインを投げると必ず表か裏しか出ない。真ん中はない。

裏とは、みんなマイナスに捉えがちだ。

しかし、ふと立ち止まって考えてみると、裏の方が正直なのかもしれないと思ったりもする。

なぜならば、裏の反対は表しかないから。

……そんな、詭弁。

第5話：この世界を、人は『裏世界』と呼ぶ

この空間は、相変わらず真っ暗だ。

でも、その暗闇に少しだけ身体が慣れてきた。目も慣れてきたし、この雰囲気にも飲まれなくなってきた。

でも、まだ僕には見えていない。自分の周りの輪郭が。

第三の声の主はその後、『あとはお二人さんの問題だからな。私は試験ができそうになるまで待つておる』とか言つと、一言も言葉を発しなくなつた。

しばらく、水を打ったかのような沈黙が走る。

僕は恐る恐る、その“存在”改めシエワードに話し掛けた。

「……じゃあ、シエワード。この世界の事、説明してくれる？」

すると、シエワードはめんどくさそうに答えた。

「分かつている。それから、私には馴れ馴れしく話すな。敬語を使え、敬語を。」

……今から言うことは、これからおまえには絶対に必要なことだから、忘れるな。聞き逃すな。当然だが、決して嘘だと思つな。

……ああ、それから、私の姿が見えないのは不可抗力なんだ。気にしないでくれ」

そこまで言つと、あの妙に甲高い声のするの方向から深呼吸の音が聞こえた。

空気が器官を通る、あの音。その後、学校の教師のような口調になつて、徐々に話し出した。

「まずこの世界は、おまえから見れば、死後の世界にあたる場所だ。これは説明した事にしておく。それと、こっちの世界の住人は、この世界のことを、『裏世界』と呼んでいるんだ。」

「ここ、『裏世界』ではおまえが生前にいた世界とは、明らかに違うはずだ。感覚も、空気も。」

『裏世界』の対極が、おまえの生前にいた世界である『表世界』だ。僕は、自分では物分かりが良い方だと思っている。だから、とにかくこの空間が『裏世界』にあるのだと分かった事にする事にした。そして、シエワードから次に来る言葉を待った。なぜだろう、少しだけ自分の中の好奇心というやつが疼き出した。自分の今の状況を、一旦忘れたいとまで思っ

『……ふっ、僕って奴は、完全に物好きな奴だ』
自らで自嘲気味に小さな声で呟いてみた。

「さて、ここからが本格的な説明だ。でも私にはおまえが、今から言葉で色々と説明したとして、それをあっさりと理解できるほど賢くは見えない。」

それに私としては、おまえにはさっさと“臨実試験”を受けて、白黒つけて欲しいしな」

……いきなり私からの提案なのだが、この『裏世界』の事をどんな感じで説明して欲しい？」

第一に思ったのは、余計なお世話だという事だ。僕は確かに馬鹿だ。でも、会ったばかりのあいつにまで言われたくない。

しかも、どうしてあんなに偉そうなんだ？　それが気に障る。

第二に、どんな感じに説明して欲しい？ と聞かれてもね……
こっちが困ってしまう。
何故そんな事を僕に聞くのだろう。

「シエワードさん、どんな感じの説明の仕方があるんですか？」

注文通り、言葉を丁寧にした。

「うむ。それで良い。

……そうだな。実際に身体を動かしてみるか、言葉で理解してもらうか、だが……

私としては、言葉で言っただけで理解してもらうのが一番手っ取り早く
って良い。そしてその方が、さっさと終わる」

僕と言う人間は、時に人の言葉に過敏反応を示す。これは自分でも
も重々知っているつもりだ。

そんな僕の目から見ての話だが、シエワードがとにかく僕を毛嫌
いしているように見える。そして、それが気のせいではないような
気がするのだ。

きつとシエワードは、僕がさっさと何処かへ行けば良いとも思
っているのではないか。

そこまで来て、僕は頭を使う。

ここは、素直に言葉での説明を頼むか、それとも面白そうだから
あえて逆らうか。

僕としては、シエワードがどんな奴なのか分からないから不気味
だが、あの態度のでかさには腹が立つ。

そして、僕の好奇心は訴えてくる。それならばちょうど良い、一
回逆らってみると。

でも、僕の中の慎重派は声をそろえて言う。ここは低めの姿勢を

貫くべきだ、しばらく様子を見た方が良いと。
うーん、どうしたものか。

そんな時に、僕の背後の闇の中から声がこだました。まさに、神出鬼没。

『私は実際に身体でもって覚えた方がよいと思うが、どうじゃな、シエワードよ』

こ、このタイミングでなぜ“第三の声”の主が喋り出すんだ？
しかも、その威厳の中に何かを期待しているような声で。

「そ、そんな……いや、

しかしですね。そうそう、彼の意見を聞いてみましょう。彼が分かり易い方が私としても良いと思うのですよ」

シエワードはあくまでも僕をさっさと追い払いたいらしい。

僕も、ここまで露骨に嫌われては敵わない。というか、こっちがひたすら低めにでていたというのに……

この瞬間、僕の中の好奇心が、慎重派の構えていた最後のバリケードを突破した。

「シエワードさん、僕、『裏世界』ってやつを実際に自分の目で見てみたいんです。

僕としては、是非とも自分の身体で覚えてみたいと思ひまして」

シエワードは沈黙した。

辺りの空気がジメツとして雰囲気まで黒い霧が深くなった。背景の黒が、どこからともなく僕に迫ってきたような気がした……

しかし、それは一瞬だった。

「では、さっさと出かけてきますか、久しぶりに。おまえは運が良い。ラッキーな人間ですよ、実に幸運な奴だ」

……言葉の棘々しさって、怖い。そして、痛い。

『表世界』で何百、何千回と思つた事を、今ここでも思つ僕だった。

第5話：この世界を、人は『裏世界』と呼ぶ（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

一言断っておきます。“存在”改めシエワードの台詞に何か違和感を覚えているかもしれませんが、それでいいんです。あとしばらくで、登場人物達の自己紹介に近い内容が出てきます。その時にはつきりするでしょう……

第6話：先代からの頼み（前）（前書き）

孤独。周りに誰もいなくなると、自分の周りが全て無くなって消えてしまうような錯覚を覚える。特に、その感覚を初めて味わう時の恐怖は筆舌に尽きない。

でも、この時に人は一番成長するのではないか。

周りに頼れる他力がなくなった時に、その人自身が出てくるのではないか。

第6話：先代からの頼み（前）

シエワードは、その後何だか闇の中でガサゴソやっている。何かを探しているのだろうか？

姿が見えないから、何をやっているのかとつても気になる。

「シエワードさんは、今は何をなさっているんですか？」
と聞いても、無視。

「僕、何か悪い事を言いましたか？」
と切り出しても、シカト。

「あの、シエワードさん？ 聞いてますかー」
とここまで掘って、ようやく返って来たのが、

『ああ、聞こえている。聞こえているとも！ だから、少しは黙って待っていてくれ！』
と叫ぶ声。

……何か、気まずい状況の中で、引き伸ばしに伸ばした時間がようやく終わり、シエワードがただ一言言った。

「出発するぞ。さあ、付いて来い」

……付いて来い、って言われてもねえ。

「お、遅いぞ！ さっさと行く……あ、そうか。おまえに私は見えなかったのか。じゃあ、このプランは無理だよ、はい。これは仕方

ない」

……そこまで僕に関わりたくないのかよ。

というか、僕はあいつに一体何か悪い事をしたのか？ 黙っていれば抜けぬけと好き勝手言いやがって。

「て、てめえ、いい加減にしろよ！

こっちの身にもなってみやがね。おまえは何様のつもりだ！」

我慢という名の堤防はついに決壊した。

……あれ！？

僕は確かに空気を揺らす勢いで怒鳴ったはずだ。

でも、その次に全くシエワードの反応がない。何か言い返してくと、120%確信していたのに。

そして、限りないような長い沈黙が訪れる……

何か変だ。この空間に来てから変じゃなかったものなんてない。

でも、明らかに今の状況は変だ。

いくら待っても、あの偉ぶり屋のシエワードが何にも言わないなんて。

どうなってるんだ！？

……その後、さらに待った。しかし、まだ誰も答えない。何にも音がしない。

僕はパニックになってきた。頭の中がぐるぐる回り出した。だんだんと気持ち悪くなってきた。

もしかして、シェワードに愛想を尽かされたのか!? しかし、そんな一方的な事って……

でも、ここは冗談抜きで僕のもとといた世界じゃない、としたら。

ここでは、言葉しかお互い交わしていないのだから、原因となりうるのは僕の言動しかないのだが……

あいつが、僕とほとんど正反対の物の捉え方を持っていて、僕の言葉が思わぬ鋭い凶器になっていた、とか。

それが耐えられなかったのか?

それを聞いて、僕に好意的だった“第三の声”の主すら僕を見捨ててしまった、とか……

僕は、怖くなった。

暗い所が怖い、とかじゃない。目の前が何にも見えないのが怖い、という事でもない。

シェワードの反撃が怖い、なんてものでもない。

僕が怖れたのは、ここで、訳の分からないこの空間で、ひとりぼっちになってしまったのではないかという事。

『……そ、そんなのないよ。ひとりぼっちは怖いよ。』

……助けてくれ。誰か、誰でもいい。僕を独りにしないでくれ!

……帰って来てくれよ!』

無我夢中で叫んだ。

このままだと、僕というものが真っ暗な闇に埋もれて、誰も気付かないうちにいつの間にか消えてしまいそうに感じて。

「……やっぱり、じゃな。おまえさんは、あいつとよく似ておるわ

い

とても長かった。誰も答えてくれない沈黙が。答えてくれたのは、“第三の声”の主だった。

「怖がらせてしまつて、すまなかつた。私がこの空間を一時的に固めただけだ。

おまえ達のいた、『表世界』で言うならば、時間を止めたようなものだな。

私はおまえという人間をもっと知りたくつてな。

大丈夫だ。周りは何にも変わつてはいない。

シエワードだって、おまえさんのちよい先の辺りにちゃんという

とにかく、誰か答えてくれて良かった…… ようやく心が落ち着いてきた。

それに、今はとても恥ずかしかった。自らの顔の周りに熱が集まるのを感じた。

何だか不思議なのは、今の“第三の声”の主は、さっきまでとは全然違うような気がするという事だ。

声が鋭く、何だか絶対的に重い何かを背負っているような声。これは一体……

「おまえさん、あいつ、シエワードのわがままをよく聞いてくれているのう。それが私には嬉しかったんじやよ。

……これまで、ここの空間に辿り着いた奴らは、みんな耐えられなかつたんじや。

あいつ、シエワードは昔、いろいろあつてのう。まあ、それが全ての原因とは言わないが、あんな高飛車な性格になつてしまった。

おかげさんで、ごく稀にこの空間におまえさんのように降りてくる連中と、うまく打ち解けることができなかつたんじゃ。軽く言えないほど長い間な。

……私は、あいつには楽しくやって欲しいんじゃよ。

あいつが暗闇に打ち震えるのが見たくないんじゃよ」

“第三の声”の主の言葉は、まるで子を想う父親のような言葉だった。

というか、まさにそのものではないのだろうかと思つほどに……

第6話・先代からの頼み（前）（後書き）

今回もご一読、ありがとうございました。

今回から次々回までは“第三の声”の主がメインになります。彼の大きな出番です……ここからは、中、後と続きます。

第7話：先代からの頼み（中）（前書き）

出来事。それは、おこるべくして起こったものなのか、いきなり突発的に起こったものなのかの区別はつかない。

起こってしまった事を、人は時に客観的に見れなくなる。でも、それはそれで良かったりする。

客観的すぎると、その基準が自分の中で埋もれてしまった時、どうにもならなくなるだろうから。

第7話：先代からの頼み（中）

この世界で、初めて自分の名前を呼んでもらった。

この感覚。何か分からないけれど、どこかと自分が繋がっていて、決して独りではないと思えた感覚。

“第三の声”の主は、きつと真剣なんだ。

顔を見なくつても分かるんだ。こういう、どこかを貫くような言葉を言っている人の態度つて。言い方や口調、普段との違いから、感じる物が何かしらある。

“第三の声”の主は、ここで威厳を少し和らげて話し出した。

珍しく、何だか僕に頼み込むような口調は柔らみすら感じた。

「私がおまえにどうしてこんなにてこ入れするのか、おまえには不思議だったじゃろう。」

でも、私には分かるのじゃ。おまえさんはあいつ、シエワードに無い物、でも必要な物を持っておる。

その上、相性も良さそうだったからな。

……詳しい事は、今は言えぬ。

それでも、私のこれ一つの頼みじゃ。どうか、あいつの“パートナー”になって欲しい」

僕には分からなかった。

どうして、僕にそんな物があるなんてあいつには分かるのか。自分で僕は知っている。何にも無い事ぐらひは。

むしろ、負になる物しか持つてはいないだろう……

自分で分かるんだ。謙遜なんかじゃない。

『僕はどんな人間なんだろう？』

と自分の奥へと自問してみる。これまでに、何度となく自分へと突き付けてきた言葉。

……やっぱり、明確な解答は、返って来ない。その代わりに、これまでの様々な思い出が、ポツと頭の中に浮かび上がっては沈む。それが幾度となく繰り返される。

そして、その中をかなり鼻屑目に探してみても…… やっぱり、僕には人に堂々と自慢できる物なんて無かった。

当たり前だけれど、僕は他人より自分が可愛い。

ここに来る前、あいつらの言う『表世界』にいた頃は、人には誰にでも優しく接していたことはあったかもしれない。

けれど、僕は所詮偽善者だった。人に感謝されたいが為の行いだった。

何より、天然の偽善者、なんて人はいないだろうが、いたらその人はどんなに幸せだろうか。自分が人に感謝されたくって善行を積んでいる人間だと気付かない人間は、どんなに晴れ晴れとした気分なんだろうか……

僕は知っていた。僕が人に優しくするのは、鶴の恩返しのような物を信じてやっているのだと。

交番にお金を持っていけば交番にいるおまわりさんが誉めてくれる。

運良く落とし主が現れたら、お返しにきつと何かくれるだろう。

勿論、これが理由の全てだと言う訳ではない。

後の残りは、人に嫌われなくなかったんだ。要は、八方美人だった。

「僕は、あなたが考えているような人間じゃない。それは知ってるんだ。だって、僕は……」

僕は、期待されるような人間ではない、こう言おうとした。しかし、“第三の声”の主は優しくかった。

赤子を寝かせる時の母親のような声で、僕の声をそっと遮った。

「おまえさんのせいではない。あれは、不可抗力じゃ。

私が認めてやるとも。だから……」

僕は、これ以上偽善を続ける気も失せていた。だから、こんな異世界に行く夢を見るんだ。

それに加え、こんな見ず知らずの爺さんからの同情も痛かった。だから、遮り返した。

「あなたは、何があったのか知ってるんですか。

知らないのに、知っている振りしないで下さい！」

これで、“第三の声”の主は黙ると思っていた。でも、予想もしない答えが返ってきた。

「償いをしたいのか……でも、おまえさんに何ができるんじゃ？

おまえさんのせいではない。あの人が死んだのは、仕方ない事だつたんじゃよ。」

あの倒れてる人はどうしようもなかった。

おまえさんが気に病むのは方向違いじゃ」

……これは、絶対に夢だ。

例えるならば、自分が相手に向かって名乗りさえもしていないのに、相手が自分の氏名、性別、住所等を全部知っているような話だ。こんなの、反則だ。冗談じゃない。夢じゃなかったら、ここは何

処だっって言っただ？

僕は、頭が真っ白になってしまった。

何か急に“第三の声”の主がこれよりもずっと怖くなってきた。これが、畏怖、つてもものなのだろうか。

恐る恐る聞き返してみた。怖れていては何にも始まらないから。僕がここで学習した事の一つかもしれない。

「……あなたは、一体何者なんですか？」

それを聞いた“第三の声”の主は、しばらく答えなかった。

それで、『あいつ、シエワードには秘密じゃぞ』と用心深く言うてから、さらっつと答えた。

「私はまさに、

『私はおまえのいた世界のことなら何だっつて知っているし、その世界で起こった出来事を変えることだっつてできる。そんな存在』じゃよ」

彼は、何処かで聞いたことあるような、無いような台詞を僕の耳元でそつとつぶやいた。

暗闇は、まだ黒い。

でも、輪郭に近い何かを咄嗟に見た気がした。良くは分からなかったけれど。

第7話・先代からの頼み（中）（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

僕が題名に挙げている“先代”が、どうしてここで出てくるのかは分からないと思います。

でも、あとで大事になってくるので。

第8話：先代からの頼み（後）（前書き）

無知。何にも知らなくって、世界がただ単調な一色に見えている状態。

知らないほうが幸せだった、何て事もあるだろう。

知ったからこそ、不幸になったという事もあるだろう。

しかし、私達は多くの事を無意識の内に知りたいと欲している。

だから、動くんだ。

じつとしては、狭い範囲をぐるぐる回っているだけで、退屈だから。

第8話：先代からの頼み（後）

その言葉、それはシエワードが僕に言った言葉。

僕がこの真つ暗闇に来てすぐに、あなたは誰だと聞いた時に返事として返ってきた言葉。

何だかだんだんと、僕の頭がこんがらがってきた。

「……今の発言については、そんなに深く考えないこと、じゃ。

それに私が今言ったことは、細かいことを言えば、仕事上の守秘義務に触るからもう。」

あと念を押しておくが、シエワードには、私がこのことを話していたということは絶対に秘密じゃぞ」

これ以上は僕は知ることができない訳か……でも、守秘義務ならば仕方ない。

けれど、僕が冷静さを取り戻してくるに従って、どうして“第三の声”の主が、僕をあんな目に遭わせたのかの理由を聞かないと気がすまない気持ちになってきた。まあ、当たり前だが。

「どうして僕をあんな目に遭わせたのか、の説明はまだ聞いていませんよ」

そう僕が感情を抑えながら言うと、“第三の声”の主はしばらく沈黙した。

そして、声を優しくして話し出した。

「これからの、私の言う事を良く聞いて欲しい。」

おまえさんをあんな風に独り暗闇に放っておいたのは、おまえさんがあいつによく似すぎておったから、どこまで似ておるのかやってみたくなくてな。ただそれだけじゃ。

いやあゝ それにしてもおまえさんの場合は、シェワードが独りぼっちになった時に叫んだ台詞と全く同じ台詞を叫んでおったからの……

老いた爺のちょっとした悪戯だと思ってくれ。本当にすまなかったとは思っておる。

でもま、大抵の人間はああいう状態になるんじやが、あいつと言一句違わないで叫んでおるのは、これまでに無いパターンじやったもんでのう。

ここまで行くと感心物じやった。笑いを堪えるので必死……いやいや、まあそんな事は無かったがの「

……あの声から、どうやってすまなかったと思っている気持ちを伝えているのか、それはまあ置いて置いて。

いろいろあつたんだな、シェワードも。でも、この“第三の声”の主は全然読めない。

これから何を僕に伝えたいのか、が見えて来ない。

「おっと、本題に入ろう。」

私は実は、あいつ、シェワードには憎まれるべき存在なのじやよ。いろいろあつてな……

でも、あいつは私の本当の正体を知らない。私の本当を知らないんじや。

だから、これまで私を“パートナー代理”の様にして近くに置いてくれていたんじや……でも、もう悔いは無い。

おまえさんに、私の去った後にシェワードを見守って欲しい。

でも、もしもという事もある。これからおまえさんは、シエワードと『裏世界』の事を知り歩く事になるだろう。その期間を“臨実試験”とする。

その期間中に、シエワードにおまえが愛想を尽かされたら、その時はまた考えよう」

僕には、もう考えている事自体が頭の中でちぐはぐになっていた。分からない事が多すぎる。でも、彼は本気なんだろう。逆に言えば、それだけしか分からなかった。

「……何故だ？」

聞いてみたい事は、これで全てだった。

何故、そんなに僕を重く見るんだ？ ただ、シエワードとちよつとばかり似ている所があったらしいだけの僕に。

何故、彼はシエワードに嫌われているんだ？ 悪い人には見えな
いのに。

何故、彼はあんなにシエワードの事を想っているのに、こんな夕
イミングで身を引いてしまうのか？

分からないことだらけだったから、むしろ聞く事がそれだけしか
なかったのかもしれない。

「私は、人を見る目だけは自信があるんじゃない。

私はおまえの中に宝石を見た。それを信じる。これで、これで良
いんじゃない……」

“第三の声”の主は、何だか達観していた。何を言おうとも動か
せない、固い意志が震えるように伝わってきた。

でも、それでも僕はこの言葉を言おうと思った。僕の、これまでに学んできた事を。

「……諦めたら、止めてしまったら、それで終わりですよ。本当に絶対に後悔しないって言う自信があるんですか？」

あなたは、あんなにもシエワードの事を想っている。それは、あんな奴にだって十二分に伝わっているはずでしょう。

それでも、去ってしまうんですか？ まだまだ……」

言葉を次いでいる途中でふと思った。僕の言葉は、今僕の言おうとしている事は何なんだろう、と。

僕は、彼から感謝の言葉を聞きたい為だけにこんな事を言っているのではないか？ 僕としては、どうなんだろうと……

僕が言葉を止めた所を見計らったように、“第三の声”の主は語りだした。

「やっぱりな。全くもって、おまえさんは面白いよ。」

これでこそ、安心してわがじゃじゃ馬娘を託せるというものじゃ

……

私には分かっているよ。

おまえさん、今の言葉の中に、確かに少しぐらいは私から何かを返してくれる事を期待していたじゃろ？ 仕事柄、そういう事はよく分かるんじゃないよ。

でもな、それは悪い事じゃないと私は思うぞ。

人間とは、本質的に人からのお礼を嬉しく思うようにできている。例外は無いんじゃない。何にも異常な事では無いんじゃないよ。

じゃあな。私はもう語らない」

僕にとっては何ら感動できる場面でもない。泣ける所でもない。でも、僕は何か心の芯に熱くなったものを感じた。何か言い足りない気はする。でも、これでいいんだろう、あの爺さんにとって。

『さようなら』

これだけ話し掛けた。

『私の名はクワーズット。では、九条涼太。わが娘を頼む。おまえさんの気が許せたら、だがな。……私は信じているぞ。』

それから…… また、気が向いたら様子を身に来るでな』

どこかで、涙を必死に堪えているような声がする。いや、そんな気がすると言い直しておこう。

最後だけ、闇はちよっぴり正直だった。

そして、僕が驚いている事があと一つ。それは、シェワードが女性だという事だった……

第8話・先代からの頼み（後）（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

これで、この次からはようやく『裏世界』の見物へとシエワードと僕が動き出します。

でも、なるべく理論の部分は長々と語らないように注意していきたいな……と、以前の反省から思っております。これからも、よろしくお願ひします。

第9話・出発の前に（前書き）

出発。それは、最初に一步を踏み出す事。

途中がどうなっているかなんて分からない。そして、無事に終着点に到着する事ができるのかも定かでない。

でも、出発する時ぐらいいは楽しく行きたい。後がどんなに苦労だったとしても、気持ちだけは持ちこたえられるような気分になるから。

第9話・出発の前に

その後、ここの空間がゆっくりとふにやりと解けて、元通りに戻った感覚があった。

僕は、その瞬間に先手を打った。

「シェワードさん。これから、よろしくお願いします。

僕、一生懸命にあなたに付いて行こうと思っています」

何だか微妙な気分だったが、あんなに僕の事を見込んでくれる“第三の声”の主、クワーゼットの言葉が心に響いた。

僕だって、シェワードを真剣に見極めてみようではないか。そんな気になった。

「……ま、まあよろしくな。

ところで、一体どうした？ 急に態度が変わったな……」

シェワードはいきなりの事で面喰っているみたいだ。ま、当たり前だろうな。

そういえば、僕が、これから先の“臨実試験”なるものに合格してしまつたら、どうすればいいんだ？

クワーゼットその時だけ帰って来てくれるとはあの様子では考えられない。

それに、まずシェワードはクワーゼットがここを去ってしまった事自体を知らないんだからねえ。

まったく、あの爺さんは考える事が全く分からなかったな、最後まで。
これから僕はどうすればいいんだか。どうしようもない…… 何か、目の奥が痛くなってきた気がする。

『私が考える事が全く分からない爺さんで悪かったのう。』

私は、不安じゃからおまえにわが身の一分身を渡しておいたのじや。

原理は言えん。でも、こんな事も私の仕事柄、できてしまうのじやよ。勿論、シエワードには全部内緒、じゃぞ』

……あ、あり得ない。あの爺さんは何者だ!?

僕の頭の中まで読む事ができるのかよ。まず、どこから話してるんだよ。

あの爺さん、何かできない事あるのかって話だろ、ここまで行ったら。

『はっはっは、私の辞書に不可能なんて文字は無い、なんて言ってみたりしてのう。一回言ってみたかったんじやよ』

少しでもあいつを格好良いなんて思った僕が馬鹿だった……

ん？ ズボンのポケットの中に何かごつごつした物を感じる。こんな物、僕は持っていたっけ？

それを取り出してみたら、何だか奇怪な形をしていた。それに何だか、鈍く光を放っている。

その光がポケットからちよっぴり漏れ出していて、闇の中では違和感を感じさせるそれ。

どんな形だといえば、ヒト型、つまりは星型、の上にちょっと大き目のサイコロを乗せたようなデザインだ。

そうだな……出来損ないの宝石に近い、かな？

平べったい星型の部分はツルツルしていて、群青色をしている。その真ん中に乗っかっている大き目の立方体は水色で、透き通っている。

そして、その綺麗でもあり不気味な物の、真ん中の立方体の部分からクワーゼットの声がしていたのだ。

「な、こんな物を僕にいつの間に……？」

クワーゼットは不敵に笑った。

『ふふっ、ようやく気づいたか。遅い遅い、鈍いおう。こんな事では、おまえは生前に何をやってきたのやら』

「余計なお世話だ。僕は死んではない！ これだけは譲れない」
あの爺さんめ。ますます僕の頭の中が混沌としてきたじゃないか。

『まあ良い。これは私からの贈り物じゃ。ポケットにそっと入れておいて、決してシェワードにはばれるんじゃないぞ』

………了解さ、クワーゼット。

でも、僕は分かっているのさ。あなたは、シェワードと離れたくないんでしょう？ そうならそうと、さっき素直に僕に言うなり……

『こ、こりゃ！ ……最近の坊はませておるから困るわい。』

まあ他にもかくにも、宜しくな。しばらく、おまえには世話になるじゃろつて』

「お〜い、おまえ。一体誰と話している。ついに気でも狂ったか？」
シェワードの声だ。何だか、声の方向から哀れみの視線を感じる
のが痛い。

こんな事をやっていたら、僕の頭の中が面白い事になっちゃった
ように見られるじゃないか。

「そういう事だ。今はこっちも忙しいから、また後でな」

僕は会話を強制的に終了させる事にした。ポケットの中は、今度
は静かになった。

「まだ正気は保っていますよ〜 大丈夫ですとも」

そうして、あの丁寧口調でシェワードに返事をする僕であった。

「さ、さて。ここで重大な問題がある。

それは、私の姿がおまえには見えていない事だ。

……だから、もうちょっと私の声のするほうに寄って来て欲しい
のだが」

僕の気のせいだろうか。僕がシェワードが女性だと知った途端に
女性っぽくなった気がするのだが。先入観は大きいものだ、つての
もまんざら嘘ではないみたいだ。

「了解です〜」

僕はそう言って、そっとシェワードの声の方に歩いていった。

そして、手を繋いでくれるのでは、と思ったからか、ふと手を差
し出した。

無意識に僕がやった、しかし後から思えば不自然な動きだった。

「改めて、はじめまして。シェワードさん」

すると、ずっと何か近づいてきた気配がして、僕の手には恐る恐る震えながら触れてくる手があった。

その手は小さめで、冷たかった。

「じゃあ、出発するぞ。

……私の方こそ、改めて、はじめまして」

もう、何が何だか分からない。でも、ここにいる人達は悪い人ではない。

これだけは分かった。さて、『裏世界』というもの、とくと見せてもらう事にしますか。

闇の中にも温かいものはあった。

第9話・出発の前に（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

さてさて、次回からシエワードによる『裏世界』紹介になります。ちなみに、シエワードの姿ももうちょっとで出てきます。お楽しみに。

第10話：光のある場所 「裏世界のロビー編」(前書き)

感覚。身体感覚器官と神経によってもたらされるもの。

正常だといわれる感覚であっても、異常だといわれる感覚であったとしても、身体は徐々に慣れていく。それが怖いものなのか、怖くないものなのか。

私は怖い。これまでに自分が根っことしてきたものが、いつの間にか勝手にすりかわっているなんて事はまっぴらだ。

しかし感覚は、どこまで行っても自分で感じ取るもの…… その感覚がその人となりと一体となった時、その大きなものを何と呼べば良いのだろうか？

第10話：光のある場所 「裏世界のロビー編」

二人で手を繋いだ。その後、シエワードの手の震えが収まるまで、しばらく時間がかった。

そして、シエワードの震えが止まった時、これから僕はどんな事を教えてもらえるのか、少しドキドキしてきた。

「まあ、そうだな…… これからどうしたものか。

この『裏世界』の事は実際に歩いてみるのが一番だといえば一番なんだが、おまえには移動の仕方から教えないとダメだな」

移動の仕方なんてあるのかよ！ 色々とめんどくさい場所なんだな……

「……移動の仕方とは、どんな事なんです？ 普通に一步一步大地を踏みしめて歩けばいいのではないのですか？」

僕がこう言うと、シエワードは待っていたように言葉を紡ぎ出した。

「そんな事は誰でも分かるわ！

そうだなあ、おまえから見ると…… 言うなれば、別の空間にワープする事ができるんだよ、この『裏世界』ではな」

さすがは夢の世界だな。これしか感想が出て来なかった。本当にそんな事ができるのかよ、おいおい。

ここまでファンタスティックな夢を見るようになるとは、僕も疲れしているんだな…… と少し苦笑が混じる。

「早く、やり方を教えてください！ 便利なんですね、この世界って」

……ああ、この丁寧な喋り方っていうのは疲れるな。

「勿論だ。こちらだって、おまえがワープできないと『裏世界』を紹介してやれんからな。

それに、私の言い方からしたら、たいそれたものに聞こえるかもしれないが、実際は簡単だ。

理論はまずは置いておこう。何故できるのか、などというのは後で余裕ができた時に、な。

では、早速。

まあ、ぶつちやけて言えば、想像しろ、としか言い様がないんだ。実際にやってみよう」

僕は、何だかいきなり啞然とした。期待していれば、『想像』しろ、と言われただけ。

ホントに適当な夢だな…… もうちょっと、一捻りはないものかねえ。

……でも、それができたら面白いなと一瞬でも思ってしまった僕。

僕は、さも冷静なような口調でシェワードに確認を取る。

「想像、たとえば、行きたい所を頭の中ではつきりと思ひ浮かべれば良いのですか？」

僕の質問を受けて、シェワードはしばらく唸っていたようだ。

「それだと、半分正解ってところだな。正確には、中継地点が要るんだよ。そうだな…… おまえがこの世界ではじめて意識を持った場所を経由して、目的地に行くんだ。」

私は説明が下手だ。だから、実践に移るぞ。まずは、その場で目を瞑ってみろ」

僕は、シエワードの言う通りに目を瞑ろうとした。が、その刹那、背中の辺りにひやっと冷たい感覚が走った気がした。

僕は、まだ暗闇が怖いんだ。慣れはしたけれど、怖いんだ…… そんな感触は嫌だった。でも、周りがほとんど見えないう点では、目を開けてても閉じていてもあまり変わらないだろう。そう信じて、シエワードの言葉どおりに目を瞑った。又、それと同時に彼女も少しだけ信じて。

「目を瞑ったら、まずはおまえがこの『裏世界』で一番最初に来た、何だか懐かしい風景だった場所を思い浮かべてみる」シエワードが続ける。

え〜つと、懐かしい風景？
そんなものあったっけ……

あ、あったあった。僕がこの空間に来る前に、何だか昔何処かで見た事のある風景の場所だ。

その記憶を頭の中の引き出しから探し当てると、僕は全神経をそちらに傾けた。すると、だんだん思い出してきた……

「その場所を「裏世界のロビー」と呼ぶ。覚えておけ。」

そのイメージを、一・二・三で強く念じてくれ。そうすれば、まず「裏世界のロビー」に行ける。
では、いくぞ」

シェワードの説明の仕方は、何だか僕の頭の中を読めているみたいにすらっと頭の中に入ってきた。

なんだ、なかなか説明がうまいじゃないか、シェワード。

「はい。大丈夫です」

僕は答えた。そして、いよいよ神経を尖らせて、頭の中の一点に集中させる。

「じゃあ、いくぞ。

一……二……三！」

手を繋いでいた、その二人の繋がった部分が一瞬ぐつと揺らいだ気がした。

僕は、それを無意識のうちにぐつと掴んでいた。

シェワードの手は、何だか小さく感じた。そして、さっきよりもほんの少しだけけれど温かみを感じた。

……僕の周りの空間が一点にぐわつと集中していく。

そして、空間を構成していた要素が飲み込まれていく感じがして、一点が盛り上がって、それがパツと弾けた。

それが完全に弾けきった時、ようやく周りが止まった……

「……おい、もう目を開けていいぞ」

シェワードの声を合図に、僕はその瞬間に目を開けて周りを見渡した。

……ああ、この空間だ。僕が一番初めに来たのは。

周りが何だか懐かしい感じがして、でも風景は透き通っている。上から光が燦々と注いでいて、その広大な空間全体が明るかった。例えば、天井のない巨大な屋敷の吹き抜けのようだった。

「こういふ空間、いいですねえ」

気づけば、僕はシェワードのいると思われる方向に向かって気軽に喋りかけていた。

「私も、ここは好きなんだよ。心が癒される感じがして……
そ、それはさておき、私にそんな事で気軽に話し掛けるなど言っただろう。まったく、おまえってやつは」

……何だか複雑な奴なんだな、シェワードって。

僕は、何故か口元で笑っていた。

「おい、とにかく目的地に行くぞ！

次に行くのは、「裏商店街」と呼ばれているところだ。いろいろと買物があるからな。

でも、おまえは当然そこがどんな場所なのかイメージできんだろう？ 初めてなんだから。

こういふ時には、手を繋いでいる私がおまえを引っ張ってワープする事だってできるんだ。

だから、おまえは目を瞑ってじっとしていればいいからな」

あれ？ じゃあ、今だって別に手を繋がなくっても一人一人でする事ができたって事だよな……

僕が考え込もうとすると、シエワードが突然、慌て声になって突っ込んできた。

「急ぐぞ！ 予定が詰まってるんだ。さあ、急げ！」

……『裏世界』って、そんなに悪い所ではないらしいな。

閻魔大王の君臨している世界とまでは行かなくとも、もっと灰色の世界を頭の端に想像していた自分が、何だかすごくちっぽけに感じられた。

久しぶりに浴びるまっさらな光は眩しかった。しばらくは目を開けてられなかったほどに。

でも、この上なく心地よかった。

第10話：光のある場所 「裏世界のロビー編」 (後書き)

ご一読、ありがとうございました。

すみません、出発までに最初から考えるとかなり時間がかかってしまいました……。でも、これからはしばらく『裏世界』見物に近い感じになっています。

次回は「裏商店街」の前話。お楽しみに！

第11話：『何でも屋』にて 「裏商店街編・前」(前書き)

新しい世界に来て、僕は戸惑う……

自分の周りの、僕とは何だか全く違うものでこれまで形作られてきたように感じる人々。その人々は、その人々の輪の中に僕は入れるのだろうか、と心の何処かでは不安で堪らない。

でも、自分の知っている温かさを相手が知っている、と分かった時に僕はホツとした。何も無くても嬉しくなった……

第11話：『何でも屋』にて 「裏商店街編・前」

「裏世界のロビー」からワープして、僕が次に目を開けた場所は、シェワードの言う「裏商店街」なる場所だった。

パツと見える様子としては、簡単に言えば、シェワード達の言うところの、僕のこれまでいた世界の事である『表世界』の商店街と似たような雰囲気のところだった。

アーケードがあつて、通りの両側に所狭しと店が並んでいる。店の外装も様々で、見ていて色々あるというのはよく分かる。

でも、何だか暗い感じがした。幽霊商店街、とまでは言わない。けれど、活気がいまいちというか、人の流れがか細いような気がする。

空は、若干黒めの暗い藍色だった。地面の色は、茶色がかった黒といった感じか。

実際に歩いてみれば、かなり大きい商店街だった。

この「裏商店街」を歩いていると、いろいろな店を見かけて新鮮だった。僕は、まるで子供のようにワクワクとしながら歩いていた。

どれも凝った変わった名前だったが、ちなみに僕がシェワードと通った中で一番印象に残ったのは、やっぱり「白猫屋」かな？

シェワードに聞くところによれば、あの店は結構人気があつて、お客の『表世界』での一番輝いている思い出を何かの形にしてくれるお店、らしい……

ま、もちろん『表世界』にもあるような普通のお店も結構あつただけ。

ワープしてからどれくらい歩いただろうか、そこそこ歩いた時にシエワードは止まった。

当然、手を繋いでいる僕も一緒に止まった。そして、僕達二人の目の前にあるのは……「何でも屋」という看板がかかっている、古びたお店だった。

そこに、僕とシエワードは入った。

「おじゃまします〜 久しぶりに来ました、シエワードです!」

シエワードの声が、何だか張り切っている。よく分からないが……

その店に入ってみると、ぱっと見、『表世界』でいう古道具屋みたいなお店だった。

照明は若干暗めだろうか。薄暗いランプが天井に数個取り付けられている。

色々な道具らしきものがあちこちに、棚に整頓され、箱のようなものに溢れるほど詰め込まれ、また床に転がっていた。

僕が最初に思ったのは、何故だろうという事だ。他にもたくさんお店があったのに、他のお店には目もくれずにシエワードが入ったのはここだった。

そして、妙に嬉しそうなのが気にかかる。このお店には、一体何があるんだろうか……

僕がそんな事で頭を悩ませていると、奥から誰かの声がした。

「いらっしやい〜」

あ、シエワード? よく来ましたね」

年をとった、年配の女性の声だろうか。声からすると、そんな感じがする。

それに、シエワードとすごく親しい人のようだ。

僕が半ばぼかんとしていると、シェワードが僕の手をさっと振り切って、その声のする方に駆けて行ったみたいだ。

「お久しぶりです、マリー！」

店の奥のほうで、シェワードの嬉しそうな声がますます輝く。

「おやおや、本当に久しぶり。近頃の調子はどうですか？」

マリーと呼ばれる女性の声は、シェワードを優しく包み込んでいく感じがした。

それからしばらく、シェワード達は完全に二人の世界に入って話し入っていた。

僕にも半分分かりそうな世間話だったり、何だかよく分からない内容の相談だったり。

でも僕から見たら、二人の会話は甘えんぼの子供と優しい母親の会話に見えていた。

二人の会話が一段落つくと、ようやく僕のほうにマリーと呼ばれた人物が店の奥から姿を現した。

「いらっしやいませ。当店の店主のマリーと言います。以後、お見知りおきを」

ぱっと見たところ、『表世界』では四、五十ぐらいの歳だろうかでも、口調からはもっと歳が若そうな雰囲気を持っている。

そっと笑っている、皺が若干寄りはじめた顔からは、何だか柔らかい人柄を想像させる人だった。

上にはアーモンドの実のようなベージュ色のカーディガンを羽織っていて、下には膝丈よりも少し長い、柔らかいピンク色のスカートをはいている。

全体的にやせ型で、第一印象としては優しそうな感じがする。

「僕は、九条涼太といいます。こちらこそ」

この人の前では、自然に礼儀が良くなった。

「ふふつ、シェワード、この方があなたの選んだ“パートナー”なんですな。

なかなかに見所のある子だと……」

マリーさんが、こんな事を言い出すと、シェワードが

「いいえいいえ。“パートナー”ではありません。これには色々と事情があるので！」

と慌てながらに受けている。

それを見ている僕は、姿の見えないシェワードの方を向いてくすつと笑ってしまった。

僕は、シェワードにここで待ちに待った質問をした。

「あの、このお店には何を買いに来たんですか？ シェワードさん」

僕がこんな言葉遣いをしていると、マリーさんがちょっと意外そうな顔をして、

『まあ、あの子ったら』と微笑んでいる。理由は……知らない。

シェワードは、そんなのはお構いなしに僕の質問に答える。

「ここに来たのは、おまえの為なんだ。私の姿が見えないと、いろ

私の願いごと

いと不便だろう?」

僕は、シエワードの答えについても理解が追っ付かなかった。
分かったのは、シエワードの口調が何だか恥ずかしそうだったと
いう事ぐらい……

第11話：『何でも屋』にて「裏商店街編・前」（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

今回は、裏商店街編の続きになります。

この次、です。いよいよ……

また、推敲なども徐々に行っていきたいと思っています。

誤字などがありましたら、できれば教えていただければ感激です。

第12話：不可視なものが見えた時 「裏商店街編・後」 (前書き)

現実じゆんじつは小説せうせつよりも奇あざむなり。こつこついいう事ことは、起おこらないと見みえてし
ばばししば起おこる。

それは、現実じゆんじつが小説せうせつよりも『普通ふつう』で『当あたり前まへ』だと先入観せんじゆくか
ら決きめ付つけていいるからではないだらうか。

事こと実じつはどうななのか、実じつ際さいはどうななのか。

それは、誰たれにも分わからない……

(ちなみに、『事こと実じつは小説せうせつよりも奇あざむなり』これは英国えいこくの詩人しじんバイロ
ンンが残のこした名言めいげんである)

第12話：不可視なものが見えた時 「裏商店街編・後」

僕には訳が分からなかった。まあ、この『裏世界』とやらに来て、訳が分かったことの方が少ないけれど。

でも、マリーさんは事情を把握したようである。

「ああ、シエワードが今回来たのは、“スケルトン・ポート”が入用だったからですね」

などと、マリーさんが突然シエワードの目的が分かったような顔をして言い出したからだ。

シエワードは、それを聞くとはばらく唖ってから、急に僕に真面目そうな顔になって訊いてきた。

「ところで、おまえはもし、私の姿を見てしまったとしたら。

いや、万が一の事だが、見ても笑わないか？ 馬鹿にしないか？」

……僕は、笑うつもりは無い。しかも、この偉そうなクワイゼットの娘の姿は是非見てみたいものだと思っていた。

だから、ここはとにかく大人しく従っておく事にしよう。

「はい、笑いませんとも。馬鹿にもしませんよ」と答えておく。

シエワードは、僕のその返事でも不満なのか、まだ訊いてくる。「本当だな？ もし笑ったら、私は『裏世界』の事をおまえに教えるどころか、二度と私の姿が見え得ないようにしてやるからな」

僕は、どうにもまた笑いたくなってきた。

いや、でもそこまで言われると何か重いな……この我が夢の世界をもうちよつと満喫していきたい気分だし。まだ、目が覚めるのは待つて欲しいところなんだから。

「大丈夫ですよ。僕は笑いませんから」
今度はもうちよつと真剣気味な声で答えた。

「……そうならば、マリー。」
“スケルトン・ポート”を一つ、注文しても良いですか？」

シェワードが、今度はマリーさんに注文を始めたようだ。
さつきから気になるけど、“スケルトン・ポート”って……何か、分かるような分からないような。

マリーさんが、それを聞くと店主らしく言った。
「ご注文、お受けしました。」

あ、シェワード。あなたがここまでしているのを見るのは久しぶりだから、代金は今回はチャラで良いですよ」

それを聞くと、シェワードは重ね重ねマリーさんにお礼を言っていた。
「その後、マリーさんは、『しばらく待つてね』と優しく言つと、店の奥のほうに戻つていった。」

だんだんと、心なしか薄暗いと思つていたランプが明るく感じられてきた。

それにつれて、僕の周りを取り囲むように並べられている道具類が目につくようになってくる……

私の願いごと
あ、そういえばこの世界ではどんな通貨を使つてるんだ？

僕の好奇心が、気づいていなかった抜け穴に気づいた。

「あの、シエワードさん。この『裏世界』では、どんな通貨を使っているんですか？」

僕がそう聞くと、シエワードはしばらく黙っていたが、僕が痺れを切らし始めたぐらいに、

「一言で言えば、それぞれの頭の中に持っている『イメージ』だな。それをこの世界で具現化して、物々交換……」

おっと、おまえにこんな話をして、まだ移動の仕方ぐらいしか満足に分かっていない奴には仕方ないか」

と、僕が心証を悪くするような言い方をさらっとする。

はあ、もうちよつと相手を気遣えないものかねえ……

それから、二人で何かやりづらい沈黙を共有しているうちに、奥からマリーさんが出てきた。

「できましたよ。では、その九条涼太さん。これを」

マリーさんが微笑みながら、何故か僕にその“スケルトン・ポーター”なるものを渡してくれた。

「あの…… これは、シエワードさんが注文された物では？」

と僕がシエワードに訊くと、

「おまえに必要なものだからここまで買いに来たんだ。付けてみる、そうしたら分かる」

と照れくさそうに言われた。

まあ、僕の好奇心は調子が良い事をいい事に、僕の中で好き勝手している。ここも、せっかくだしその勢いに乗ってみようか……
マリーさんは、こちらの二人のやり取りを見せずと微笑ましい顔をしている。

僕が見たところ、それは第一感、小さいアンテナのような形だった。

そして、その反対側がイヤホンのように少しフック状になっている。

下手な表現かもしれないが、全体の形は、数字の『5』の横棒が無いような形、とでも表現すれば良いのだろうか。

縦画がアンテナの部分、その下の丸っこい筆画の部分がイヤホンになっている。

僕がマリーさんに使い方を聞いてみると、案の定、耳につけて使うらしい。

僕は、その通りフックになっている部分を耳に付けてみた。

なかなかアンテナは重くなくて、付けごこちは悪くない。でも、何にも変わらないような……

すると、しばらくしてシェワードが消え入りそうな声で僕に小声で言う。

「そ、そうだな…… それで、私の声のするほうを向いてみる。

そうすれば、おまえにも私の姿が見えるはずだから……」

僕は、それを聞いてシェワードの声のする方向を瞬間的に向いた。

そこには…… 何かふてくされたような顔の、小さい女の子が立っていた。

僕から見たら、『表世界』でいえば、彼女は華奢な中学生、といったところだろうか。

髪の毛は黒髪で、前髪を左に分けるように二本の黒いヘアピンがぴかっとランプに反射して光っている。

また、服装は襟の付いた薄地の白いカッターシャツで、大きめのリボンが胸元に付いている。

黒いスカートは膝の上までの長さで、さらに黒い長めの靴下を履いていて、革靴だった。

雰囲気は、大人しそうな感じを漂わせている少女である。

何故あんなところに？ と疑問に思ったのは一瞬だった。頭の中のもやもやがいきなり無くなった時、僕は雷に打たれたように思考が停止した。

……世の中には、色々と予想だにできなかった事が起こるものだな、と苦笑いが漏れた。

第12話：不可視なものが見えた時 「裏商店街編・後」 (後書き)

ご一読、ありがとうございました。

と、その前にシェワードのイラストを描いて下さったひよかんさんに、ここで改めてお礼を言わせてもらいます。

ありがとうございました！

第13話：そして、裏市へ…… 『黒の書』編・一（前書き）

どこまで相手を信頼して良いものか。

それは、とても難しいし大切な決断だろうと思う。見誤ったりしたら、後で深手を負うのは他ならぬ自分なのだから。

でも、あまり考えたくは無い。そんな、自然な関係がずっと、無意識に続いていて欲しいと思うから。

僕は、何だか言いようもないものが心の奥から込み上げてくるのを感じた。

言いたい事が、口からそのまま出てきた。

「な、シエワードさん、僕よりも年下だったんですか！
つて、ええ〜！」

それを聞くと、シエワードが顔を膨らませて応戦してくる。

「この世界では、世界全体に時間という時を表す共通の概念がないんだから、歳なんてどうでも良いではないか。

そういう心が、差別を生むのだぞ！」

時間というものが無い、という事なんて、本来は驚くところだが、何だか目の前の出来事に比べたらどうでも良くなってしまった。

……てつきり、全く違う姿を想像していた。

でも、姿を見てはつきりしたけどシエワードはすごく変わっているよな。

口調、考え方、性格、どれをとってもあの姿には結びつかなかったし……

でも、僕はその時、不思議と笑った。しかも、清々しく。

何故笑えたのか、他の感情を表そうと思わなかったのか。それは毎度の事ながら分からなかった。でも、それはそれで良いような気がした。

私の願いごと
夢の中だし、そんな事はどうでも良い、この世界を楽しもうと自

分の中ですつきりしたのだろうか。
いや、それも何か違うような……

「シェワードさん、この丁寧口調、これから徐々に崩していいですか？」

話しづらいもので」

僕は、相も変わらずに柔らかく言った。

シェワードは意外だった。

あいつ、九条涼太は、私が年下に見えるからと言って、言葉を返して怒り出そうとしない。

これまでの人間達は、ほとんどの奴等が私の姿を見た途端、嫌な顔をして、偉そうだ、生意気だ、と口論になったのに。

だから嫌だったんだ。人間達に自分の姿を見せるのは。

だから、半ばここであいつとも言い合いをして分かれるつもりだった。私には、あ的主、じいじが近くにいてくれるだけで十分だから。

でも、あいつはそういう奴等とはちょっとぐらいは違うのかもしれない。

あのじいじが言っていたことも、一理あるのかもしれない……
ちよつとぐらいは信じてみてもいいのではないかと。

そうして、あいつの事をもうちよつと知りたくなった。

それで、私は言った。

「まあ、少しぐらいなら良いぞ」と。

すると、あいつは

「これからは、ようやく楽に会話ができそうですよ。

これからも、案内頼みます！」

とまだ丁寧な口調を保っていた。

ふっ、面白い人間だな。油断は禁物だが。

それから、僕たち二人は、マリーさんにお別れを言った後、「何でも屋」を後にした。

マリーさんは、僕たちが店から出て行く間際、僕にそつと囁いていた。

『あの子を泣かせたら、私が許しませんから。よろしくお願いしますね』と、相変わらず微笑みながら。

マリーさんは、本当に良い人だった。

でも結局、マリーさんにシェワードとの関係を聞きそびれてしまったのが少し残念だった。

シェワードに聞いても、どうせ答えてはくれないだろうし……

「何でも屋」を出てから、シェワードが元気良く次の目的地を言った。

「せっかくだしおまえには、これから共に「裏市」まで行って、この『裏世界』の全てがまとめてある書、『黒の書』というものを買ってやろう。」

ま、勿論見つかったらだがな。でも、私が見たところ、だいぶ前にとある古本屋で見つけたんだ。

ま、あれは買い求める者が多い故に、ほとんど手には入らないだろうが、な」

そうして、僕達は「裏商店街」の奥、定期的に市が開かれているという「裏市」まで歩いていく事になった。

道々、色々なお店が目移りする中、シェワードは目的地なる場所まで見向きもしない。少女にしては早歩きで、ひたすらに真っ直ぐ歩いていく。

シェワードの姿が僕にも見えるようになったので、さっきのよう二人で手を繋いでいない。だから、色々と目を取られながら進んでいる僕が、シェワードを後から追いかける形になった。そうして、僕がシェワードを見失いそうになるぐらい後ろになると、急いで走って追いつく。これをかなりの回数繰り返した気がする。

そして、ペースのアップダウンを繰り返していた僕がばててきた頃に、先に行くシェワードが、突然路地を右、左とくねくねと曲がり始めた。

これではあつという間にシェワードにおいて行かれてしまうのでは、と僕が危機感を持ってシェワードと歩調を合わせ始める。

そして、そのくねくねとした道の先に道がだんだん細くなっていて、さらに進むとまただんだん太くなってきた。道の色はずっと変わらず、茶色に近い黒がひたすらに続いている。

僕が、もうすっかりばてた声で、

「まだ着かないのですか……」

とひたすらに歩くシェワードに言つと、

「〔裏市〕つてのは、裏にある、表に出て来ない市場なんだ。だから、知る人ぞ知る市場なんだよ。それに、そんな所にも行かないと、『黒の書』なんて手に入りようも無いしな」

とすました顔で答える。

何だか自分でも気づかないうちに、苦々しく笑っていた。『裏』つて、『裏世界』にあるから付いていたのでは無いかよ、と。そっちの意味ですか、と。

さらに歩く事、『表世界』ではどれくらいの時間になるだろうか。僕としては一時間よりも絶対に長かったと思うのだが、この『裏世界』に来てから、僕の腕時計はぼやけて一度もはつきりとはその針を見せてくれない。だから、客観的には何もいえない。

シエワードの言う、この世界には『時間という時を表す共通の概念がない』と言うのは、なるほど本当らしい。釈然とはしないけど。そして、その事について詳しくシエワードに訊こうかなと思っていた矢先、ようやく目の前に市らしき集まりが見えてきた。

暗い藍色つぼかった空は、徐々に更に暗さを増してきているような気がする。

でも、シエワードの目は真っ直ぐだった。僕は、シエワードよりもずいぶんと子供なのかもしれないな、とふっとこれまでの自分の様子を省みて思い、恥ずかしくなった。

第13話・そして、裏市へ…… 「『黒の書』編・一」(後書き)

「一読、ありがとうございました。」

「ここから、シエワードの“仕事”について徐々に触れていきます。
よろやく、『願いごと』に関わってきます……」

「これからも、よろしくお願いします。」

第14話：『万書館』恐るべし 「『黒の書』編・二」(前書き)

迷宮。道がぐるぐると意図的に捻じ曲げられている空間。不規則が優遇され、まっすぐで見晴らしの良い風景は斥けられた場所。

曲がっている道をぐんぐん進む時のあの恐怖は、行き止りに遭った時の悲しき叫びは、ゴールに着いた時にしか報われない。これが、世の中。

第14話：『万書館』恐るべし 「『黒の書』編・二」

ようやく「裏市」らしき所に僕たち二人が入ったのは、『表世界』
で言えば、日が落ち切って、僕の家の場合、門限などとうに過ぎ
ているぐらいの時間なんだと思う。根拠は無いが…… でも、シェ
ワードはそんなのはお構いなしの様子だ。ひたすら、市の中を歩い
ていく。

この市は、さっきの「裏商店街」とはまた少し雰囲気が違うよう
に感じた。まあ、周りが暗くなっているからかもしれないが。

まず、「裏商店街」でも人が少ないと思ったのに、ここはさらに
人がいない。たまに、一人二人ぐらいとすれ違うだけだ。

それに、市場の中も、少し太めのメインストリートが一本通って
いて、その両側に出店がぼちぼちとある、という迷いようも無いつ
くりとなっている。

また、出店の数はなかなか多いのだが、そのほとんどが閑古鳥
の巢になっていた。でも、掘り出し物はあるらしく、その時々すれ
違う少ない客たちは熱心に品物に見入っているみたいだ。

この世界については何にも知らない僕がぱつと見ただけでも、い
かにも物珍しそうな物が置いてあるように思う。

シェワードに目的のお店を聞いてみても、『もう少しだ』と表情
をピクリとも変えずに答えるだけ。

好奇心はあるが、もともと小心者である僕にはどうにも不安にな
ってきて、しまいにはあの暗闇が恋しくなってきた。自分と来たら、
呆れてくる……

空が、だんだんと僕に迫ってくる。道の色が単調で、頼りがいが
ない。周りが妙に落ち着き払っていて、僕だけが浮いている感じが

する。

「裏市」に入ってからしばらく市の中を歩いて、その店の集まっている辺りを通り抜け、ついに外れ近くの辺りまで歩いてきた時、シェワードがようやく足を止めた。

「ここだ。この「万書館」は、私が知っている中で一番『黒の書』がある可能性が高いところだろう……
さて、入るぞ」

その「万書館」なるものは、ぱっと見る感じでは至って普通だった。

市場の中の他の出店と同じように、上は煤けたひさし一枚で、その軒下に商品となる新古様々な本が置いてある。

でも、他の店と明らかに違う所がある。それは、……商品の量だった。

表からただ見ているだけでは、他の出店と商品の量は同じようなものだと思っていたけれど、その店の奥、つきあたりに地下に続く階段があったのだ。

入ってみないと気づかないように作られていたが。

また、シェワードの目的もどうやらその地下にある書庫の方だったらしい。

そして、僕が驚いたのはなんと、軒先に置いてある本の量の数十倍は軽くあると思われる本が、陰湿な階段を下りた後の、地下の薄暗い書庫に整然と並べられていたのだ。書庫の端から端までが見渡せないほどの広さだから、相当なものだ……

その薄暗い、埃っぽく感じる書庫の中で、シェワードが僕に重々しく言った。

「『黒の書』は、あるとすればこの書庫の何処かだ。とにかく、徹

底的に探せ」

そうして、僕とシェワードによる長い本探しが始まった。

……詳しくは書かないでおくが、これはかなり苦労したのだ。

薄暗い書庫は、所々に豆電球がぼつりぼつりとしか無くて、まづぱつと見ただけでは本の表紙が見えない。

ただ、この世界にある文字は、どれも自然に読めるようになっていた。常日頃から高校では犬猿の仲で、見ただけで敵意を掻き立てられる英語、見た事も無いフランス語、スワヒリ語、ラテン語の面々らしきもの、挙句の果てには象形文字に近いものまで読めてしまう。これはかなり面白かった。

けれど、僕はシェワードの言う『黒の書』なるものを見た事も無いし、どんなカバーの本なのかも知らない訳だから、片っ端に覗き込まないといけなかった。

これがなかなか腰が凝るのなんのって。

それに、この地下書庫は広すぎる。

真四角な空間に、ひたすらに何百という数だろう本棚が並べられているだけ。そして、種々様々な色、大きさ、太さの本がひっそりとそこで眠っている。

そんな、薄暗い空間だった。

いわば本の樹海のような気がして、この中で何処知れぬ方向にあと一步を踏み外したら、二度と誰にも会えないような気がして、背中が冷たくなった。

そして、同じところをぐるぐると回っているような気持ち悪さが常に心の端に巣食って、とにかくさっさとここを出たかった。

その時間がどれくらい過ぎたのだろう。

私の願いごと

シェワードが叫んだ声が、待ちに待った声が、この半モノクロの空間にこだました。

「あ、あったあったぞ！ 今すぐ、入ってきた場所に集合だ」

第14話：『万書館』恐るべし」「黒の書』編・二」「後書き

「一読、ありがとうございました。

これから、よろしく願います。

私の願いごと

第15話：実体無き『裏世界』 「『黒の書』編・三」（前書き）

売買。すなわち、売り買いの事。

基本は、相手と自分が満足する取引を目指してできたもの。自らが持っているものと、相手の手の内に在るもの。これだけあればできる事である。その目的は、お互いの持ち得る物を共有する、という一種の助け合いだったのではないだろうか。

けれど、時代は進み……

シエワードに叫ばれたものの、僕はどっちが入ってきた場所なのか分からなくなっていた。

我ながら今までを振り返ってみても、いつも迷子になるのが僕だった。こればかりは、『表世界』でも『裏世界』でも変わらないらしい。

『表世界』で習った事のひとつに、迷子になったらその場を動くな、つてのがあったと思うのだが、あれは小さい子供だけに適用されるルールだと思う。そして、そうであるべきだとも思う。

今、僕は焦っていた。

止まっけていても埒があかない。それが分かっているから、移動しようとする。足は自然と速くなって、知らない間に走り出している。しかし、いくら走っても、ゴールに着かない。だんだんといライラが募り、疲れも募る。

そして、シエワードからの、遅いだ、早くしろだ、のろまだ、ぐずだ、……といった怒号が遠慮なくこだまして聞こえてくるのは我慢ならない。

他に人がいるかもしれない、この地下書庫で叫ぶなよ、さっさと言っけて、そう言っけてやりたい。

一体どうしたらいいんだ、僕は！ と叫びたい気分だ。

すると、ほとんど無人だったこの倉庫の中に人らしきものを視線の先に捕らえた。それが、なにより救いの仏様に見えた。

僕は、そこまで全力で走った。そして、一刻を争って口を動かす。

「あの、すみません。この地下倉庫の出口へはどうやって行けば

よいか知っていますか？」

その人は、かなり老成したご老人だった。
皺が寄っていて、髪がほとんど真っ白に近い。

そのご老人は、僕の慌てた様子をぽかんと見ていると、

「ああ、わしがここの店長だ」

と何故か目を細めて独り言みたいに言った。

「わしについてこい、小僧。出口なら、ほんのすぐそこだ」

まあ、助かったみたいだ……

それで、僕がその後老人の先導のもと、しばらく付いて行くとシエワードが頬を膨らませて待っていたゴールに辿り着いた。

階段の上から漏れ出してくる、わずかな光が嬉しかった。

外はもうとうに暗くなっているだろうし、街灯からの光だろうか。

その後、僕がシエワードにひと言謝ると、

『使えないだけで十分だから、足手まといにはなるな』と僕を一喝
しただけであっさりと許してくれた。相変わらず、目を反らしなが
ら。

それで、僕がその肝心の本について尋ねてみると、確かにシエワ
ードの手の中にあった。

シエワードが持っているのを見たところでは、とにかくカバー全
体が真っ黒のハード本サイズで、やたらと太い。

そして、『黒の書』と黒地の背表紙に白の文字が浮かんでいる。まあ、見たところ普通の本だった。でも、シェワードによると、こいつはすごく優れたものらしい……

僕が、そのシェワードの腕の中にある真っ黒い本を凝視していると、シェワードが、僕の後ろにさりげなく立っている店主に向かって、

「この本、私に売ってくれませんか」と険しめの強張った表情で尋ねていた。

僕の後ろでそれまでじっとしていた店主は、シェワードからのその言葉をどうやら待っていたらしい。

それで、ようやく商売人らしいさっぱりした表情を顔に灯す。

「お嬢さん。どれくらいのものを用意できますか？
知ってるとは思いますが、この本はかなり張りますぞ」

シェワードは、その言葉を聞いて、視線を僕へと移してきた。そして、今こそは、とでも言い出しそうな口調で、急に説明調子になって僕に語り始めたのだった……

「おい、おまえにこの『裏世界』での“お金”について説明してやるぞ。」

……まず、常識としてこの世界では、全ての物体に実体が無い、という事になっている。

これは、理由を言えといわれれば困るが、そういうものだとして理解してもらえない。

それを元において、これからの私の説明をよく聞いて欲しい。良いか？」

「この世界に来てから、僕は『何故だ』と何度思ってきただろう。でも、もうそんな事には慣れた。」

だから、とにかくシェワードの説明を聞いてみることにする。

それに、ここは夢なんだから、実体が無いのは当たり前だとは思わなかったし、自分の中で納得は出来ていると思うから。

「分かりましたよ。続けてください」

僕がすましてそう答えると、シェワードが真剣な顔になって説明を始めた。

「この『裏世界』では、この間も少しだけ話したように、己の持っている物体の“イメージ”を具現化して、その“イメージ”同士を物々交換するのがほとんどの場合、一番手っ取り早い売買方法となっている。」

「この世界では、おまえもワープを体験したと思うが、自分の身体ですら実体無く、この空間自体も実体が無い、という事になっている。」

「だから、あんな事ができるんだ。まあ、実体の無いという事の一つのメリットなんだろう。」

つまりは、『裏世界』にある全てのものは……いや、ほとんどのものは“イメージ”だけでできている。だから、その“イメージ”を頭の中で懸命にリアルな像にできたなら、それ創る事ができるんだ。それを、お互いに物々交換する、という訳だ」

それをシェワードから聞き終わった後の僕は、何だか大抵の事ならば、できない事は無いような気持ちが湧いてきた。

シェワードのいう事が本当ならば、本当に何でも創りだせるとい

う事か……さすが、マイ・ドリームだけはあるな。

そんな想像をしていると、シェワードの目が僕の顔をじっと見ているのに気づいてはっとした。

その瞬間、僕と目が合ってしまったシェワードが慌てて、

「……と、いう訳だ。おまえ、何か良いものを作れないか？」
と継ぎ足してきた。やっぱり、目を反らしながら。

第15話：実体無き『裏世界』 「『黒の書』編・三」（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

皆様のおかげで、順調にお話を進められています。このまま、年始の第一週は、毎日更新を続けていくつもりでいます。

それを過ぎたら、数日に一話の更新となると思います。

ーいよいよ『黒の書』の登場です。

さて、この書を巡っての売買は成り立つのか？

第16話：情けない自分 「『黒の書』編・四」(前書き)

創造。自分の中だけで完結させるとしたら、頭の中のイメージを実現する事、と言っただろうか。

無から有を創りだすのはことさらに難しい。

しかし、これを楽しんでいる人がいる。創りだす事は、つぼに嵌れば面白い。

そして、斯く云う私もそれに魅せられた一人である……

第16話：情けない自分 「『黒の書』編・四」

……つまりは、僕にその『黒の書』に見合う、対価を払うために説明してくれたのか。

まあ、シエワードは僕のために『黒の書』を買ってくれる訳だし、ここまで連れて来てもらったし、おんぶに抱っこだよな。考えてみれば、ここは僕が払うのは当然なところだ。

でも、僕にはどんな物が良いのか見当がつかなかった。

あのご老人の店主の態度だと、かなり立派かつ相手の気に入りそうなものを渡さないときつそうだし。

僕は、店主に尋ねてみた。

「あの、今、欲しいものは何かありますか？」

店主は、顔の皺をさらに寄せて、少しの沈黙が流れた後、何とも言えない表情で、

「欲しいもの、か。今は特に無いな……だが、この歳になって、座りが良い椅子みたいなものが欲しいと思った事はあったがな」

うーん、椅子か……

僕は頭の中を必死に搜索する。しかし、なかなか店主がご所望のものは浮かんで来ない。

『表世界』では、いつでも買おうと思えば色々、多種多様な椅子が家具屋に行ったら簡単に買ったのだから、こんな風に想像する機会はそんなに無かった。

想像なんてしなくても、近くの店に走って実物を見たら済む事だ

からだ。

僕は便利かつ発達すぎている『表世界』で、自分で何かを創造する力が、気づかないうちに無くなっていたのに今やっと気づいた。皮肉な事にも、この半ば夢のような世界で。

「僕がイメージできる、一番良いと思われる椅子関係のものは、うちにあった、ふかふかの真紅のソファーぐらいです……」

言っていて情けなかった。でも、事実はそうだった。

店主は、僕のその答えを聞くと、表情を冷たくして、がっかりした声で言った。

「それぐらいじゃ、とてもじゃないけど『黒の書』なんかを譲るなんてできん」

まあ、当たり前前の答えが返ってきた。

店主の隣のシェワードの顔も、急に険しくなる。

ここまでシェワードしてもらったのに、僕がこんなだから……

その時、僕のポケットの中から、再び小声が漏れ出しているのに気づいた。

『良い機会じゃ。これは“臨実試験”にはおあつらえ向きの感じになつてきておるわい。』

おまえさん、シェワードに一つお願いしてみたらどうじゃ。

あの店主の“願いごと”を一つ叶えてやってくれ、とな『

僕はその小声の意味をまたしても…… いや、知っている。
シエワードにも、クワーズットにも言われた、あの言葉。それが、
頭に響く。

『私はおまえのいた世界のことなら何だって知っているし、その世界で起こった出来事を変えることだってできる。そんな存在だ』

ここでシエワードの方をパツと見てみる。

すると、シエワードは、相変わらず険しい表情で、黒い髪の毛が小刻みに揺れていた。そして、珍しく独り言を呟いている。

『私が最近全然外出してなかったからな。』

こんな事なら、もうちよつと“イメージ”できるものを何処かで探してくれば良かったな……』

……シエワードだって、そんなに“イメージ”を持ってないみたいだ。

まあ、持っていないもこれ以上頼る気は起きないが。

ここは、考えてるよりも行動ありきな場面なんだろう。だから、さっさと何とかしたい。

さて、どうしたものか？

とりあえず、頭のエンジンを回転させ始めようとした時、だった。

頭の中に何かひっかかっているものを感じたのだ。

それをよくよく掬い出し、言葉に直そうとしてみると、……出てきた言葉達は、実に当たり前な事ばかり語っていた。そしてその内容は、今の状況を客観的に分析したものだった。

僕はあまりにも情けなさすぎはしないだろうか。

あそこまで僕のために一生懸命になっけてくれているシエワードに
対して。僕は、彼女にとってそんなに大事な存在では無いはずなの
に。

彼女が、僕よりも小さいあの子が、途中、まだかまだかと駄々を
言う僕を黙ってここまで連れてきてくれた。そして、肝心の本も見
つけてくれた。

そして、その本に書いてあるのはこの『裏世界』について。

彼女は、自分がそれを欲しているが為にここに来たのか？ 今思
うに、そうならばなぜ、あえて『裏世界』見物の途中に僕と一緒に
ここに来たのか？

……もしかして彼女は、僕の為にあの本を欲してくれているので
はないか？

そんな、ひたすら真っ直ぐなあの子……

実に、僕は馬鹿だった。

たとえシエワードが『願いごと』を叶えられる力を本当に持って
いたとしても、彼女にこれ以上の負担を強いて良い訳ないじゃない
か。

僕は、この『裏世界』に来てまで人様に迷惑をかけるのか。

『世の中、協力し合う事が大事なんじゃ。』

独りで、己の枠の中だけで解決できる問題と、そうでない問題が
ある。

……おまえさん、はっきりとここに具現化できる、一番の切り札
がそのソファアールだけなんじゃろ？

だがな、おまえさんにとっては生前の大切な思い出が残っている
物かもしれないが、他人にとっては単なるソファアールじゃ。

たとえ自分で全力で頑張って無理なものを、これ以上背負い込む

のは愚の骨頂じゃぞ！

おまえさんは、今の今までこの世界での“お金”は何なのかすら知らなかったんじゃない。仕方ないわい。

割り切るんじゃない。自分の中の許容量はなかなか増えるものじゃない』

クワーズットが、僕の頭の中の甘え心を応援する声を送っている。

確かに、ここで僕だけの力で『黒の書』に見合う対価が払えるかどうかなんて、十中八九一筋縄ではいかないだろう。もし、シェワードの力をうまく借りる事ができれば、この場はどんなに助かるだろうか。

……でも、僕にはできない。そんな事はしたくない。意地にかけて。

心の中で叫んだ。俺は漢だ、と。

馬鹿丸出しだった。

自分でも分かっている。

これまでずっと、綺麗事で生きてきた僕。

喧嘩が弱くって、他人は絶対に殴らなかった。

お金を拾ったら、お巡りさんに感心して欲しくって交番まで足を運んだ。

戦争と平和、なんてことについては、『世界平和がなれば良い』と何にもやらないくせに口だけ叫んでいた。

今思ったら何か違うような気はするけど……

私の願いごと

こんな所で、年下のあんな真っ直ぐな少女に自分の事ですがるの
は絶対に性に合わないんだ！

僕が全力でかかってもできないって？ 材料は僕の頭の中から引っ張り出せば良いんだし、そんなのやってみないと分からないじゃないか。

僕は、心に思いっきり穴が空くぐらいに、あの真紅のソファアを創造しようとする。

そして、念じた。

ワープした時の要領で、目を瞑って集中するとだんだんとはっきり瞼の奥にそのソファアが創造できてきた。

そのイメージが徐々に、ゆっくりとぼやけが取れていく。かすんだ部分が減っていく…… その間、ただがむしやりに神経を尖らせる。

ついに、そのイメージの最後のピースがカチツと頭の中ではまった。

その瞬間、僕が目を開けると目の前に……その真紅のソファアは力強くしっかりと存在していた。

第16話：情けない自分 「『黒の書』編・四」(後書き)

ご一読、ありがとうございました。

これからの更新の流れとしては、
年始の第1週は毎日更新で行きます。それを過ぎたら、大体数日
に1話、ぐらいに落ち着くと思っています。
次話からも、よろしくお願いします。

第17話：無力感、そして意地 「『黒の書』編・五」（前書き）

負けず嫌い。それは、分からない人にとっては絶対に分からないだろうし、分かる人にとっては大抵の事では譲れないもの。

負けたくない。この気持ちは、人を時々盲目にさせる。その奥の、本当の勝負を見にくくする。

でも、やっぱり譲れない。そうと分かっているでも譲れない……

私自身が負けず嫌いだから、私は知っているつもりになっている。この気持ちを。

第17話：無力感、そして意地 「『黒の書』編・五」

「これでは、ダメですか？

お願いです。僕に出せるものならば、なんでも何とかしますので、お願いします！」

しかし、“イメージ”を創りだすのは、思うほどに簡単な作業ではなかった。

まず、頭の中でもともしっかりと覚えている“イメージ”でないと、像を結ぶ事すら難しい。

また、像がうつすらと結んでから、その“イメージ”を徐々にはつきりとさせていく段階で、自らの全神経を結構長い間、と言っても多分数分ぐらいだが、ひたすら一点に注がなければいけない。なかなか疲れる……

シエワードが、ここで僕に厳しい顔つきで先程の話を補足をしてくれた。

「自分で“イメージ”を創ってみて分かった。これは、簡単なように見えて結構しんどい。

人によって個人差はあるものの、何も補助具を使わないと、一日十個創るのも根性のない奴だと難しいだろうな」

その一方、肝心の店主の方は、ため息をついていた。

「これでは、到底……」

それに、数で物事どうにかなるといふ訳ではない。やはり、もうちょっと先立つものを用意してきてもらわなければねえ」

徐々に買い手と売り手の間で、やりづらい空気が濃厚になり、それに押されて沈黙が始まった。

これでは、売買は到底成立しない……

その沈黙がしばらく続いた時だ。

店主が、これはダメだと見切りをつけたのだろう。商売人らしい、そのはつきりとした口調で言った。

「お客さん、わしは上に戻りますゆえ、また今度の機会にそのお話は」

ダメだ。このままでは、取引成立なんて夢の夢だ。

でも、クワーゼットの言う通りにするのもやっぱり嫌だし……

僕は、必死の熱意を伝える作戦に出た。というか、それしか思いつかない。

「あの、店主。僕、まだまだ創りたいもの、お見せしたいものがたくさんあるんです。

どうか、僕の出すものだけでも見てから考えてください。お願いします！」

店主はそれに、冷たく返す。もう顔はこっちを向いていなかった。「だから、数じゃないと今言ったところでしょうに。諦めなされ」

僕だって、負ける訳には行かない。さらに食い付く。

「店主！一応、客が取引しようって言ってるんですよ。」

それを無視しなくとも良いじゃないですか。店主に全く損はないでしょう？

本当に見ていられるだけ、それだけで良いんです！」

……店主は、やれやれといった感じで、両手を上げながらこちらを振り返ると、鋭い光を蓄えた双眼で僕を見据えてきた。

僕は、一瞬身震いがしたが、咄嗟に体制を立て直して、眼で伝えた。

頼む、と。まだ僕にはやれることがある、と。

それを見た店主は、

「うむ、お客さんがそこまで言うのなら、見るだけ見ていきましょ
うか……」

と、渋りがちに答えてくれた。

僕は、その後必死になって“イメージ”し続けた。

小さい頃に父さんの部屋にあったリクライニングチェア。

学校の、座り心地の良かった会議室の椅子。

ここに来る前に、近所の電気量販店で見つけて、それでかつ何と
か覚えている、リラックステアやオフィスチェアを数種類。

母さんお気に入り、リビングに一つだけあったマッサージマシ
ン。

そして、田舎の爺ちゃんのところであって、小さい頃に気に入っ
ていたダイニングチェア……

でも、七個を越えた辺りで、集中できなくなってきた。

そして、九個を創り終える頃には、めまいが回ってきた。シエワ
ードの話からすると、それでも十個は楽勝だと思っていたのに……

事実として、僕は凡人以下って事か。これまで、根性根性と、よ

く意味も無く叫んできた僕が。それで漢だって？ 笑わせるなよ。ますます、自らが情けなくなってきた。

でも、負けず嫌いだけは誰にも譲れない。

よし、覚えているやつを全部この場に出してやる！ まだ、僕は負けない！

けれど、心中では分かっていた。この努力は、たぶん無駄になるだろうという事は。

なぜならば、店主が、もはや僕をあわれだとも言いそうな目でこちらがバテるのを待っているからだ。

ここで、僕はパツとシエワードの方を見てみた。

彼女は、まるで何かの珍しい動物を観察するような目で僕を見ていた……

シエワードは、訳が分からなかった。

あいつ、どこまで欲深いんだ。私がちょっと機嫌が良くなって、ここまで連れて来てやっただけなのに。

無理なものは無理だって、あの店主だって言っているじゃないか。それに、今となつては、店主の目は半ばあいつの方すら見ていない。

今は退き時だろうに。どうして、そこまで自分が欲しいというだけで貪欲になるんだ。

馬鹿らしいとは思わないのか……

私の願いごと

私が言った、丸腰では一日十個が限界ってのは、あくまでも休憩をとりながらポチポチやって、身体が全然疲れていないときの話だ。

あいつは、連続で、しかもここまで私についてかなり歩いたはずだ。

もうそろそろ倒れるぞ、あいつ。

でも、それを愚かだと感じていながらも、何か胸の奥につつかえているものを感じる。

あいつの愚行を見ているだけなのに。

私は、あいつに会ってから何か変になったのではないだろうか……

僕は、それから意識が朦朧とするまで創る事を止めなかった。

十数個できたと思っただくらいには、だんだん、足元の地面が波立って来たような錯覚が襲ってきた。そして、イメージがぼやけているのか、自分の目の前がぼやけているのか分からなくなってきた。

でも、止めない。

ここで、シエワードに認めて欲しいから。

それに、店主をアツと驚かせて一発逆転して、あの本を堂々と自分のものにした。

それだけだった。

目が、頭が、全身の感覚器官が僕にもうダメだと悲鳴を上げてくる。その時、階段から漏れてくる光がちよっとずつ溢れてきて、目の前を満たしていく気がした……

その次の瞬間、僕は目の前がぐらぐらと音を立てながら崩れていくのを見ながら、叫んでいた。

『僕は、負けない！ もう逃げない！』と……

第17話：無力感、そして意地 「『黒の書』編・五」(後書き)

「一読、ありがとうございました。」

さて、あと三、四つぐらいで『黒の書』編は終わります。正確に
言えば、次の橋渡しとなって……

私の願いごと

第18話：どうにもならない事 「『黒の書』編・六」(前書き)

努力。ひたすらに、ひたむきに目標へと突進していかうとする事。また、突進が凄まじく、かつなかなかめげない人を努力家と云う。

でも、努力家じゃなくなつたつて突進はできる。その違いは、程度の問題だけなのではないだろうか。

私も頑張らなければ。そう、心に想う……

第18話：どうにもならない事 『黒の書』編・六

叫んだ後、意識がいよいよぐらついてきた。

まだ十五個できたかどうかの辺りなのに。僕の必死レベルで、やっと凡人レベルといったところか…… 我ながら情けない。

そう思った直後、急に激しい吐き気が襲ってきて、その場でへにやりとへたり込んでしまった。

これまで、何とか足で体重を支えている感覚があったのに、それがいつの間にか無い。

立てない……

それを見てから、店主の方から冷え切った声が聞こえた気がした。「お客さん、あなたには根性はある…… だが、商売には通じない。この辺りで失礼する」と。

……でも、僕はそれが耳に届いた時、ふつと身体が楽になった。

もう頑張る必要ないんだ、と。

何だか心に曇りがあるのは放っておこう。そうすれば知らないうちに消えるだろうさ……

しかし、まだそれではダメだと叫んでいる輩が心の中には残っていた。

その輩は、おまえはまだできるといふ。何が、なのかは知らないが。

その輩は、おまえはまだ果たしていないという。まあ、果たせ無かったのだから当たり前だろうに。

その輩は最後に……叫んだ。

私の願いごと

『おまえ、そのまま行ったらまた逃げる事になるぞ』と。

心が震え始めた。その叫びに共鳴するように。

僕は、あの日に決めたはずだ。もう、目の前から逃げないって。ここで倒れたら結局口だけ野郎じゃないか。

しかし、もう明らかに限界だった。

そんな事を思いながら、僕はあの日の光景に戻っていった……

気がついてみたら、どれくらい時間が経ったのだろうか。

吐き気が嘘のように収まっている。心の中から、戦意を高揚しようとする誰かの叫びがまだ聞こえる。

足は、まだでくの棒のようだが……

まだ、やれる。

いつの間にか閉じていた目を開けて、周りの状況を見してみる。

すると、隣にはシェワードがいた。相変わらず、周りは薄暗かった。

今思うと、こんなに薄暗い中でよくさっきまで本を探していたな

あ……

僕は、その傍らにいるシェワードに言った。

自分が情けなかった。さっきまであんなに一丁前に振舞っておいて、この様。今は、シェワードが目の前にいるから、泣きそうなのを堪えている。それだけしかできる事は無い。そして、それだけで精一杯だった。

「……ごめんなさい。」

これで、ちょっとは役に立てるようになるかと思っただんですが……

…」

しかしまた、そんな中で言葉を紡ぎ出しているうちに目の前は暗くなって、ぼたりと己の身体が加速度的に倒れていく感触を味わった後、意識は再び何処へと彷徨いに行つた……

あいつの言っている事が、分からない。

どうして、あんな馬鹿な事が私の役に立つんだ？ あの本は、あいつの為のものなのに。

その時、あいつのポケットから聞き覚えのある声が出た。

『ああ、おまえとはもう……でも、これだけは私が言っておこう。……シェワードよ、私の話、ちょっとだけで良いから聞いてくれるかのう』

じいじの声だった。

「ど、どうして、あなたがここにこれを!？」
純粹に謎だった。

『まあ、それは今は置いておいてくれ。

それより、私は勧めたんじゃよ？ あいつ、九条涼太に、おまえさんに、店主の願いごとを叶えて欲しい、と頼めと。

でも、あいつはそれをしなかった…… あいつだけの力なら、あの程度だという事は知っていただろうに、だ』

私としては、九条涼太よりもじいじがどうしてこれをあいつに渡

していたのが気になる。
でも、話の中身は興味深かった。

じいじが、あいつに私に願いごとを頼めと言っていた？

……確かに、それだったら行けたのかも知れないな、と今更ながら想う。でも、心の何処かではそれを遠ざけていた。

それに、九条涼太は自らどうにもならないって事を知っていてあんな馬鹿な事を？

私を頼れば、少しは売買が成立する可能性がぐんと高くなっただろうに。

矛盾してるじゃないか、行動すら。全く、救いようも無い馬鹿だ。

『おまえさんじゃったら、きつと九条涼太のあの行動を、とんでもなく馬鹿だと思っじやろう。』

どうにもならない事を知ってやっていたとしたらなおさらじやな。

……でも、ここでこんな事を私が言うのは変じゃが、あいつはおまえさんの事を気遣ってやっていたんじゃないやと思っんじゃないよ』

私には、訳が分からない。

そんな馬鹿な。どうして、あんな行動が私を気遣う事になるのか。むしろ、後に残される私の面倒を増やすだけじゃないか。

「どうして、そんな事が分かるんですか。

それに、どう考えてもあれは私の事を気遣っているようには見えませんでしたが？」

改めて問い直してみた。

じいじは、私の言葉の後、しばらくしてまた問題発言をした。

『私は、あいつの心を読んでみたんじゃない。私が、おまえさんに頼れ、

と言った後の九条涼太のな。

すると、私は分かったんじゃ。

あいつは、最後にはこうなるであろうと心の底では分かっていたみたいなのじゃよ」

……じいじは、あいつのことを鼻屑しすぎている。

私には分からない、そんな事。

「では、九条涼太が私を気遣っていた、って事をあなたは証明できるんですか？」

じいじは、そこでふふつと笑った。

『そうじゃな…… あいつが起き上がったら、こうあいつにこう優しく言ってみてくれ。』

「私をもつと頼っても良い」とでもな。すると、あいつはそれを断るじやろつて。これで、簡単な証明にはなる。

……シェワード、おまえも昔に比べたらよく成長したのう。

それがこの間分かったから、私は今、とっても嬉しいんじゃ……

でも、まだまだ青いわい。

これからも、あいつと仲良くな」

じいじの口調は、何か変だった。泣きそうな、笑ってそうな、けれども何とも言えないようなその口調。

何回頭の中のふるいに掛けてみても、やっぱりひっかかる。

そんな作業を頭の中でしていると、じいじは急に続けた。

『シェワード、愛しておるよ』と。震えている声で……

その後、いくら話し掛けても返事は無かった。

私はじいじが心配だ。でも、じいじなら大丈夫、そのはずだ。き

つと、そうだ……

髪の毛を留めていたヘアピンをちょい付け直した。

そして、階段の上から来ている淡い光を見つめ、あいつが起きるのを待つ事にした。

放っておこうかとも思ったけど……まだ、この場を動く気にはならなかった。

第18話…とつたまならない事 『黒の書』編・六「(後書き)

「一読、ありがとうございました。」

「これからも、よろしくお願いします。」

私の願いごと

第19話：“力”のもたらすもの 「『黒の書』編・七」（前書き）

予想。当たればな、と思うのか、外れて欲しい、と思うものなのか。

当たるも八卦、当たらぬも八卦、と云う。

当たったならば、と考えてしまうとダメになる。でも、外れる事ばかりを考えていると極端なネガティブに陥る。

でも、確信を持っている事が一つでも見つかったならば、話は別だ……

第19話：“力”のもたらすもの 「『黒の書』編・七」

……また意識が知らないうちに落ちていたみたいだ。

落ちる前に、何かシエワードに謝っていたような気がするのだが、あれは気のせいだったのだろうか……はっきりしない。

地下書庫は、ちょっと先が見えなくなるほどに暗くなっていた。一体、どれくらい気を失っていたのだろうか。

ふと隣を見るとシエワードが一人、僕の隣で、階段の上を見てたそがれていた。店主は、もういない。

ボーっと階段の方をずっと見つめている彼女は、僕が気が付いたのに気づいていない。ひたすらに、明かりが漏れ出してくる階段の上のほうを凝視しているみたいだ。

今改めて思うに、見た目だけだとすごく大人しく感じるのだがなあ。

それを見ていて声をかけようかどうか心の中で一瞬迷ってしまったが、その良く分からない気持ちを追っ払って声を掛けた。

「待っていてくれたんですね……シエワード」

シエワードはそれを聞いて驚いたようで、その場でピクツと小さく跳びあがっていた。

次に僕は、意識が途切れる前に言ったかどうか分からないけれど、とにかく呟いた。

「ごめんなさい。もう、店主は行ってしまったんですね……」

僕、全然役に立てませんでした」

すると、シエワードが僕の方に振り返って、優しく、小さい消えそうな声で僕に話し掛けてきた。いきなり感じが変わったなあ……僕の意識が飛んでいた時に何かあったのだろうか。

「……なあ、おまえに、一つ聞きたいことがあるのだが、良いか？」

僕は、別に構わない。

それに、シエワードの目の辺りが赤みを帯びている…… 何故なんだろう。

「この世界の事は何にも分からないので、答えられるか分かりませんよ。それでも良いのなら。」

何ですか？」

私は、じいじの声が聞こえなくなってから、ついつい泣いてしまった。

何故なのか、なんて知らない。涙はひたすらに流れ落ちてきて、いつの間にか白かったカッターシャツに染みを作っていた。

それを見て、自分が泣いている事にはっと気づいて、涙を止めようとしたが、止まらない。

染みはどんどんと広がっていく……

最後にじいじに愛していると言われた時、私は胸の中に見つけてしまった。じいじに二度と会えないだろう、という固い何かを。

そんな事は無い、じいじは何にもそんな事を言っていないじゃないか。そうやって自分を励ましてみるが……

私の予感、というかこういう種のもものは確実に当たる。それはほぼ必然なんだ。

だって、私にはあいつにも言った通り、“願い事を叶える力”があるのだから。

その“力”の影響で、そういうところはずば抜けて鋭いのは自覚している。

相手の声、表情、様子から相手が何を考えているのかぼんやりとは感じる事ができるのだ。

そして、そのぼんやりしたものが心の奥のそのまた奥から染みってきて、私の頭の中にそのまま入ってくる。

私はまだ未熟だから、ぼんやりとしか分からないが、もっとその“力”が強くと、もしくはそれを得て長い時を経た人にはくつきりと分かるようになるらしい。

じいじは、私に何かを隠している。それは、以前から感じていた。

でも、何故かじいじからは何も読めないのだ。これまで、そんな人はいなかった。

じいじ以外に会った人は、会ってしばらくするとその人が思っていることがその“力”のおかげで分かってしまうのに。

でも、じいじ以外にも分からないやつが現れた。それがあいつ、九条涼太だった。

あいつの考えている事も、どうにも読めないのだ。それは、会ってすぐにあいつと口論した時に不思議に思ったのだ。あれだけお互いに感情を剥き出しにして叫びあったのに、あいつの感情が読めない。

私の事をあいつがどう考えているのか、と一生懸命に心に“力”を使って働きかけてみても、何にも答えて来ないのだ。

じいじの場合は、そうすると何か釣り糸に限りなく小さいものが

引つかかってくるぐらいの感触はあるのに、あいつの場合はそれすらない。

謎だった。それゆえに、やりにくかった。

でも、九条涼太には面白いところもあった。興味深い所もあった。そして、何故あいつがじいじの持っていた“インスタント・スター”を持っていったのか。それも不思議だった。

しかしここで、じいじに教えられた通りに訊いてみれば真実の一端が分かる。

じいじがあそこまで気に入っているあいつに、そこまでのものがあるのかどうか……

私は、まずは率直にこの事を確かめる事にした。

あいつのポケットに入っていた“インスタント・スター”の事や、あいつとじいじとの関係はその後だ。

「……なあ、おまえに、一つ聞きたいことがあるのだが、良いか？」
声が勝手に震え始める。あいつは、私にとって本当にやりにくい。言ってみれば、天敵のようなものなのか……？」

あいつがその後、すんなりと良いと言ってくれたので、いよいよ声の震えを抑えて訊いてみた。

『私には、おまえがこの世界に来てすぐの時に言った通り、“願い事を叶える力”を持っているのだぞ？

こういう時にこそ、もっと私を頼っても良いのではないか？

……私は構わないぞ』

シエワードが急に優しくなった。

それは、僕にとって不気味な事であった。でも、言ってくれていることは大助かりだ。

あいつの力を使えば、きっと店主からあの『黒の書』を手に入れることができるだろう。クワーズットもそう言っていた事だし。

でも、それでは意味が無いんだ。

シエワードに対して情けなさすぎるではないか。

だから、答えはもともと決めていた。

『シエワード、僕はあなたにあまりにも助けてもらってばかりです。

だから、これ以上あなたに助けてもらおう訳には行きませんよ。あなたに頼ってあの真っ黒な本を手に入れても、情けなくって受け取れませんし』

これで良いんだ。そんな事、当たり前じゃないか。

気分がスッキリした。あの店主に、もう一回僕の底力を見せてやる！

決意を新たにすると、顔が自然に笑っていた。

すると、その次に摩訶不思議な事がまたまた起こった。

『お、おまえの馬鹿野郎！

どうして、どうしてそんなにおまえは…… ふざけるな、冗談じ

やないんだよおお〜！
』

シェワードが急に僕に泣きついてきたのだ。

地下書庫は、入ってきた時よりもずっと真っ暗になっていた。

シェワードの泣き声だけが、まっ暗な中に響く。僕はどうすれば良いのか分からずに、立ち尽くしているしかなかった……

第19話：“力”のもたらしすもの「『黒の書』編・七」（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

もうそろそろ、『黒の書』編は終わります。この先、シェワードの“力”が……

また、よろしく願いします。

第20話：確かな一瞬の繋がり 「『黒の書』編・八」（前書き）

物事を咄嗟に判断して、捌く。その能力を決断力という。

あれやこれやと、ずっと考えていても仕方が無い所がある。そういう時に、物事をスパッと斬れる力の事を指す。

これがあるかないかで、人生は大きく変わるだろう。良きしろ、悪きにしる。

そして、ようやく始まっていく……

第20話：確かな一瞬の繋がり 「『黒の書』編・八」

僕は少女の面倒なんてこれまでに一度も見た事も無かった。だから、もうお手上げ状態だ。まず、何故泣いたのか。泣き止ませるにどうすれば良いのか。そして、もし泣いた原因が自分にあるのだつたらどうすれば良いのか……

何も分からなかった。

さつきから、『どうして泣いているんですか』とか『辛い事、あったんですか』とか言っても何にも反応してくれない。シエワードはひたすらに泣くだけだ。

どうしようもなくて、困った僕は頭を優しく撫でてやった。

すると、これが効いたのかもしれない。徐々に泣き声が静まってきた、ようやく話ができそうな状態になった。

「シエワード、どうしたんですか？　僕が何か悪い事を言ってしまったのならば謝ります。ごめ」

その時、ごめんなさい、と言い終わろうとした時によろやくシエワードが口を開いてくれた。

「お、おまえが謝る事じゃない。おまえに落ち度は何も無かった。私が泣いたのは……私のせいだ」

赤く腫れぼつたい両眼をこすりながら、シエワードはただどしく答えてくれた。

でも、まだ泣き足りないらしくしばらくぐすぐす言っていた。

「落ち着いてください、シエワード。」

もしも良かったら、僕にどうして泣いたのかを話してくれませんか

か？ 力になれることならば、力になってあげますから」

僕がこの世界に来て学んだ事の大きな一つは、シエワードの事だろう。

だんだんと、僕は彼女の事が分かってきた。

シエワードは、決して悪い奴じゃないんだ。

でも、心の中に何か固い芯を持っている。それが素直にいかないから、あんな尖った感じになっているんだろう、と。

また、真剣に話し合いをしたとしても、多分大丈夫だろうという事も分かってきた。中身はかなり大人みたいだから。

それに、もうそろそろあいつとは真剣に話し合う必要がある。

もうそろそろすつきりさせたいのだ、僕は。ここが『死後の世界』なのか『我が夢世界』なのかという結論を。

確かに、ここにいる限りどちらでもあまり変わりはない。しかし、死んでいるのかいないかという問題は絶対に重要だ。

もうそろそろ、真剣にこの決着を付けに行ってもいいのではないか。

まあこの一件を済ませた後の話だろうが。

まずは、あの店主に眼にもものを見せてやる。そして、シエワードにだって認めて欲しい。

認めてもらったところで、僕に何のメリットも無いのは知っている。でも、それだけでは無い何か僕を押し込めている。好奇心、冒険心、だけではない何か……

シエワードは困惑していた。

ついつい、あいつに泣き付いてしまった。もう自分は、十分に強くなったと思っていたのに。

でも、本当は強くは無かったんだ……

しかも、よりによってあいつの前で弱さを見せてしまった。

どうしてあいつに泣きついてしまったのか。原因を自分の中で探ってみる。

しかしよく考えてみれば、あそこで私があいつに泣き付いた理由は何も無い。

あの状況で、勝手にあいつが倒れたせいで心底迷惑していたのは私ではないか。

それに、私にはあいつを心配するような義理も道理も無いし、そんなために泣いたのではないのだろう。

とすると、理由が何にも無い……

実は、思い当たるふしは心の中にぼんやりとはあった。きっと私は、あいつの真っ白な優しさみたいなものに駆られてしまったんだろう、とは……

確かに、あいつは表面上は優しい。でも、裏では、心の奥では何を考えているのかわからない。あいつの“裏”は私には見えていないのだから。

よくよく考えて気がついた。だから不安なんだっただ、私は。

良く言えば、『知らない人には簡単に付いて行くな』って論理なんだろう。

私にとって、あいつなんて、明らかに知らない人どころか、“力”が通用しない不審な人なのだから。そのあいつを簡単に信用しないのは当然だ。

けれど、それを悪く言えば、私は“力”に無意識のうちに頼って

いたんだ。

“力”を使ってその人の裏を見ないと、私は安心できなかったんだ。

だから、自分では気を付けているつもりでも口調が尖っているんだ。常に、他人の“表”すなわち見た目を信用していなかったから

……

そういえば、私がこれまでに心を許していたのは、じいじとマリーだけだった。

じいじにしても、少しも疑っているところが無かった、完全に信用していた、とは言えない。少しは疑っていた。

つまり私は、自分を育ててくれたマリー以外、誰もこれまで真剣に信じてこなかったのではないか……？

もしそうなのであれば、これではこの先どんなに頑張っても“パートナー”なんて見つからないのではないか……

さらに悪い事に、多分じいじはもう帰って来ない、ときている。

私は完全に、あの暗い所で独りぼっちになってしまつのではないか。

ここで、ここまで来た私には一つの獣道が見えていた。

それは……あいつ、九条涼太を信じてみる事。じいじがやたらと重く見ている、そしてあの、嘘か本当か分からない優しさを信じてみる事。

これは、かなりの賭けになる。あいつが本当に信じるべきでない人ならば、とんでもなく私は馬鹿を見る。

下手したら、もう人を信じるといふ事自体ができなくなってしまうかもしれない……

まだ涙の続きが出そうになった。
でもそれをぐつとこらえて、私は行動に出た。

『おい、おまえは……私の事を、どう思っている？』

ストレートしか投げられなかった。でも、とにかく投げるだけは投げた。

これがどう返って来るかで決めよう。あいつを信じるか、あいつに賭けるかどうかを。

シエワードの言動は、いつもに増して変だった。

泣き終わったと思ったら、急に目をかっと思開いて『私の事をどう思っている？』なんて真顔で訊いてくるのだから。

……どう答えたものか。

そう思案しようとするや突然、僕は頭の中でごちゃごちゃしているのが馬鹿らしくなってしまった。

どうせ、僕の本心はあのクワゼットには読まれてるんだろうし、シエワードにだって頑張ったら読めるのではないだろうか？

それでは嘘をついたって仕方が無い。それに、ここではつきりとさせる良い機会だ。

「あなたの事ですな。

え〜つと、口が悪くて、偉そうで、頑固で、子供で、そしてあのク……いや、天から聞こえてきた声の主や、マリーさんには頭の上がない、でも、ちよっとはまっすぐで、ひたむきな所があって、それでほんのわずかぐらいは優しさもある、そんな感じですかねえ

「？」

答え終わったら、これではいけない、いけなかつただろう、と思う。けれど、心はすっきりした。

自分に正直になる。こんなにまっさらに物を言ったのは、久しぶりだよな……

シエワードは、ムカツと来た。あんな奴、ぶん殴って置いてけぼりにしてやるう、とも思った。

……しかしながら、あいつの憎めない所は、あんな事を言い終わった後に、あんなにさわやかな顔をしている所だった。

シエワードだって、人間は数ならばそこそこ見てきた。けれど、あれは、嘘なんてついてない顔だ。

憎めないや、あいつは。

私の天敵でもあり、またちよつとは賭けてみても良い奴だ。そう思えた。

そして、悪口を言われたけれど、自然に顔が笑えてきた。我ながら、どこかおかしくなったのではないか。そんな事で自我を一瞬疑ってしまったほどに。こんな笑いをするのも、初めての体験だった。

僕は、シエワードの答えが楽しみでもあり怖かった。

あいつの事だし、火山のごとく怒り出して、僕をここに置き去りにしてどこかに行ってしまういな、そんな気がして。

けれども……天は僕の味方だったらしい。奇跡が起きた。

シェワードが笑って、僕にこう言ったのだ。

『そう言えばおまえ、最近私の事をさん付けで呼んでないよな……
まあ、許してやるか。』

そうだなあ、せつかくだしおまえの“イメージ”から、ティツシ
ュボックスでも一つ出してくれないか？』

……シェワードも、案外面白い奴なのかもしれないな。

そんな事を思いながら、僕はこの前、スーパーで見かけたセール
品のティツシボックスを創る事にした。倒れた後、起き上がった
らだいぶ楽になっていたから、それくらいならできるだろう。

書庫の中は、真っ暗でも全然寒くならない。

シェワードと、ほんの一瞬だったけど本当の意味で話を通じた気
がした。

第20話：確かな一瞬の繋がり 「『黒の書』編・八」（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

さて、あと1つか2つで『黒の書』編は終わりです……

それから、これからは予定通り、数日に一回程度の更新になります。すみません。

次話からも、よろしく願います。

第21話：共に歩む為に（前）「『黒の書』編・九」（前書き）

人にもたれかかる事。これは、思っているよりも重い事なのかもしれない。完全に相手を信用して、自分の頭を、そして身体の重さを相手に委ねる。

その心は、自分への問いかけにも表裏一体となっている所がある。相手は、自分に対して反感を抱かないだろうか。

自分の事を裏切ってしまったわないだろうか。

自分を見放したりはしないだろうか。

自分の無能さに呆れ、去っていつてしまったりしないだろうか。

……色々な憶測が行き交い、その中に何かあるのだろうか。

第21話：共に歩む為に（前）「『黒の書』編・九」

「さてと。じゃあ、私がほんの少しだけだが、力を貸してやる。私は……おまえを一旦、仮にだけだが信じてみる事にした」

雲が晴れたような顔をして、またまた突然にシエワードが胸を張って宣言してくれた。

でもさて、僕にどんな助け舟を出してくれると言うつもりなんだろう？

僕は、さっき断るって言ったのになあ……

するとシエワードは深呼吸を1つ。それが済んだと見えたら、優しい声になって僕に語りかけてきた。

「……おい、おまえは自分の力でこの状況を解決できると思ってるだろう。

でもな、残念ながら、絶対に出来ない。こういうとおまえは怒るかもしれないが、自分の奥底では分かっちゃったんじゃないのか？ さっき」

……そういえば、何にも考えていなかった。

自分の中に決意したことと言えば、とにかく頑張って店主やシエワードに自分の事を認めて欲しい、という事だけ。

それを実現する方法、プランを何一つ僕は頭に持っていない。極端な事を言えば、その場で何とかなるだろう、それぐらいなものだった。

私の願いごと

僕は、単にこの状況から無意識に逃げただけなのかもしれない

い。
正直に言えば、自分よりも明らかに年下のあのシエワードに頼るのが、理由はいろいろあったにしろ嫌だから。

しかし、精神論を抜きにしたら。奇跡は起きないと決めたら。偶
然の神のお導きはないと断定したら。

僕の力ではこの状況を解決するのは本当に絶対無理なんじゃない
か……

三たび、聞きなれた声がポケットの中から聞こえてきた。

『……おまえさん、自分に正直になる、というのはそういうことじ
ゃないかのう？』

……真つ暗になっている地下書庫の中で、クワ ゼットの声が心
に染み透ってきた。

その瞬間、自分の意識と行動が離れ離れになった。そして、隣に
シエワードがいるのも気遣う事が出来ずにクワ ゼットに、ポケッ
トに向かって訊き返してしまったのだ。

「いきなり何ですか？ それに、僕はさっき十分に自分と向かい合
って決意したんです！ 何とかするって。してみせるって」

やっっちゃってから、失敗に気づく。それが人間だ。やっっちゃう前
に気づく人はいない。

言い終わって、ひやっとした。肩が勝手に震えてきた。心臓が痛
いほどバクバクする。頭の中は、善後策を必死に考えるも、空回り。
そして、覚悟を決めて振り返ると……シエワードは、一人で考え
事をしているようだった。こちらから見る限り、視線はまったくこ
ちらを捉えていないし、こちらを警戒しているようにも見えない。
セーフだったのか！？

『ま、まさか…… おまえさん、今ボロ出したか？』
クワ ゼットが慌てる。

「……きつと、大丈夫だと思いますよ。はい」
僕は、とにかくこう返すしかない。あとは神を信じるのみだ。

『まあ、それはおいておこう。』

私が言いたかったのは、おまえさんが、一種の逃避をしているのではないか、という事じゃよ。

おまえさんは、もしかして常に自分の目の前にびくびくしているんじゃないか、そう思った訳じゃよ……』

僕は何に対して逃げているというんだ。今は、自分としては、むしろ自分に真っ直ぐに向かい合おうとしているんだけど。

僕は、逃げている気は無い。どうしてそんな事をクワ ゼットは言うんだ？

「説明してくれますか？ それがどういう意味かを」
シェワードの方をさっと確認した後、小声でクワ ゼットに言った。

『ホントに、大丈夫じゃろうな？ シェワードは気づいておらんかな？』

確かめ声で、クワ ゼットが確認してくる。

「はい、大丈夫です。バレてはいませんよ」

僕は、自分に暗示をかけた。大丈夫であると。そして、それを疑うのは馬鹿な事なんだと。

そして、それを無理やり飲み込んで、丸め合わせてクワ ゼットへの返事にした。

「どういふ事は、苦手なんだがなあ……」

「まあ、良いということにしよう。」

考えても、バシていたらどうしようもないしのう。あいつは、結構手強いのじゃよ。』

それは、僕ももろ手を上げて賛成だ。

『……さて、ここからが本題じゃ。』

私がさつき、おまえに対して逃避という言葉を使ったのは、常に何だか、おまえさんの腰が泳いでいるというか、浮いているというか、何か地にしっかりとついていないような感じがするのじゃよ。

おまえは、無意識に他人を怖がっているではないか？

ぱつと見、おまえはえらく被害妄想っぽいところがあったり、誰かに寄り掛かる事を極力避けるじゃろ？

私が横から見る限りでは、そう見えるのじゃ。

この間も言ったと思うが、自分の容量は限られておる。

一匹狼では、この世でもあの世でもうまくは世渡りできん。

ここは、シエワードに頼れ。悪い事は言わん。

あいつは、根は優しい子じゃ。だから、おまえさんをここまでわざわざ案内してくれた。

これは言わなかったが、シエワードは本当はあの姿どおり、『表世界』で言えば中学生の女の子程度の体力しかないんじゃ。それを、顔にいくらかも出さずにここまでおまえを先導してきたのじゃぞ。おまえは散々に、疲れただとか、まだなのかだとか、色々と途中言っていたようだが……

もう既に、おまえはシエワードにとっては150%迷惑なんじゃ

よ。
でも、あいつはおまえに、しんどいから休もうなんて言ったか？
……十分、もう世話を見てもらってる身分なんじゃよ、おまえさん
んは。

人を、外観だけで決め付けちゃいかん。

“シェワードは、自分よりも年下だから”なんて理由で、おまえは
あいつに自らの片方の肩すらも預けられないのか。

この前も言った通り、この世界の事をおまえさんは何も知らない。
そんな意地を張っているようじゃ、どうしようもなくなるぞ！』

クワ ゼットの声はいつからだろうか、意識しない内にパイプオ
ルガンのように重く、威厳に満ちたものになっっていた。

身に染みだ。隣でシェワードが何をしているのか、こっちを見て
いるのか、それとももしかして聞き耳をそばだてているだろうか
なんて、何にも考えられなくなった。

確かに、そうなのかもしれない…… 僕のさっきの決意に見えた
ものは、自分のつまらない意地だけだったのかもしれない……

外の方、階段の上からの光が眩しくなってきた。その光のわずか
な一筋が、眩しすぎて……

第21話：共に歩む為に（前）「『黒の書』編・九」（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

すみません。少しだけ言い訳をさせていただくと、あれから、事情があつてPCを触れない状態があつたもので。

でも、まだ僕はこれは書きつづけるつもり、意志はあります。更新が遅くなって済みませんでした。

ところで、次回に黒の書編は終わる予定です。

第22話：共に歩む為に（後）「『黒の書』編・十」（前書き）

戸惑い、迷い、でも結局は一つの道に通じている。その道がもと
もと定められていたものかどうかは、誰も知らない。

運命は決まっている。

そうかもしれない。でも、それで行くところまらなくないか？ 人
生を楽しみたいのなら、変化のあったほうが良くないか？ 平らな
山では、山登りはつまらないのではないか？

僕に言える事は、ただそれだけ。

第22話：共に歩む為に（後） 『黒の書』編・十』

じゃあ、僕は一体どうすればいいんだよ。ここにただでシエワードの迷惑になってるのに、さらにシエワードに寄りかかっていいものなのか……

僕の中のプライドという名の固いもの、またそれに加勢するもの達がそれを拒絶する。しかし、その固いものを向こうへと、あさつての方角へと押し戻そうとしている何かがある。

『……クワ ゼット。僕は、僕なんかシエワードに迷惑をかけて良いんですか？ あなたが思っているほど、僕は使える人間じゃありませんよ』

夢の外の事になるのだろうか、色々と昔の日々の事が、僕の脳裏の中にややばやけながら甦ってくる。それを思い出してみても、自分が何かこの世の中に役に立っているかどうかといえば、正直微妙なものばかりだ。

『おまえが、自分が居る事によってシエワードにとつてのマイナスにしかならないと思うのなら、私が引き止める理由もあるまい！』

普通に、死後の世界を満喫してくれば良いぞ。はっきり言うておくが、私は冗談を言っているのではない。何回でも言うが、ここは死後の世界だ。決してさめる事の無い、真つ暗な闇だ！』

クワ ゼットが、強い口調になって僕に鋭い切っ先を突きつけてきた。僕はまさしく今が、クワ ゼットにきっぱりと捨てられた瞬間に思えた。

きつとクワ ゼットだって、これまでの僕の言動を見ていて失望したんだ、なんて事が頭をよぎる……

しかし、幸いにもクワ　ゼットは、まだ僕に話し掛けるのを止めた訳ではなかった。

『……私には、おまえさんが『表世界』で世の中の役に立った例を少なくとも一つは知っておるぞ。そしてそれは、おまえさんが“死んだ”直接の原因だったりする』

クワ　ゼットの口調が、赤子をあやすような優しいめのトーンに変わって、さらっと爆弾発言をした。

そういえば、その話をまだ聞いていなかった。僕の死因とされるお話を聞きそびれていた事をようやく思い出した。

『それを、僕にここで話してください！　お願いします、クワ　ゼット』

夢中で、また声が大きくなって自分にはっとした。そして、また咄嗟にシエワードの方を向いたが、シエワードはまだ向こうを向いて考え事をしている。

『……まあ、その辺りはシエワードに聞いてくれい。そこまで、私に頼るな。』

とにかく、私はおまえさんに賭けた。前にも言ったが、私はこれまで数多の人間達を見てきたんじゃぞ。その私がおまえに賭けたのじゃ。大丈夫、もつと自分を信じてやれ。

自分が信じられない奴の目の前に、明るい風景は現れはしない。自分以外の人に全くもたれられない奴には、ふかふかのソファ―の本当の柔らかさは分からない。

そして、自分で何かを掴みに行かない奴の行く先に、幸せはないぞ！』

その後、僕がしばらく黙って、ポケットの中に小声で、『分かりました』と答えても、返事は返って来なかった。

というか、ずっと僕は立ちっ放しで、ポケットに向かって喋りつづけていたんだ。周りには、自分の作った無駄なほど余っている椅子があるのに、その一つにも座らずに。そりゃあ、シェワードには不自然に見られていただろうな……

シェワードには、クワ　ゼットにはああ言ったけど、とっくにはばれてしまっているだろう。

でも、とにかくクワ　ゼットの言った事は正しいんだろう。

この状況を何とかするには、シェワードに僕は頼るしかないんだ。それ以外に、解決の方法は無い。

格好悪いだろう。そして、やっぱり嫌だ。

けれどそんな事ばかり言っていたら、僕がたとえ何をするにも、僕の為にここまでしてくれているシェワードにいつまで経っても他人行儀な態度しか取れない。

……難しい事は、後で考えよう。仕方ない、今動こう。時間がこれ以上経つと、店主だって店を閉めちゃうだろうし。

あいつ、じいじと話してるな。

シェワードは気づいていた。それで、九条亮太が時々向こうを向いたまま、大声になって自分のポケットの中に叫んでいる光景と、その発言内容からみて、まだ九条亮太は迷っているらしい。

これが、あいつなりの気遣い、か……　何か、頼まれ事をされるのを待っているっていうのも複雑な気分だ。

でも私は、あいつを信じてみたいと決めただ。

それにしても、じいじはまったく……

二人の会話を盗み聞きしていると、恥ずかしくてすぐにでも会話を中断させたい所や、何故かは知らないが、どうしてもにやけてしまふ所がある。それに、久しぶりに聞いた。じいじが怖くなった時の口調を。

それに、最後の言葉はとても懐かしかった。

あれを、これまで何回、何十回と聞いてきただろう。

もう会えないのかもしれない、と思うと胸が苦しくなる。そして、泣きたくなる。

でも、今泣いたらばれてしまう。我慢だ……

まずは私にとっては、九条涼太がパートナーとして本当に信じてもいい人物なのかを見極める方が先だ。ここで、私が会話に飛び入っていくと、ややこしい事になるのは目に見えている。そう思って寝たふりでもしておく事にした。とはいっても、九条亮太がさつきから動かないものだから、私はずっと奴に背を向けて、奴が必死に作ったうちの一つの椅子に腰掛けていた。個人的に、座り心地は悪くない。だから、このまま“座り寝”でもしていた事にする。

自分で、自分らしくないなって気もする。今は、自分が人間を、九条亮太を気遣っている。

『自分で何かを掴みに行かない奴の行く先に、幸せはないぞ』

じいじの言葉が、胸の中に溢れてくる。

私は、幸せになりたい。この“力”を使って、誰かを幸せにしてみたい。

だからこそ私はあの真っ暗な空間で、ずっと待っていたのだから。

しばらく経つと、九条涼太は落ち着いたようだった。
こっそりと振り返って様子をみると、ポケットから目を上げて、目線が真っ直ぐに戻っている。それで、何か追いかけてくるものを振り切った後のような、さつきよりも純粹な表情をしている。

もう、良いかな？

「あゝ 私も、疲れていたんだな。寝てしまっていた。お、おまえは起きていたか」

大きめの声で、わざとらしく立ち上がって見た。

僕は驚いた。いきなり、シェワードが立ち上がったんだから。でも、彼女はこれまで寝てたのか。それならばバレていないんだな……心に安堵が広がった。

さて、後は僕がシェワードに協力を頼むだけだ。決着を僕が付けに行かなくっちゃ……

顔に無意識に入ってしまった力を抜いて、深呼吸を数回した。それでも落ち着かないので、手のひらに大の字を三回書いて、それを飲んだ。

こんな時には、普段神仏を全く信奉していない僕なんかでも、こんな呪術的なものにすがりたくなる。溺れる者はなんとやら、というやつか。

そして、シェワードの方にさつと振り向いて、そのままの体制を崩さずに、寝起きで目を擦っているシェワードの方を向いて、第一声を吐き出した。

「シエワード……やっぱり、協力をよろしくお願いします。

さつきは偉そうなことを言っただけ、ごめんなさい。冷静に考えれば、必死に椅子を作ったってぶっ倒れたあれが僕の精一杯だったの…… 他に、いい方法も浮かびませんでした。

僕に手伝える事は何でもします。それで、『黒の書』はシエワード、あなたが貰って下さい。

だから、お願いします！」

言ってみると、かなり格好悪い。だけど、言い終わると気持ちは全然楽になった。

肩から力が勝手に抜けて、身体の硬直がほぐれていく。

あとは、シエワードの返事が全てだ。

そうか…… こいつは、これを言うだけで、こんなに緊張していたのか。

やっぱり、おかしい奴だ。何か、おかしくて笑えてきた。そして悪い気はしない。

まあ、これ以上馬鹿やって倒れられても困るし。なんと言っても私自身不思議だが、こいつがそれを言うのを待っていたのだから。

「仕方ないなあ。分かった。私の“力”を貸してやろう。

それから、『黒の書』は私に要らん。もう、この世界のほとんどの事を私は知っているのだぞ。その私に『黒の書』を差し出すのは私への侮辱というものだ。おまえ、私に何でもしますと言ったな。じゃあ、ちゃんと働いてもらうからな。“パートナー代理”として。しっかりやれよ！ “パートナー”の役は荷が重いぞ。

……これをもって、臨実試験とするからな。

あと、これはどうでも良い事だが、言葉遣いが丁寧なのは良い。
だが、どうして私の名だけは呼び捨てだったのだ？

まあ、良かった事にしよう。

……こちらも、よろしくな」

シェワードにとっても、何か新鮮だった。

こういう人間に会ったのは、少なくとも2人目だ……

これから、一生懸命に見定めてやる。こいつ、九条亮太が私のパートナーに本当にふさわしいのかを。じいじの目は腐っていなかったのかを。

シェワードは、快くOKしてくれた。きっと、これで良かったのだろう。それに、『黒の書』も僕に読ませてもらえるみたいだ。

そうすれば、この世界が何なのかがよく分かるはずだ。

「じゃあ、店主の所に行くぞ。すっかり暗くなってしまった、急がないと」

シェワードは、そう元気にいうと階段をあつという間に駆け上っていく。僕も、それに負けじとシェワードを追いかけて走り出す。

足はすっかり軽くなっていた。

階段を上っていくと、どんどん上からの光の筋が広がってくる。

下ってくる時には結構暗かったから気づかなかったけど、階段は螺旋状になっていた。でも、どうして今明るいんだろう？ とつくに真夜中だろうに。いや、『裏世界』だから何か特別な事でもあるんだろうか……

そして、その光の筋の洗礼を浴びながら地上に上がってくると、

なんと地上ではもう朝日が昇りつつある所だった。日の出は結構前に過ぎていた様子だった

地上部分の「万書館」は、店を閉めようと、着々と店主が書物を整理している所だった。ひさしも取り払われている。ひさしが無かったから、光が地下書庫まで降りてきたのか…… しかも、朝日が

「おお、おまえさん達か。もうそろそろ、この地下書庫に鍵を閉めるところだった。起こす手間が省けた」

店主が書物を積みながら話し掛けてきた。

シェワードが呆れ顔で、

「おまえが倒れ込んで、あんな所で寝ちゃうから、すっかり朝になっちゃったじゃないか。」

まあ、私も途中から寝てしまっていたが

と軽く笑いながら僕のわき腹を小突いてきた。そうだったのか……

店主は、感心したように言う。

「おまえさん達二人は、確か来店したのが日が沈んで、もう真つ暗な頃。そして、店を出て行くのが朝日の昇った後か。よく頑張るわ、全く。根性だけは認めてやるよ、小僧。わしも商売の時は心を鬼にしておるが、おまえには何か光るものを感じる。長年の経験って奴だ。商売として、あの本だけはあの程度じゃ譲れんがな。」

それから、二人ともぐつぐつと寝ていたから、もともと薄暗い照明を夜の間は消させてもらってたよ」

なんだ。店主も、商売の時はおっかない人だったけど、そんなに悪い人ではないみたいだ。

私の願いごと

朝日が眩しい。その中に、辺りにあらかた整理の終わった積み重ねた本の影がうっすらと浮かんでいる。

そして、店主とシェワード、僕の三人の影が、それぞれ斜め後ろに長く伸びている。

僕が、勇気をまた絞るようにして、店主に話し掛けた。

「店主、もう一回、商売してくれませんか？」

店主は、それを僕が言っていると、表情が鋭くなり、声を低くして言った。

「……小僧。悪い事は言わん。言った筈だ、あの本はおまえには売れんと。商売は情では動かんぞ」

このタイミングだった。僕が切り出しにくそうに、でも頑張って言おうとするのを気遣ってシェワードが言い放った。

「私が、あなたの『表世界』での願いごとを一つ叶えてあげます。これで、どうですか？」

私、実は“空奏師”なんですよ。

自己紹介をしておきましょう。私が空奏師のシェワードで、ここにちにいるパツとしないのが“パートナー代理”の九条涼太です。

あなたの、『表世界』での無念、一つ叶えてあげましょう」

朝日は、輝いていた。

『裏世界』も、ちゃんと日は昇っていく“世界”だった。

第22話：共に歩む為に（後）「『黒の書』編・十」（後書き）

「一読、ありがとうございました。」

これで、『黒の書』編は終了です。この次から、シェワードの“空奏師”としての仕事、それをサポートする僕との話になります。ようやく、ファンタジーらしくなっていけます……

第23話：交渉成立 「初仕事編・序」（前書き）

イエスかノーか、と聞かれれば二者択一。どちらかを選ばざるを得ない。どちらも選ばないという選択肢は存在しないし、創ってしまえば選択の意味がない。

けれどこれが具体的になればなる程、話は悩ましくなっていく。例えば、必要か不必要か。はたまた、正義か悪か……

第23話：交渉成立 「初仕事編・序」

「どこかで、聞いた事がある…… “空奏師”か」

店主は、目を見開いてシェワードの方を注視している。

シェワードは見抜いていた。店主は『表世界』に何か遺してきたものがある、と。

仕事モードに入った私にはパツと見ただけで、自分の“力”がその人に役に立てるのかどうか分かる。まあ、大体の人間には何かしら『表世界』での未練がある。だから、何も店主が特別だと言う訳ではないが。

「……証拠はあるか？ シェワードさんとやら、あなたが“空奏師”であるといえる証拠は」

店主は、疑り声でシェワードに問い掛ける。そして、その双眼はずっとシェワードを見つめ続けている。

店主からのその問いかけを聞くと、まずは目を閉じる。

そして、心の奥に溢れている入らないイメージを頭の中で洗い出し、瞼を開けて店主の眼をしっかりと見つめる。

そして再び目を閉じて、感じたものを言葉に変換して、口から出す。

「息子の事、心配じゃありませんか？ 彼は、今元気にやってるでしょうか……」

その言葉がシェワードの口からおもむろに出てきた時、店主は急に顔を曇らせた。

シェワードは、それには全く反応しようとはせずに続ける。

「息子さん、どうやら貴方の死んだ後はずっと怖い顔になってしまったようです……でも、彼は諦めていませんね。画家の夢を。」

そしてまだ、貴方の送った贈り物を大切に宝物にされているみたいですよ」

店主は、ますます暗くなる。しかし双眼はそれとは逆に目じりが吊り上がっていくので、それはそれは恐ろしい形相になっていた。もとの冷めた感じの表情は微塵も感じられない程に。

「おまえさんに、それは本当に見えているのか……？」

本当に、絶対に間違いとかではないのか？」

震え出しそうな声だった。頑張って震えを押し殺して出された声だった。

「私は間違いは言いません。私の心の中に湧いてくるものを言葉に変換しているだけですから。」

貴方の、息子さんを心配する気持ちの深さは私には全ては理解する事は出来ませんが、その一部を伝える事ぐらいは出来ます。

そして、『黒の書』はそのために必要なんです。

私と共にいる、この“パートナー見習い”が全くもって未熟な者で、この世界の事をほとんど知らないのです。この者にこの世界の事を少しでも早く理解して欲しい、その助けに『黒の書』をさせてもらいたいのです」

仕事となると人は態度や口調を限りなく変えられるものなんだな

……横でボサツと突っ立っている事しか出来ない僕が、自分の無力さ

を噛みしめながら思ったのはそれが精一杯だった。

店主は、シエワードの言葉の途切れた後、しばらく間を空けて、タイミングを見計らったようにシエワードに言った。

「こう言っちゃ失礼だが、あなたはその程度の“パートナー見習い”で良いのか？」

もっと優秀なのが、この裏世界にも他にわんさと溢れているだろうに」

確かにそうだ。僕は、よくよく考えてみれば何にもシエワードにとってプラスになっていない。

『黒の書』は、僕の為。そして何だかんだ言って、シエワードの“力”を使ってそれを読むのは僕なのだ。彼女ではない。

単なるお荷物じゃないか、僕は……

これまでの紆余曲折は、僕がその考えにたどり着くのが嫌で遠回りしていたのではないか……

頭の中がその考えで満たされかけた時、シエワードが店主に言うていた。

「……いや、私にはあいつで良いんです。他の連中とは、私はそりが合わなかったもので」

シエワードの顔をその刹那、すばやく覗き見ようとしたが、ばっ

たりと彼女と目線が合ってしまい、お互い焦点を無理矢理に視界の果てへと押し戻した。

それを見ていたであろう店主は、僕が再び気を取り直した時には表情をだいぶ元に戻しかけていた。

「まあこの小僧、諦めの悪さは面白い。」

わしもかなりこの世界に来て時間が経ったと思っていたのに……
そういう事は実に不便だ、この世界は。

実体のない世界、裏を返してみれば、確かなもの、実体のあるものがない世界。悪く言えばニセモノの集まりだ。

噂に聞いていた事のある、“空奏師”の存在……　そういう事を実際にこの耳で聞いてしまったのは、わしは思わずあなたにわしの気持ちを託してみたくなくなってしまった……　もう、諦めておこうと思っていたのに。

というか、諦める以外に何もありえないと思っていたのに。

じゃあ、『黒の書』は貸してやろう。わしの頼みを叶えてくれた暁には、その本はやる。

これでどうじゃ？

こんな大胆な商売をしたのは、久しぶりだ」

僕は、この展開を望んでいた。というか、そのためにシェワードに頼ったのだ。

でも、何かうまく行ってみても釈然としない。

心の中が、何が何か分からない程に考える事がありすぎてごちゃごちゃになってしまっている。それに、さっき思った事。僕がお荷物以外の何者でもないのだろうと言う事……

第一に、僕が本当に死んでいるのか死んでいないのかの結論すら出ていない。累積されたものが、混ざりに混ざって分からなくなっ
てきている。

だから、とりあえず全力でシェワードの為に役に立ちたいと思っ
た。そうして、少しでも重荷にならないようにしようと思う。それ
でもダメだったらってのは……

いや、考え事は後回しにしよう。別に、ここが夢にしる死後の世
界だったにしろ、どうやら時間には追われなくて良い身分になって
いるみたいだし。気持ちを整理できるまで、逃げさせておいて欲し
い…… 追われているのか、追っている側なのかすら分からないけ
れど。

シェワードにとっても、発音してみたら違和感があった。

『他の連中とは、私はそりが合わなかったもので』なんて、なんと
微妙な発言をしたものだろう……

でも、私はあれに賭けてみようと思えた。それが、本当の理由。
これが、自分で分かっていれば十分なんだろう。

後は、あいつ、九条涼太がどれくらい“パートナー見習い”とし
て有能なのかを見せてもらおう。

第23話：交渉成立 「初仕事編・序」(後書き)

ご一読、ありがとうございました。すっかりスローペースの更新になってしまっている事、お詫びします。

スピードを速められそうなら速めていきたいので、その時もまたよろしく願います。

ようやく、ファンタジーらしい展開へ……

第24話：出発点、そして到着点 「初仕事編・一」(前書き)

ボーッと前を見ている。頭には、何の計算も無いし、策略も無い。これからの行動をはっきりと決めてもいない。

そんな時に、ふっと後ろを見ると、後ろがいつの間にか迫ってくる。

自分の中で、打算では割り切れない部分を完全に振り切った時、後ろから迫ってくるのは追いつてたのか、それとも向かい風なのか

……

第24話：出発点、そして到着点 「初仕事編・一」

その後、僕たち二人は『裏世界』見物を一旦中断して、出発点であるあの真つ暗な空間に戻る事になった。

シエワードによると、“仕事”を始めるのは絶対にあの真つ暗な空間からじゃないとダメなんだとか。

シエワードは、つい先程までの、店主と話している時ぐらいの頃から本格的に仕事モードに入ったらしく、今ではすっかり動きや喋り方がしゃきつとしている。こう言つと聞こえは良いが、要は口調がますます偉そうになって、命令調へと変わってきたと言い換えるのが正しいのだろう。

「おい、さつさと帰るぞ。おまえにとつては初めての仕事なんだから、ぐずぐずするな。ぐずは捨てていくぞ！」

それからこんな感じの、叫び声に近い声がシエワードからたびたび飛んで来るようになったのだから。

店主の一応の見送りの中、僕とシエワードは「万書館」を出発した。

『では、わしの頼みを話しておく。』

わしの頼みは、ずばり我が息子にこの通りの内容を伝えて欲しいんだ。絶対に少しも間違えないでくれ。

「わしは、おまえに申し訳ないことをした。

おまえの好きな道に、思い残しなく進んでくれ。1回しかない、後からは決して巻き戻せない人生を思いっきり走ってくれ」と。

多分、もうちょっと時間をかけて文面を考えればもうちょっと良いものができるかもしれん。

でも、回りくどい事をくどくどと言うよりは、このわしの言いたいど真ん中を伝えてきて欲しい。

それが終わったら、忘れずにわしに“報告”に来てくれよ『

店主の『願いごと』は、僕が思っているより短かった。

店主があれほど大事そうにしていた『黒の書』の対価にしては、あまりにもあつさりしていて僕の方が内心驚いてしまった程だ。

これについてシエワードに、「万書館」を出てすぐに隙を見てズバリ聞いてみると、

「前に言ったか？ この『裏世界』は、一般人は『表世界』に何ら影響を及ぼす事が出来ない世界だ。

この世界から『表世界』へと自分の意志を働かせる事ができるっていうのは、この世界ではとてつもなくありがたい事なんだぞ。そこんとこを頭のどこかに必ずおもしろしを付けておけ。

人によつては、さっきの店主もそうだったが、この世界は『実体の無い世界』だと言う事を、自分の中でどうしても許せない奴らがかなりいる。

この世界でいくら価値の高い『黒の書』を持っていても、彼らにとっては所詮は『実体の無いただの空想』であつて、それを所有している自分の存在でさえも、『実体の無い夢の中の自分』のようなものなんだろう。だから、『実体の伴っている世界』に自分が間接的にでもアプローチできるのは、この世界の何物にも勝るものなんだ。彼らにとつて。

それで、私にあんまり欲張ったものを注文して、私がへそを曲げて断られてしまうのが怖い、というのはいくらかあると思う」

と長々と、自分の説を力説してくれた。

それを喋り終わったシェワードは、僕が反応を何も返さないうちに、

「さ、じゃあここからワープで一気に帰るぞ。

これからはあの真つ暗な空間がおまえにとっても住み家だからな。あの空間の事は「ホーム」と呼べ！

ワープしたら、ワープする先の空間の何処に着くかは全くランダムだから、ここ「裏商店街」のような広い空間では目的の場所まで行くのは難儀なんだが、我が「ホーム」は狭い個室のような空間だ。だから帰りは楽に移動が済む。 いざ、「ホーム」へ！」

と叫んで、僕の手をすばやく引っ張ってきた。

それから、僕とシェワードは二人して深呼吸をして心を落ち着けた。

そして、1・2・3……で、「裏世界のロビー」を経由して、あの真つ暗な空間「ホーム」に戻ってきた。なぜか、今度は必要が無いのに互いに手を繋ぎ合ってた。

ところでこれは余談なのだが、ワープする瞬間、僕は一瞬心の集中を乱しかかってしまいそうになったんだ。

この『裏世界』の中の一つの“存在”に自分になろうとしている事が、実感をもって急にぐっと迫った来たせいで。この世界に慣れはじめているという事、そしてこれからシェワードの“パートナー見習い”として人様の『願いごと』を叶えるということに携わるという事が、実感を背負って僕の後ろから足音を立てて迫ってきた感

覚にひやっとしたのだ。

頑張つて、シェワードの役に立とう。

ここが『死後の世界』であろうが、『長いリアルな夢の中』でもどちらでも良い。そんな気分になった。

まだ朝が早い「裏商店街」には、ようやく朝日とその姿を仰々しく現そうとしているところだった。この時の空の色は、僕がこれまで慣れ親しんできた世界の空と同じ色のような気がする……

第24話：出発点、そして到着点 「初仕事編・一」(後書き)

ご一読、ありがとうございました。

時間がようやくやく空いてきたので、再び投稿スピードを少しずつ上げていきます。

また、次話も気が付いたら是非読んでください。

第25話・く幕間く 言葉に表せない気持ち（前書き）

ちよつと、一休憩して小休止。さて、その後再び歩き出そうと足を踏み出す。この時、足はまだ休みたがっている。

ここで、最初の一步をグツと踏み出せるかどうか勝負なのだ。

踏み出せたなら、決して楽なだけではない世界の中でも最後まで己の道をまっとうできるであろう……

第25話：～幕間～ 言葉に表せない気持ち

こうしてようやく『裏世界』見物を一段落させて、僕たち二人は今、この真つ暗な「ホーム」にいる。

出発してきた時と何にも変わっていない。というか相変わらず何も見えない。

この「ホーム」にワープしてきた時、僕には着いたのかどうかすらも分からなかった。自分の目が開いているのか、閉じているのかいくらやっても周りには闇しかない。ここがもともとこういう場所なんだと知っていても、改めて来てみるとやっぱり怖い。この闇に、僕はこの前は少しでも慣れていたのか……と、自分で過去の自分を褒めてみたくなる現在の自分。

でも、今はそれどころじゃない。この闇の中に自らが溶けていってしまいそうで、闇の中の何かに噛み付かれそうな気がして、

「シエワード？」

と大声を出してシエワードに声をかけてみる。

「いるぞ。大丈夫、もうそろそろゆっくりとマシになってくるから」とすると、落ち着いた声がすぐに返ってきた。

これが、どんなにホッとした事か。シエワードと一緒にいて、2人で良かったというのがどんなに心強かった事か。相手と離れた場所にいても、言葉さえあれば、その声さえ届けば誰かと交信ができる。その言葉の偉大さを身体で触れる事ができた。シエワードの言う通り、しばらくして目がこの暗さに慣れてくればだいぶマシになるだろう。

私の願いごと

僕はそれからはじっと、目がこの闇に慣れてくるのを待った。シエワードからの“仕事”についての指示を待ちながら……

……そして、時はゆっくり流れしていく。待っている時間ほど、早く過ぎると思っっている時間ほど、長いものは無い。全くだ。

シエワードがいなかったら、僕はこの怖さから気を紛らわせる為に思いつきり叫び出していたのかもしれない。年下の、というか僕よりも何となく幼く見えるシエワードの前で情けないところを見せたくないから、その意地で叫び出していないようなものだ。

……時間は結構経った気がする。僕の独断と偏見で言わせてもらうと、少なくとも『表世界』で言えば、だいたい十五分前後は経っただろう。おかげで、だんだんと目が慣れ始めてきた。

それにしても、最初にきた時の免疫が出来ているのかもしれない。目が慣れてくるのが前より明らかに早い。それとも、僕の独断と偏見の方が間違っているのか。

しかしこの世界に時間の概念が無いとはいえ、少なくともワープし終わってからかなり時間は経った事は事実だろうに、シエワードがまだ一言も喋り出さないのが不思議だ。ワープ前はあんなにきばきしてたのに。

それが不安となり、積もり積もってついに待ちきれなくなって、僕は小声でシエワードに尋ねてみる事にした。

「あの、どうして何も喋り出さないんですか？　僕が喋るのを待っていた、とかですか？」

僕がそう切り出してみると、

「だから、さっきも言っただろう？　明るくなるのを待ってるんだよ」

と、何故かわくわくした子供のような、上機嫌そうで程よく緩んだ声が返ってきた。

シエワードも、目が慣れるのを待っているのか？　いや、シエワ

ードはずっとこの空間に僕よりも全然長くいるんだから、この真っ暗にも慣れきっているだろう。なのに、そんなに目が慣れるまで時間がかかるのか？

それに、あの仕事モードの彼女は何処に行ってしまったのか？

何か、状況が変わったのか？ 色々な疑問が頭の中で氾濫を始める。

その時、それらの思考の氾濫が嫌になって、思考を他に向けてみようとして試みていたところ……

あれ？

ようやく僕は周りの異変を感じた。もしかして、本当に真っ暗ではなくなくなってきているのではないかと。

なんとなくだが確実に、この「ホーム」の中の闇は薄められていつている。徐々になのだが、どこからか白っぽい煙のような、ちよつと『表世界』で言うところのドライアイスの煙のようなものが出ているようで、それが薄っすらとゆっくり広がっていくのが目にぼんやりとだけ見えるからだ。

僕がこの異変についてシェワードに尋ねようとした時、これまたどうしたら良いのかわからないことが起こった。自分のポケットの中から小さな声が漏れ出て来たのだ。

「シェワード、我が娘よ…… 私を許してくれ……」

それはクワ ゼットの声なのだが、かなり感極まっている声で、とにかくくごめんごめんと、シェワードに対する謝罪の声ばかりが漏れ聞こえてくる。

どう行動して良いのか、僕は分からなくなってしまった。

クワ ゼットに何か聞こうとして聞ける状況では明らかに無いし、かと言ってここでシェワードに下手に声を掛けて僕の近くまで彼女がもし来てしまったら、ポケットから漏れているクワ ゼットの声

に気づかれてしまうだろう。

色々と考えたが結局、とにかく時間が過ぎるのを待つことにした。シェワードが慌てていないところからして、緊急事態ではなさそうだし。僕に出来る事が無いんだから、待つしかない。あんなに深刻そうなクワ、ゼットに余計な一言を掛けるほど、僕は自身の事を空気が読めない人間ではないと分かっているのさ。

それに、だんだんとこの「ホーム」が明るくなっていくのは、見ている気分が少しずつ晴れていくようで、見ていてまんざら悪いものではなかった。真っ黒なブラックコーヒーに、純白のミルクをゆつくりと音も無く注いでいるようで……

それから、僕を感じた体感時間では一時間ぐらいももしかしたら経ったかもしれない。クワ、ゼットの声は、おそらく十数分前ぐらいにポケットから漏れなくなっていた。

今や、もうすっかり我が「ホーム」の空間は、闇ではなくなっていた。

真っ白、とは言わないが、もやが薄々と層を作って、その層が控えめな白色を纏っている。ここがもとが完全な真っ暗闇だった場所だとは、誰にも想像でき得ないだろう。

でも、僕にしてみたら真っ暗よりも今の状態の方がはるかに良い。もやは、まるで高い山の山頂付近に朝早く薄っすら立ち込める霧のような感じに似ていて、空気も美味しく、悪い感じは少しもない。あと、ここから見てみると、シェワードが僕の正面の少し離れたところにポーッと立っているのが目で確認できた。

それと同時に、僕が初めてこの「ホーム」の全貌を見る事が出来た。

「ホーム」の広さは、多分縦横がそれぞれ数メートルぐらいの正方

形だ。その正方形の中には、家具らしきものは一つも置いていなかったが、正方形の四隅の内の一隅には色々と物がごちゃごちゃ山の如く積んである。それを除くと、「ホーム」はただのガランとした空き部屋みただった。

僕が、シェワードにもう一回声を掛けてみると、彼女ははっと我に返って、

「我が「ホーム」が、明るくなったのは、私がこれを使ったからだ」と言っ、彼女の足元にあったやや小さめのレトロっぽいランプを持ち上げて見せてくれた。

薄くだが、立ち込めているもやのせいで地面の近くはこれまではぼんやりとしか見えていなかったから気づかなかったけど、シェワードが持ち上げてくれたおかげでその存在に僕が気づく事ができたそれ。

見た目はただのランプだったが、ただのランプと違っているのは、ランプの灯が灯っている部分が七色に光っている。

「このランプは、“エメラルド・マイ・バックランド”。このランプのスイッチを入れた奴の心の中の“色”を具現化して、空間の背景としてくれる、面白い物だ。

これは私の父上の遺してくれた、私にとっては大事な物なんだ。“仕事”をここでする時に真っ暗ではどうにもやりづらいだろうし、仕事を本格的に始める事を決意した時に使おうと思って、楽しみにしていたんだぞ。

ま、おまえは正式な“パートナー”では無いし完全に信用もしていないから、これからずっとこれを付けているのかは未定だがな」

シェワードは、そう気分良さそうに笑顔で説明してくれた。言っている内容は、僕にとっては結構きついものなただけだ。

「それと、おまえももう気づいただろうがあそこに積んであるのが
“仕事”の道具だ。
さ、支度するぞ」

- 0 -

“仕事”の支度を始めた後、部屋の端に積んである様々な物をシェワードが確認している途中に、僕は思い切ってクワ　ゼットに一声、ポケットに向かって小さく呼びかけてみた。
するとクワ　ゼットは、さっきの感極まった声ではなく普通の声に戻っていて、なんじゃ、とだけ返してきた。

それで、僕がどう言っただけ良いものか困っていると、
「……シェワードは、前に話したかの？　本当は暗闇が苦手なんじやよ。それなのに、これまでわしの遣って来たあのランプを使っていなかったのはどうしてなのか、正直ずっと疑問に思っておったんじや。わしの口から面と向かって聞く事は、流石にわしでもできんかったからのう。」

それが、……あんな理由じゃったのかと、しみじみしておっただけじゃ。

これが、おまえの聞きたかった事じゃろう？
それより、わしがさっきうつかりそちらに漏らしてしまった声、シェワードに決して聞かれてはいないじゃろうな？」

と相変わらず僕の心中を的確に読んだ答えを返してくれた。そして僕が、シェワードには聞こえていなかっただろう、と言ったら、それっきり何にも応答しなくなってしまった。

私の願いごと
シェワードは、闇が怖いのに、これまでずっとこの暗闇に耐え

私の願いごと

て来たのか……

シェワードの“仕事”への気合を示す、言葉にならないほどの重たい決意の現れ、なのだろうな……

僕は、なんとなくシェワードに向かって一言呟いてみた。「ありがとう」と。

第25話：～幕間～ 言葉に表せない気持ち（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

今回は、かなり長くなってしまいました……

一話を千五百～二千五百字まで、とこれまで目安をつけて書いてきましたが、書いているうちに収まらなくなってしまいました。

中途半端な幕間でしたが、これからも気が向いたらふらりと立ち寄っていただければこれ以上の喜びはありません。よろしくお願ひします。

第26話：リフォーム、そして一休憩 「初仕事編・二」（前書き）

行き詰まった時に、つらい時に、ふと思いつく。もしかしたら、何にも考えずに目の前へとただ進んで行ったならば、嫌な事は最小限で済むのではないのだろうか、と。

そうすれば、確かに自分の進む先にある悲しみ、悲劇を予想だにせずに進む事はできるだろう。

けれど、それで本当に良いのだろうか……

意識して見ようとしていない者と、本当に見えていない者。どちらが幸せなのかは語るまい。

第26話：リフォーム、そして一休憩 「初仕事編・二」

今、僕とシェワードは、手分けして“仕事”を始めるための「ホーム」のリフォームを進めている。

これは大変な作業だった。なんせ、この空間はこれまで何も無い空き部屋だったと言っても過言ではない状態だったのだから。

シェワードの方は、「ホーム」の一隅に積み重ねられていた様々な仕事道具を整理して、「ホーム」の中にそれぞれ配置していつている。

僕が軽い気持ちで、彼女の作業中にその道具達について質問しようとして声を掛けると、

「後でちゃんと説明してやるから、今は黙ってる」

とこちらに視線も向けずにピシリと言われてしまったので、仕方ないから黙って自分の作業の方にだけ専念した。

そして、僕の方は何をしているかと言うと、主に『表世界』で自分の身の回りにあった家具の中で、ここでも使えそうだと思える物を思いつくままに創り出しては、自分の良いと思ったところに配置している。何を置くのかはシェワードからほとんど一任されていた。だから、まるで真っ白なキャンバスに自分の好きなように絵を描いて良いと言われた気分できて、面白かった。

筆筒やテーブル、ベットと言ったものが主な物だけど、それ以外にも小物として、僕とシェワード二人分の筆記用具、メモ帳等、色々創り出していった。

……こうして、筆舌に尽くせない苦労を経て、ようやく「ホーム」での仕事準備はなされたのだった。

私の願いごと

リフォームの完成した「ホーム」を改めて見回してみる。

しかし、僕はこの世界ではドをいくつ付けても足りないぐらいのド素人。なので、ほとんどの道具はシェワードに訊かないと、何の為にあるものなのかはさっぱり、というものばかりだ。

まず「ホーム」の真ん中、未だに霧の晴れ切っていない空間のど真ん中に、まるで子供が地面にクレヨンで落書きしたかのような、くつきりとした直径一メートルぐらいの青い円が描かれている。そしてその周りには、古ぼけた『裏世界』バージョンの「どこでもア」みたいなドア、シェワードからの依頼で創った小さな靴箱が置いてある。

「ホーム」の真ん中から離れたところに、その真ん中を囲むように僕の作った筆筒や作業用のデスクがドンと置いてあって、四隅にはそれぞれベットや簡単なスタンドライトを置いてあった。ま、四つのうちの三つまではすつきりとできたけど、四つ目の一隅はやはり物置のごとく、置き切れなかった色々な物を追い詰めてあって、バカでかいカバーを被せてある。

僕は、気づいたら自分の創り出した木製のベットの上でぐっすりと眠っていた。

そしてベットから跳ね起きた瞬間、学校の準備をしなくてはと必死にバタバタし始めた。ここが『裏世界』だと気づいたのは、周りに教科書の類が全く無いことを悟ってから。まあ、それ程に「ここ」「ホーム」が僕の思う生活空間として立派に生まれ変わっていたという事なのだが。

シェワードを目で探してみると、シェワードもぐっすりと寝ていた。

まあ、無理も無いだろう。中身はすっかりしていたとしても体力は外見通りだつてクワゼットも話していたしな。あれだけ色々な

ものを一度に整理したら、疲れるだろう。

すやすやと規則正しい小さな寝息が聞こえている。

こう言うとなんだけど、寝ている時は純粹で素直な子だと思える
んだけどなあ……

ところで、シェワードの分も別に一つベットを創っておいたのだが、何故か彼女は地べたで寝ていた。ベットに慣れていないのかな？でもこのままシェワードを寝かせておいたら、“仕事”準備の方が進まない。シェワードだってあれほどやる気に満ち溢れてくれたいた事だし、ここで黙って寝かせておくのは彼女にとって不本意だろう。という事で、とにかくシェワードを起こす事にした。

「おいシェワード、起きろ〜」

呼びかけている途中で、シェワードの身体を揺さぶろうとして気づいた。手がシェワードの身体をすり抜けた後で。

よく考えたらシェワードの身体は仮のものだ、と彼女自身が言っていたではないか。だから、身体を揺すって起こす、なんて事できない。声だけで起こすしかない。

ところが、だ。シェワードはかなり深い睡眠の淵にいるみたいで、僕が声を掛けても全然起きてくれない。そのまま、僕の必死のトライも虚しく、時間だけが流れていく。

何か良い方法は無いものだろうか、と思案をめぐらせて見ていると…… あった。

一つだけ、僕は知っていた。“危険”な方法を使わず、“安全”に人を起こす手段を。

ちなみに僕は、『表世界』では朝全然起きられないダメ人間だった。誰が呼びかけても無意味。布団が無くなるうと、全く気づかな

い。休日だったら、家族は僕を起こす事なんて始めから断念、放棄
していて、いつも起きるのは昼過ぎといった有り様だった。
しかし、救いは何処かに何かしらあるものだ。僕を起こせる唯一
の手段に近い兵器が『表世界』には存在したのだ。

そして、僕はその兵器を創り出そうと試み、数分ぐらいの後に完
成した。

通称『雷』。その凄まじき音量で、『表世界』では近所迷惑甚だ
しいので休日における使用を自主規制していたほどの目覚まし時計
だ。この世界では、やはり時計の文字盤は文字盤がぼやけて見えな
いけど、時計の針をぐるぐると回して、スイッチをオンにしていれ
ばいつか鳴るだろう……

僕の方は、抜け目無い。ちゃんと耳栓も用意したし、もう付けた。
さあ、あとは……

ジリリリリ……！！

まさに、文字で表現できない世界の音だった。
シェワードの顔に、徐々に皺が寄ってきて…… ついに、目を開
けた。

ところが、大変だったのはその後だった。彼女が起きたのを見て、
僕がすばやく『雷』を黙らせた後だった。

シェワードが地べたから跳ね起きて、「何すんだ！！」と叫ぶな
り、僕の腕に思いつきり噛み付いてきたのだ……

今回分かったのは、シェワードは寝起きが極端に悪い、という事
だった。

僕はちゃんと言ったのに。目覚ましの音だから、緊急事態とかで

はない、と。

まあ、シエワードが飛び起きて飛び付いてくる直前だったけどね。

この世界に来てからの、身体に感じる浮遊感にはもうすっかり慣れていたけれど、噛み付かれると痛いのは、『表』であるのが『裏』であろうが関係無かった。ポジティブに取ると、この世界でも身体に感じる感覚はしっかりあると捉える事もできるではないか、と自分を励ましてみる僕だった。

ここが夢の世界なのか死後の世界なのかすら、まだ見極められてはいない僕だけけれど。

ところで、今回の一件で大きなクエスチョンが出来た。

シエワードの方から、というかシエワードが意識して“手を繋ごう”とか“噛み付こう”としたら実際に出来るのに、僕の方から、というかシエワードが無意識のうちに“シエワードに触ろう”とすると触れない……

これは、矛盾しているのではないか、と。

いつか、シエワードに訊ける機会があったら、訊いてみたいな。

第26話：リフォーム、そして一休憩 「初仕事編・二」（後書き）

また、更新が遅くなってしまい…… 久しぶりです。

ようやく、この物語も楽しい所に入ってこようとしている段階になつてきて、書く事がますます楽しくなつて来ました。

是非、次話も見かけたら立ち寄っていただければうれしいです。

第27話：2つの世界の狭間について 「初仕事編・三」（前書き）

物事が順調に進む時は、自分の周りのものが八割方、自分の思いのままになってくれる。

逆に、物事において八方塞がりになった時などは、八割方が自分にそっぽを向く。

その人が強いかどうかは、その時々『流れ』だけでは簡単に動かない、残りの二割の部分をきっちり持っているかどうかにかかっているのではないだろうか？

第27話：2つの世界の狭間について 「初仕事編・三」

「この辺りで、気を取り直して“仕事”へと出発する前の説明に入るぞ。

もつとも、今こんな事で時間をグダグダと浪費するつもりは無いから、必要最低限の説明とするつもりだがな。

まずは、この部屋の中にもおまえにとっては初見のものがあるだろうから、その説明からだ」

と、シエワードは何事も無かったかのように物事を進めようとしている。

しかし、実際の所は僕の左腕にきつちりとシエワードの歯形が残っていた。服の上からだったから直接は見えていないけど。

おかげで、地味な痛みがまだ腕の神経を刺激してくる。まったくやってくるものだ。

その上、シエワードと来たら、謝りもしない。

今は、これからもっと大事な事があるのだから、と怒りを抑えているが、

「おまえがいきなりあんな事しなかったら、私も大人しく起きられたのに」

なんてボソツと言うんだもの。シエワードって、やっぱりこういう所が子供なんだろうな……

私の願いごと

けれどそんな事でここで僕が怒り出すのは、なんだか僕自身が子供っぽくなってしまいう気がして、怒る気にはなれなかった。それにこの“仕事”はシエワードが僕のために進めてくれている事なのだから。

それで、僕がやや不機嫌な目を意識的に作ってシエワードの方を見ているのにも、当人は全然気づかない。気合の入った声で“仕事”への必要事項を話し始める。

「一つ目はさつき私が説明した、“エメラルド・マイ・バックランド”。これは省略しておく。さつき説明したからな。

次に我が「ホーム」の中心に、ちよつと濃い蒼の、大きな丸が描いてあるだろ？ これは“デイメンション・カッター”という、簡単に言ったら次元を切り取り、接合する事ができる物騒なチヨークで描いた円だ。詳しく説明してもおまえには理解できないだろうから、これくらいにしておくぞ。要は、この“デイメンション・カッター”で書いたその円が、これから行く『第三世界』という世界へとワープする入り口となる。今はこれだけ分かっていれば良い。その他のものは気にするな。

ここまででは、良いか？」

「ここでようやくこつちの目を見て、僕が不機嫌であるらしい事、それはどうやらさつきの一件のせいであるう事に気づいたらしく……こちらを見て、ぺこつと頭をいきなり下げた。

「さつきの事は……忘れてくれ。ああ、悪かったとは思っている」

……とても微妙な表現だとは思っけど、一応謝ってくれたような形になっているのだから、良い事にしよう。ここで拗ね続けているのも情けないと思うしね。

「ああ、別に良いですよ」

と、軽くシエワードに対して笑った顔を向けてみる。

「よろしい。それでこそ、私の“パートナー見習い”だ。過ぎた事

は仕方ない。

……今度からは、あれ以外の方法で私を起こすようにな」

そう言い終わるとシエワードは、こっちが謝ってやったんだから、みたいな顔でこちらをじつと見てくる。相変わらず、だった。

だけど、その声からは悪く思っているということが申し訳程度には伝わってくるから、これで一件落着……という事にしておう。

「じゃあ、続きをお願いしますね」

僕が説明の続きを促すと、シエワードはちよつとこちらに笑みをこぼした後、説明の続きに入った。

「さっきまでの説明で、この「ホーム」に置いてある、今回の“仕事”に使う道具については説明を終わるぞ。それだけ分かっていれば上等だ。それ以上を知りたければ、暇な時にこれを読んでくれればいい」

そういって、シエワードは僕にあの『黒の書』を手渡した。

僕の心の中は複雑だった。

ここまで、色々あった気がする。

けれども、この『黒の書』は今此処にある。

でも、それは自分の力ではない。シエワードの“力”によって得られたものなのだ。

私の願いごと

……頑張らないといけない。改めて心の中を踏み固めた。

「さて、次は身に付けていくものの説明に入るぞ」
シエワードの声はいよいよ真剣みを帯びていた。
というか、身に付けていくものって、普通に今着ているもので良いのではないか？

その事をシエワードにそのまま聞いてみると、まるで僕を馬鹿にしたような声で、
「そのまま行ったら、おまえ、死後の世界でもう一度死ぬ事になるぞ」

と洒落にならない返答が返って来た。

そんなにおっかないところなのかよ。心中で様々な考えや憶測が飛び交っていると、シエワードが話し始めた。

「まず、これから行くのは『第三世界』というところなんだが、『第三世界』は、『表世界』にも『裏世界』にも属していない、言わばその境にある世界なんだ。

ところで、『表世界』は実体のある世界で、『裏世界』が実体の全く無い世界だ、とは教えたよな。

その狭間にある世界という事は、当然、極めて不安定な世界になる。

その不安定さを表す一例を示すと、“実体の大多数を失ってもまだ全てが虚構になってはいない生物”、別の言い方をすれば『表世界』から見ると“亡霊”が彷徨っている世界なんだぞ。

そんな世界に、それ相応の装備も無しに行くということは、自殺しに行くのと同じ事だ」

僕の中の“仕事”のイメージは、がらりと変わった。

もともとの僕の中のイメージは、小さい頃に童話として『表世界』で読んだような、魔法使いが平和な国の中で誰かの願いごとをそのお得意の魔法を使ってエレガントに叶えてしまっ、というのに近い感じをイメージしていた。

そんな、ニコニコと微笑みながら進められるような“仕事”ではない、という事がようやく分かった。

「……シエワード、この世界が仮に“死後の世界”だとすると、この世界で死んだらどうなるんです？」

真顔でシエワードに訊いてみた。何故なら、結構な身の危険を感じたからだ。

するとシエワードは、僕に近づいてきて、耳元で囁いた。

「知りたかったら……実際に死んでみるしかないんじゃないか？骨は拾ってやる。」

ま、この世界では、墓など作らないぞ。そういう風習が無いからな」

辺りが霧に包まれているような、こんな神秘的なシチュエーションでそんな物騒な事を囁かれると、背すじが寒くなった。

第27話：2つの世界の狭間について 「初仕事編・三」（後書き）

まったり更新になっています……

そこで、かなりえらそうな話なのですが、これからは週末、お喋り広場の小説の宣伝板に、この物語を更新した週にはその旨を書いていこうと思っています。

これからも、よろしくお願いします。

第28話：装備品、斯々然々「初仕事編・四」（前書き）

私は大丈夫。皮肉な事に、そういう回数が多い人ほど大丈夫ではない、という事がしばしばある。

だけど、何故か言ってしまう。そう一言言えば、全て丸く収まるような気がして。

第28話：装備品、斯々然々「初仕事編・四」

僕は、精神的に冷えていた。背すじが凍っている、とはまさに今のよゆうな状態を指すのだろうか。うかうかした気持ちで“仕事”に踏み込むと、大変な事になる。それを肌で感じてしまった。

ちらつとシエワードの眼を見てみたら、シエワードも何かかひっかつかつていような、割り切れない表情をしていた。

「ま、命は何処の世界にいても、そう簡単に捨ててはならないものだからな……」

と珍しく低い声で、彼女は独り言のように呟く。

……前から、僕が違和感、というか不思議に思っていたことがあるんだ。

それは、シエワードはしばしば、ちょっとした事で急に態度や物腰、喋り方がらりと変わってしまう事がある、という事。

僕が彼女と出会って間もない頃には、それは単なる彼女の気まぐれな性格がなすものだと思っていた。

でも今思うに、その理由はそれだけじゃないと思う。やっぱり、彼女はかなり何か重い物を背負っていると思うんだ。

そして、その重さの一部が時々垣間見えているような気がするんだ……

「おい、何をボサツとしている。そんな余分な時間は私達にはないんだぞ！」

気づけば、僕はしばらくボーっとしまっていたようだった。

いつの間に元の説明調に戻っていたシエワードに怒鳴られて、我に戻ったのだった。

「さて、おまえが無駄な事を聞くから、また時間を無駄に使ってしまっただじゃないか。」

もうこれ以上、ゆっくりしている訳にも行かなくなってきた。

……だから、とにかく身に付けるものを全部身に付けてもらおうぞ」

そう言うと、シエワードはあの整理されていない「ホーム」の隅で、盛大に物を周りに散らしながら、物探しを始めた。

その様子を見ているに、なかなかお目当てのものが揃わないらしい。地面付近はずつと霧のようになっていて、探し物が見つかりにくいというのは分かる。物を探しているのだから仕方ない事なのだが、だんだんとリフォームしたての我が「ホーム」が散らかっていく……

個人的には思った。そんなに今苦労して探すのなら、さつきリフォームした時に必要なものとして整理してまとめておいたら良かっただろうに、と。

そこどころが、まだまだお子ちゃまだな、と。

ま、僕も『表世界』ではシエワードと大差ないことを毎日のようにやっていたけどね。

威張る事ではないけれど、僕も『表世界』ではとにかく整理が悪かったから。

しばらく経った後、シエワードの方から聞こえてくる物々をひっくり返している音が止まった。

「おお、見つけた！ これだこれ。」

おい、これからおまえの方に必要な物を全部投げるぞ。ちゃんと

受け取れよ。

そして、しっかりと身に付けてくれ」

そう言った後、彼女は僕の方に幾つかのものを投げてよこした。

シエワードの方から飛んで来た物は……

焦げ茶色のスケート靴。釣りに行く時に着ていくような、ポケットのたくさんある群青色のベスト。それと、一見普通の腕時計に見えるが、スイッチやつまみがごちゃごちゃあつて全体の使い方が分からない多機能そうな腕時計。あと一つは、取っ手が付いていて、全体的に表面に鋼色のつやのある物体、としか分からない謎の塊だった。

は？ 僕の第一感を言葉にすると、それに尽きた。

第一に、『第三世界』つてかなりおつかない場所らしいのにこの装備で良いのか、という事だ。武器とかは無くても良いのか？

第二に、シエワードが投げてよこした4つのものうち、3つが納得できない。というかその狙いが分からない。

ベストは何となく便利だ。でもあと3つ、腕時計はもともと持っているし、スケート靴がどうしてこの状況で役に立つのか見当がつかない。さらに、もはや何なのかも分からない、最後の謎の塊。

「……シエワード、身に付けるものつて、これで良いんですか？」

頭の中で、ただクエスチョンマークだけがぐるぐると回っている。

これで、生きて帰ってこられるのか？

「勿論だ。私に不可能という文字は無い！

これから、ちょびつとだけ説明をしてやろう」

そう言ったシエワードも、姿が少し変わっていた。

まず、シエワードも僕に渡したようなスケート靴を履いていて、白いカッターシャツの上に、魔女のような黒いマントを羽織っている。

る。

あと、小さい橙色のポーチを肩から下げていた。

これが、彼女の仕事着ってやつなのかな？

「まず、これから行く『第三世界』は、とてつもなく広いんだ。

これから、ここにある“デイメンション・カッター”で描いた円からワープして行くと言ったって、その広い『第三世界』の何処に出るか分からない。

そこで、その靴が役に立つ訳だ。

その靴は、自分の歩いている地面がツルツルだと自分がイメージしてやれば、まさしくスケートのように地面を滑る事ができる優れたものだ。ただ単に歩いていくよりもずっと早いだろ？ 『第三世界』では、そんな事もできるのだ。

次に、その腕時計は簡単に言えば特殊なタイマーのようなものだ。私とおまえ、2人の間で共通の『時刻』があつた方が色々都合が良いからな。

あと、ベストの使い方はおまえがどれだけ馬鹿でも分かるだろ？」

一万歩譲って、シエワードの今の説明で、ある程度の事は分かったことにしておこう。そして、彼女の説明は実に親切だったという事にしておく。

事実、ベストと腕時計、スケート靴の使い方はおおまかには分かったしね。

だけど、もう一つ肝心な事を聞いていない。

それは、あの不気味とも言える謎の塊の使い方について、だ。

「あの、シェワード？ もう一つ、聞きたい事が……」
僕が不満げな声でシェワードにそれを問おうとしたら……

彼女が、強張った眼で僕を睨む。そして、深呼吸を一つしてから、おもむろに話した。

「……おい、九条涼太。」

今から教える事は、絶対に口外してはならない。

私は1回しか説明しない。だから、絶対に聞き漏らさないでくれ。

これから、おまえがその創造する剣、“クレンス・アーム”の使い手となるかどうかは別として、な。

……覚悟を決めてもらおうぞ」

第28話：装備品、斯々然々「初仕事編・四」（後書き）

ようやく、次話ぐらいに『第三世界』へと行けそうです。いやあ、
ここまですが長かった。

これまでスローペースで進めてしまい、けれどもここまで読んでく
れた方々、本当にありがとうございました。

第29話・出発(前)「初仕事編・五」(前書き)

毎回毎回、これまで前書きに偉そうなことばかり書いてきた。その時々にも思っている事をまとめ、書いていくと自分ではなかなか面白かった。

だけど、後で読み返してみればどうにもダメだ。

その時に僕は学んだ。言葉は、言うだけではダメなのだ。有言不実行の私。

第29話：出発（前）「初仕事編・五」

“クレンス・アーム”を始め、私が知っている、ないし所持しているこれらのものについての詳細。

それは、実は言葉にして口から発する事すらはばかられる程に重い。

『それらの存在の詳細を知りし者は、我等が一族のみ。

それから外れし者は、如何に問わずこの世界にいる権利を失うであらう』

私達“空奏師”が太古から伝承してきたもので、私がこの世界で意識を持つずっと前から決まっていた一つの不文律ともいえるものだ。

『第三世界』という世界は、私達“空奏師”にとっても危険極まらない世界なのだ。

私達は職業上、その危険極まりない世界に頻繁に足を踏み入れる。武器の開発・改良というものは必須のものだった。

そしてその結果、私達“空奏師”は強力な武器を持つ事ができるようになった。

けれど、強い武器ができればそれを悪用しようとする者が出てくる。

そして、その悪夢がこの世界で具現化してしまった時が過去にあったのだ……

私の願いごと

ゆえにその過ちを二度と犯さぬ為にも、大昔からあるそのルールは、“空想師”としては絶対のものだ。裏切る事はどんな事情があ

ろうと、決して許されない。

私は、これまで何だかんだと言って、この時を決断する事を先送りし続けていたのかもしれない。

今、まさに九条涼太のこれからが決まってしまうのだ。

私が九条涼太に“クレンス・アーム”の使い方を教えた時点で、彼はどう頑張っても、普通に穏やかな死後の生活をエンジョイする事は出来なくなる。

ここが、彼にとつての“空奏師”のパートナーへの第一歩となる決断の時なのだ。

私は、彼に賭けるんだと決めた。だけど、奴の方はどうなのか。奴は、この『裏世界』を単なる夢の中だとまだ思っているかもしれない程度の心持ちをしている人間なのだ。

確かに、彼に見所はある。馬鹿で、気に食わない所もある頑固者だが、面白い奴だとも思えなくも無い。

だけど、これはあくまでも私から見た話だ。

九条涼太が、この“仕事”についてどう思っているのか？

それを、実はまだ一言も彼からズバリとした形では聞いていない。

私が思うところをまとめてみるに、

彼はじいじ曰く、私についての気遣いがどうだとかいう程度の理由で、あの時、「万書館」の中で『黒の書』を買ったために、私と共に私の“仕事”を手伝うと決めた、という事になるのだろうか……

よく分からない。というか、多分分かったとしても私ではうまく

言葉に出来そうに無い類のものなのかもしれない。

私は、自分で言うのも何か嫌だが、じいじ以外から、特に人間から何らかの温かい気遣いを受けた覚えはこれまでにほとんど無かった。

けれど、あの奴の行動のどこが私に対しての気遣いなのか、未だに訳が分からないが、あれはそれなりに温かった。

悪い気は……しなかった。

だけど、これから先はそんな甘っちょろい次元の話じゃない。

武器の事だけじゃない。

“空奏師”のパートナーとなる者が自らの手で成さねばならぬ、もっと重い決断を迫られる時もある。どちらにしろ、今はつきりさせた方が良く決まってる。

……今、きちんと奴の気持ちの髄を確かめなければならない。

そしてその返答次第では、奴を“仕事”へと連れて行くわけには行かないのだ。

「おまえは、これから私に自らの『この世界での命』を預け切る事が出来るか？」

私に賭ける事は、できるか？」

言い終えた後、私は気づいた。

自分の乾き切った下唇が、震えていた事に。

……そしてその理由さえもよく分からない震えに対して、己が実に無力である事に。

シエワードの様子が、どうにも急変してしまった。
いきなり“クレンス・アーム”なんて話を始めて、それが一区切りもしない内にいきなり沈黙に沈んでしまう。そしてその後、眉間の皺をぐっと寄せ、深刻そうな表情になった後……

「おまえは、これから私に自らの『この世界での命』を預け切る事が出来るか？」

私に賭ける事は、できるか？」
と来た。

そして、そう言った時のシエワードは……僕の見間違いではない限り、確かに震えていた。

これは、僕も頭を真剣に捻ってみた方が良いみたいだ。何か、僕がヤバイ事でもしてしまったのではないか？

考えてみると、思い当たる節を一つ見つけた。

そういえば、ちょっと僕は軽はずみ過ぎるのではないか。

僕は、彼女と一緒にとりあえず“仕事”をする事に決めた。そして、それを決意はした。

だけど、シエワードはもっと重い決意の元に“仕事”をやっているのだろう……

それに対して僕は何だ？

さっき、『第三世界』の事を聞くまでには、ほとんど遠足ついで

の冒険気分だった。

僕は、何をする為に一体“仕事”に付いていくんだ？

シエワードに自分の事を認めて欲しいから？

彼女に格好付けてみたいから？

自分の意地？ プライド？

それとも、『黒の書』を彼女に買ってもらったような形になっているから、その分ぐらいの働きがしたいから？

……何が、違っている。

確かに、全て嘘ではないし、否定する気は無いんだ。でも、どれも完全ではない。

そんな中途半端なものを表立てて彼女に付いていくのは、足手まといの他の何物でもないのではないか。

一体、僕は何がしたいんだ……

僕は、これからどうするのが良いんだ……？

僕は、その結論を出そうと懸命に頭を絞る。

決してお世辞でも賢いとはいえない頭を、これでもかというくらいに責め立てて、次第に追い詰めていく。そして、炙り出されてくるものを見つけようとする。

そうするうちに、頭には何故かクワ　ゼットの言葉がどこからともなく出てきて、氾濫を始めた……

『常に何だか、おまえさんの腰が泳いでいるというか、浮いている
というか、何か地にしっかりとついていないような感じがするのじ
ゃよ』

『おまえは、無意識に他人を怖がっているではないか？

ぱつと見、おまえはえらく被害妄想っぽいところがあったり、誰
かに寄り掛かる事を極力避けるじゃろ？』

『自分の容量は限られておる。

一匹狼では、この世でもあの世でもうまくは世渡りできん』

その言葉一つ一つが、僕の周りにぐるぐるとどぐるを巻き始めた。
そしてそれが集まって、僕を睨んできたその時。

頭の中が一瞬真っ白になって、足元がぐらりと歪む。
それとほぼ同時に、頭上から一筋の電流が頭のとっぺんから足元
へと貫いていったような感覚に襲われた。

プライド、思い込み、打算、猜疑心、恐怖心、利己心云々、そし
て『表世界』のぼやけた記憶、……数えられない程の、僕というモ
ノの中にあつた、言葉で言い表す事ができない塊達が、一点に収束
して、混じりあい……

弾けた。

その時の僕は、そのあまりの突然の出来事に反応すらついていけ
なかつた。

気が付けば、僕の心が纏っていた鎧兜は全て霧散してしまってい
た……

私の願いごと

そして、それを待っていたかのように急に僕の中に入ろうとして
いるモノが僕の前に現れ、その侵入を許した刹那……

僕は、死んでいるのではないか？

直感で、悟ってしまった。

第29話：出発（前）「初仕事編・五」（後書き）

すみません。次で一区切りとか言っておいて、書いていると実際に話分量になってしまいました。

ですので、次話に後編を書いて、それで本当に一区切りです。申し訳ありません……

第30話：出発（後）「初仕事編・六」（前書き）

「……これで事実上は、第一幕完、みたいなものですよ」

「まあ、これから先がファンタジー的な部分なんですけどね」

「でも、これから自分のイメージを上手く文章に乗せて人に伝える事が出来るでしょうか？」

「……修行だよ、君」

僕の脳内会話。

「これまで、長かったここまです読んでいただき、本当にありがとうございました。うございました。」

第30話：出発（後）「初仕事編・六」

言い訳を探す余地は微塵も残されてはいなかった。

そうか。

僕はとにかく、自分が死んでいるのか生きているのかという話をただただ誤魔化すためだけにシエワードに付いて来たのではないか？
こんな簡単な事に気づくのに馬鹿に時間がかかったのは、それは他ならぬ僕自身がそれを無意識に拒んでいたからなのではないか？

…？

そう思うと、急にこれまでのこの『裏世界』に來た後の記憶が、無機質なものに思えてくる。

僕、何処の世界でも人の役に立つ人間ではないという事か。

全てがどうでも良いような気になってきた。目の前が、闇に染まる。

何を僕は頑張ろうとしていたんだ。馬鹿みたいだ。

何をしたって、どうせ死んでしまったんだ。

もう、全て無意味だ……

そう思った時だった。

『……おまえさん、そこから、じゃぞ？』

絶妙なタイミングで、ポケットの中からクワゼットの声がした。

『そこでその気持ちに押しつぶされてはならぬ。
『裏世界』に来た人間は、人により個人差はあるが、いつかはおまえさんの今感じたようなモノを心にくつきりと焼き付けられるのじや。

誰だつてこの『裏世界』に来て、いつかは、な。
そしてそれを乗り越えないと、決してこの世界では生きてはゆけぬ』

クワ ゼットの声にいつもの威厳は無かった。

変わりに、前に僕をなだめてくれた…… あの、子供をあやす時のような声で。
僕をしっかりと掴み止めようとしてくれている。

「クワ ゼット、僕は本当に……」

本当に、死んで……」
自分でも情けない程に声はガタガタ震え、最後まで言葉が継げなかった。
自然と涙が溢れてきて、胸が苦しい。

『その問いに答えてやるうか？』

私の知っている事全て、私のこれまで見てきた物、感じてきた事に賭けて、じゃ。

……どうじゃな？』

ポケットからは、クワ ゼットからの僕への覚悟の如何を問う声が聞こえてくる……

僕が、ここでクワ ゼットに、答えないでくれと言ったら、彼はどうするだろうか？

……いや、それでは結局逃げているだけなんだろう。

「教えて下さい。僕に、真実を」
息を呑んだ。言い終わると同時に、そのまま自分が息を吸えなくなるかと思った。

『私に言えるのはな……』

クワ ゼットは、徐にじわじわと言葉を紡ぎ出してくる。

僕はいつズバリと言われてしまうかと思うと気が気でない。とにかく、反射的に目を瞑った。

クワ ゼットが目の前にいて、彼の姿が見えている訳ではない。

そして、言葉は目から聞こえてくるでもない。それでも、本能で目を瞑った。

そして……

『それは、おまえさんが結論を出す事なのじゃ！

そもそも、おまえさんはその結論について我が娘と以前散々に言い合っていたではないか。自分が死んだだの死んでないだのとう。じゃが…… 結局、おまえさんが死んでいるという客観的な証拠もないし、その逆も無かつたじゃろ？』

クワ ゼットは、僕に優しくそう言ってくれたのだった。

僕は、ただ単にその言葉が誰からでも良いから、聞きたかったのかも知れない。

僕だって、今のクワ ゼットの雰囲気からして、僕を励ますために今の言葉を言ってくれているのである事は分かる。クワ ゼットには僕に前、はっきりと

『ここは死後の世界だ。決してさめる事の無い、真つ暗な闇だ！』

と言われた事があるからだ。

……もしかしたら彼自身もその答えを探す一人なのかもしれない。そう思ったのは、僕がそう望んだからなのだろうか。でも、妙に心の読めるクワ　ゼットはそれ以降、僕に何も言っておらなかった。

彼は本当に僕を救ってくれた。
もう少して、僕はあの感情に飲み込まれていたかもしれない。

『自分が信じられない奴の目の前に、明るい風景は現れはしない。自分以外の人に全くもたれられない奴には、ふかふかのソファの本当の柔らかさは分かん。』
そして、自分で何かを掴みに行かない奴の行く先に、幸せはない、じゃぞ！』

どこかで、前にもクワ　ゼットが言っていたその言葉。
それが、胸に痛いほど染みだ。

思えば、そうだよな。
僕は、自分を急に追い詰めすぎていたのかもしれない。そして、大事な事を見落とそうとしていたのかもしれない。

ここが夢の世界だったとしても、自然に目が覚めるまでは僕はここに住人なんだ。

……本当に死後の世界だったとしても、単にその目覚めが永遠にこないだけ。そして、目が覚める時は誰にも分からないのだ。
クワ　ゼットの言う通り、どうせ誰にも『デッド・オア・アライヴ』の判定はできないのだろう。

肝心なのは、僕がどう思うかだ。そして、どうしても己が生死を
はつきりさせたいのならば、僕自身が納得できる証明を、自分で
する事だ。

そしてここまで考えて、ようやく僕は元の問いに戻ってきた。
今から自分が、シエワードと共に“仕事”へ行ってしまうって良
いのか？

しかし、もう僕の中ではほとんど結論は固まっていた。
そしてその結論に達した理由は、自分の生死はどうせ分かりつこ
ない、という投げ遣りな気持ちからではない。そして、彼女に借り
があるから、という取って付けたような理由からでもなかった。

「シエワード、今こんな事をいうのもなんだけど、僕にとってこの
世界であなたとウロウロして、バタバタしているのが結構楽しかつ
た。

……そして、あなたの“仕事”の手助けを出来る事ならばしてみ
たいと思った。あなたの役に立ってみたい。

だから、あなたの“仕事”に僕も賭けてみたい。
良いですか？」

そんな言葉を、僕は顔の筋肉を引き締めず、笑ったままでシエワ
ードに告げた。

理由は、多分それだけだった。

だから、さつき一生涯命頭を絞っても出て来なかったんだ。その
探しているものが、余りにも単純すぎて。探していたものが、あま
りにも身近にあって分不相応過ぎるほどに小さくて。

ふっ、そう言ってくれるか。九条涼太。
「おまえにその覚悟が、本当にあると見ていいのだな？」
シエワードは、僕の方をじっと睨んでくる。だけど、その目は僕を責めているようには見えなかった。

「ええ、勿論ですとも。僕は嘘は付きません！
こつちの世界で、僕はあなたに命を預ける事に決めましたから」
その目から逃げずに、はっきりと言った。

「……馬鹿め、大人しく私について来なければ、安穩とした『死後第二の人生』が送れたのに」
そう、僕に笑って言ったシエワードは……心なしか、喜んでくれているように見えた。

「ところでシエワード、後はこの妙な“クレンス・アーム”とやらの使い方をまだ訊いていませんでしたよね？」
さっきまで、他の事を考えるのに夢中ですっかり忘れていた。
でも、今改めてよく見ると面白い事に気づいた。じっと見ているうちに、どうやら腕を入れる空洞らしき部分があることに気づいて、そこに腕を入れてみると、中に干乾びた金属製のフックのようなものがついていて、腕に固定するようになっていたのだ。

そして、恐る恐る腕に付けてみると……パツと見、腕の先から、ゴツゴツの岩石が生えているように見える。何か、えらく露骨な事この上ない装備品だった。

「ふむ、装備方法はそれで合ってるぞ。

その装備、“クレンス・アーム”は武器なんだ。自分の身ぐらいは自分で守れるようになって貰わねば困るからな」

シエワードは、そう言うときちょっと複雑そうな顔つきになる。

「その使い方は、実はそう難しくは無いのだ。

要は、自分の利き腕に装着して、その利き腕をどんなふうに使って闘いたいのかをおまえ自身が“創造”するものだからな。

〔万書館〕で見せてもらったが、おまえはなかなか強い“創造する力”を持っているらしいから、それが一番使い勝手が良いかと思っただ。

……後は、自分で色々試してみてくれ」

そして、語尾に力が入っていた。

「けどな、絶対に要らぬ殺生はするなよ」と。

……シエワードは、武器を僕に渡すかどうかで思い悩んでいたのかもしれない。

僕が、シエワードから自分のみを守る為を武器を受け取って、良からぬ使い方をするのはないかと。

だから、僕の“仕事”への決意を聞いてきたのだろう。

「大丈夫です。僕は、元々殺しは嫌いですから」

シエワードに近づいていって、その頭を無意識にポンと軽く抑えながら答えた。

「こ、こら！ 私を子ども扱いするな！

……じゃあ、出発するぞ。さつさと“ディメンション・カッター”で描かれた円の中に入ってくれ。それで、私が例のチョークでそ

の円を閉じる。

その次の瞬間には、私達は『第三世界』にいるのだ。気を抜くなよ」

シエワードが顔を赤らめながらそう叫んでいるのを聞いて、僕は始めて円が完全に完成していないことに気づいた。

よく見たら、まだ『C』のように完全に閉じ切っていない円だったのだ。

その後、二人揃って“デイメンション・カッター”の円の中に足を踏み入れた。

二人とも、円の中に入ったら無言だった。だけれど今のやり取りで、お互いに多少だけでもすつきりできたのではないだろうか。

少なくとも僕は、ちよつとだけ素直になれた。

隣をそつと見ると、シエワードは背負っているポーチから“デイメンション・カッター”を小さな手で取り出していた。

その後、円を閉じようとシエワードはゆっくりと、だが確実にチヨークで2点間を線で繋げるべく、蒼い軌跡を伸ばしていく。

そして、ついに2点間を蒼が貫いたと同時に……チヨークで描かれた円の内側が、煌々と輝き出した。

僕が周りを見て戸惑っていると、彼女が僕に手を差し出してきてくれた。僕は迷わなかった。その手をぐつと握り返して、ボソツと呟いてしまった。

「ありがとう、シエワード」

「これからは、相棒としてよろしくお願いする。九条涼太。

……だが、おまえの能力が無いと分かり次第解雇するからな！」
相変わらぬの手厳しい事を返しながらも、彼女は僕の方を見て微笑んでくれた。

-
-
-
-

誰も居なくなつた「ホーム」で、クワ、ゼットが姿を現した。

『これで、私の使命は完全に終わったかのう。』

……後は任せた。九条涼太、我が娘を頼む。

だが、またいつか何処かで会えるといいのう。おまえさん達二人には『

そうボソつと言う彼は、涙目だった。

そして、足音一つ立てずにそこから去っていった……

そう、この時に僕はまだ気づいていなかったのだ。ポケットの中に感じていた刺々しい感触が、消えていた事に。

第30話：出発（後）「初仕事編・六」（後書き）

ここまで読んでくれた読者の方々には、頭を下げてお礼を言いたいです。

更新は不定期だし、内容はこんなだし、……

でも、僕は書いていて楽しかったです。本当に、ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。

第2部 第31話：『第三世界』アラカルト（前書き）

輪廻転生。

それはご存知の通り、人間は死後に再び“転生”する、という考え方である。

私は、いつでもボーっとしている人間なのだが、とある時にふと思ったのだ。もしその“転生”すべき対象である『世界』が一つではなかったとしたら……？

それが、この物語を書きたくなった動機の一つである。

そして今、第2部の幕が開く。

第2部から読み始めた方々のために、毎回少しずつ後書きで用語、人物紹介等をしていきます。

第2部 第31話：『第三世界』アラカルト

「おい、よそ見るなよ」

そうシエワードに言われてハツとした。

それまで、僕はその場に立ち尽くしてしまっていたようだ。

そこは、まさしく『第三の世界』というに相応しい場所だった。

周り一面、灰色。そしてその果てが見渡せない程、四方八方に平坦な灰一色だけが広がっている。天井から地面まで、全てが灰色。

その影響だろうが、その狭間に存在するであろう空気すらも、とても薄いのだが灰色っぽく感じる。とにかく全てが気持ち悪いぐらいに灰色だった。

だが、一様に全てが同じ色だと言う訳ではない。白と黒が混ざり合って、所々白の方が強い所、黒の方が強い所があり、全体で見ると灰色ベースのマーブル模様のようになっている。そしてその灰色は濃淡も激しく、ほとんど透明に近い所から、見るからに粘度の高そうな所まであった。

僕達がワープしてきた所には、何にも無かった。

ここから見渡せる限り、ひたすらに少しずつ色を変える灰色が続いているだけ。障害物など何も無い。ただ、文字通り地平線まで灰色が続いている。きつと、十歩ぐらい歩けば自分がどの地点にワープして来たのかなんて分からなくなるだろう。

さらに頑張つて、もっと遠くの方まで、ぼんやりと灰色に包まれて見えなくなっている所までは、見える限りで目を凝らしてみる。

すると、その灰色のマーブル模様の中に幾つか、2、3個なのだが奇妙な闇の穴があった。大きさにはばらつきがあるが、どれも近

くに近づけば、おそらく僕とシェワードぐらいだったら軽く飲み込めてしまうサイズだろうと予測できる、ブラックホールのようなそれ。

そしてその穴々は、遠からず近からずの間隔をおいてポツポツと浮かんでいる。

そして、不気味というか面白いというか、その穴の奥には、うっすらとモノクロな景色が映っているかのように僕の目には見える。もしかして、それらの穴一つ一つがどこかの風景の中に繋がっているのではないか？

この世界は、確かに“第三の世界”だった。

『表世界』、『裏世界』の二つの世界とは全く違った、印象を受けるこの世界。

そしてこの世界はこれまでに訪れた『表世界』や『裏世界』と比べると、覚える違和感も段違いだった。

「この『第三世界』は、列車で例えれば、『表世界』と『裏世界』という車両を連結する連結部分だと理解しておけば一番手っ取り早い。

だが『第三世界』については、実はまだまだ分かっていない事の方が多いいんだ。

ま、未開の世界だからこそ、おまえみたいな奴に武器を持たせなければならぬのだがな。

……まあ、とにかく“仕事”だ。やる事は順次話すから、聞き逃すなよ。

では、行くぞ！」

シェワードもそれなりに緊張しているらしい。説明をしてくれて

いる声がいつもより少々弱気な感じがした。

「だけど、姿にはそんな事は微塵も見せない。そんな彼女を見て、僕も気持ち奮い立たせる。」

その後、彼女は僕の方を向いて、

「私に遅れず付いて来るように」

とポツリと呟くように残した後…… シェワードは、さっと進行方向と思しき方向へと身を反転させてから、履いている薄橙色のスケート靴で、灰色の地面を蹴ってゆっくりと走り出した。

それを見て、僕はすぐに目を閉じた。

そして目をかつと見開き、自分の心の奥からこの『第三世界』へと来た覚悟を、そのそして熱い気持ちを徐々に引き出す。

その熱いものを今度は集中力に変えて、それをシェワードから渡してもらった、澄んだ深緑色のスケート靴と、それに接する灰一色の地面へとスツツと浸透させていく。そして、スケートリングのようなものを頭の中で想像し……

思いつきり左足を後ろへと蹴った。

すると…… 軸足の右足が、スツと何の抵抗も無く、自然と前へ運ばれていった。

自慢ではないが、僕は「万書館」で散々“創造”する練習は積んだのだ。だから、その辺りのちょっとしたコツは分かっていた。

イメージを注ぐ対象となる的を定め、その的がゆらゆらとブレるのを自らの心の震えに同調させて、その勢いで的へと自分の思いを持って体当たりする。これをなるべく滑らかに、コンパクトにできるように心がけるのだ。

一回滑り出せれば、後はしめたものだ。リズミカルに左右の足で地面を蹴り、徐々にスピードを付けていく。そして、僕が追いつくのを待つようにゆったりと滑っているシエワードに追い付いて、彼女の隣に並んで滑る。

すると、シエワードは一瞬こちらをちらりと見、僕が付いてきたのを確認するとにやりと微笑んで、

「スケートは少しはできるみたいだな。では、私も少しスピードを上げる事にする。このままでは、時間がいくらあっても足りないのでな。」

……すっかりイメージするのだ。そして、絶対に『コケる』とだけは思うな。その通りになってしまいかもしれない。その代わり、自分は絶対にコケないと思いつめ。そうすれば、決してコケる事は無いから」

と僕の方へ残すと、……一気にスピードを上げ始めた。

なぬ……！

彼女のそれからのスピードは、凄まじかった。

彼女は、ひたすらにただっ広い灰一色のこの世界を一直線に突き進んでいく。悩むような仕草など、一切見せる事無く。

ただ何の目印も無いこの世界の中を、身軽な身体を左右へとうまく捌き、どんどんと加速していく。

そしてそれにしたがって、後ろから見ていると彼女の黒いマントの羽ばたき加減が激しく、早くなっていくのだった。

やはり、シエワードは只者ではなかった……

でも、僕は彼女に対する尊敬の念を想う一方で、その片方では妙な対抗心に火を付けていた。僕のダメな所だ。負けず嫌いには自信がある。『表世界』では、あなたの取り柄はなんですか、と問われ

た時、良くも悪くも脳裏に一番に浮かぶものがそれ、負けず嫌いだ
った。

そしてシェワードに刺激されて、僕も気持ち良いぐらいにスピー
ドを順調に上げていった。

ただっ広い、ただの灰色の空間は、滑っていくととてつもなく広
い事が実感できた。

シェワードは、スピードを少しずつ上げながら、僕の方に振り返
って言った。

「これから、目的の場所へと向かう。あ、正確に言うとその場所に
繋がっている、穴を探すのだが。

その穴は、その奥が「万書館」の店主の言っていた内容から考え
て、『絵』『息子』というキーワード、もしくはそれに近いものか
ら“創造”されている。だから、それに近い風景が見えている穴を
探しに行くのだ。そして、その穴は若干光を帯びているだろう。

まあ、絶対にほぼ確実にはないだろうが、もし私が万が一、億が一
でも見過ごしたら困るから、おまえも一応は気を付けて周りを見て
おけ」

第2部 第31話：『第三世界』アラカルト（後書き）

長い第1部でした。そして、これからいよいよ第2部に入っていきます。

異世界『ファンタジー』はここからです。そして、話の進行スピードはこれまで通りに進んでいきます。

ご一読、ありがとうございました。

【用語】

『表世界』……生前の世界の事。実体の伴った世界。

『裏世界』……死後の世界の事。実体の無い、ほとんど“創造”だけでできている世界。

『第三世界』……シエワード曰く、『表世界』と『裏世界』の狭間にある世界。とても不安定な世界で、多くの事は分かっていない。だが、不安定であるが故に危険な世界でもある。その反面、“創造”するだけで何かができたりと底知れない世界。

【人物】

九条涼太……主人公。男性。自分がまだ死んでいるとは認め切っていない。

とにかく負けず嫌い。そして意地っ張りで、些細な事で考え込んでしまったりする。『表世界』での自分を悔いている節がある。『表世界』では高校3年生だった。

シエワード……『裏世界』でずっと長い間暮らしてきた“存在”。今は仮の姿を持っていて、その姿は『表世界』風に言えば華奢な中学生の女の子。“空奏師”として願いごとを叶える“力”を持つ。誰かと接するのは下手で、口は悪いが、実はかなり良い子。

第32話：スケート・チェイス「初仕事編・八」（前書き）

意地。張ってしまうのに苦勞はしない。だが、剥がすのにはとても苦勞するそれ。

でも、多くの場合において意地は張らないに越した事は無い。そう誰もが根では思っているだろう。だが、気が付けば自分は何かに角張っている。

なにも、それを100%悪いという訳ではない。だが、悪い場合、不都合な場合が多いのだ……

第32話：スケート・チェイス「初仕事編・八」

僕達二人はどんどんとスピードを上げ、風を切って目的地を目指していた。

『絵』『息子』か……一体、僕達が探している目的地なるものはどんな場所なのだろう？

そう思いながらもスピードをさらに加速。そうして、肩で風を切る心地良さに酔いしれていた。

僕は、スケート移動がかなり気に入った。

滑っていると、正面から風が身体に当たって、それが何とも言えなく僕に勢いを与えてくれる。それに、スピードを自分の好き気ままにぐんぐんと上げていく事ができるのも気分が良かった。だって、何にもぶつかる心配が無いのだから。周りの風景が灰一色、というのが唯一の難点といえば難点だが、それは仕方ない。

さらに忘れてはいけない事がある。

それは、『絶対にコケない』と自分でしっかりと“創造”さえしていれば、転倒の危険性を考えなくても良いという事だ。だからこそ、僕が怖れずにアクセルを踏み続けていられるのだから。

シェワードがスピードをちょっと上げれば、僕もそれに負けじと加速する。

そのやり取りは、お互いが一步も譲らずにしばらく続いた。

だけど……そのスケートチェイスにも、転換点が訪れようとしていた。

僕が、自らの身体の異変に気づいてしまったのだ。

ふと気が付いた時、自分の手足がカタカタと震え始めている事に。その震えを止めようと、いくら自分の手首をもつ片方の震えた手で掴んでも、それが止まらなかつたという事実すらも。

これ以上飛ばすと怖い。無理なんだ。

そう僕の身体が無意識に訴え出していたのだ。そしてそれを感じた途端、スピードを上げていく事を足がはつきり嫌がるようになってきた。

この辺りで、シエワードにスピードを落とそうと提案しに行ったほうが良さそうだ。

そう思い、ちょっと頑張ってシエワードに追いついてその顔色を見てみると……

彼女は、快適そうに笑っていたのだ。

「おまえ、なかなかやるな。ほんの少し、ちょびつとだけ見直してしまっただぞ。」

……だがな、私は決してこの程度ではないぞ！」

シエワードは、実に楽しそうに笑っていた。顔全体で、まるで少女が遊びまわっている時に見せるような笑顔を余す所無く表現している。

僕は、桁違いな相手にタイムマン勝負を挑んでしまったようだ。

僕はもう、今の速度を維持するのが精一杯という状態に近くなってきた。それに比べ、彼女はまず怖がってさえないのだ。それどころか、もっとスピードを上げていかないと興が冷める、とでも言わんばかりの口調で、僕を挑発している節すら感じる。

やはりシエワードをなめてかかるとんでもない目に遭うな。そう苦笑いを試してみる。

けれど、ここが僕の救い難い所なのだろう。まるつきり現金なもので、シェワードに少し見直されたと知った途端、先程のドロップアウトしようと考えていたのが吹き飛んでしまった。

僕はとんでもない馬鹿野郎だった。

「まだまだ、僕もこの程度ではないですよ」

そう、澄ました顔で彼女に悠々と云つてのけてしまったのだ。

自らの立て籠もっている居城はもう既に二の丸までが落ち、本丸がそろそろ炎上しようとしている今。この状況で僕が取った行動はまだ無傷でかつ、底が知れない数の軍勢に城門から打って出る事だった。

僕がかろうじて通常の心理状態を保っていたのは、それから僅かばかりの間だけだった。だけど、僕はあんな事を平然と言つてのけてしまったのだ。当然、速度は加速はされども、減速される事は無かった。

だが、僕には『前言を撤回させてくれ』と言い出す決断ができなかった。どうせコケないのだから、というのが心の底にあるものだから、まだ自分は何とかなると思っていたのだ。

かなり昔に、一般的な電車レベルのスピードは当たり前のよう過ぎていた。

今や、恐る恐る気が付いてみると……もうどれくらいなのか自分では見当もつかないぐらいのスピードになっていた。新幹線のスピードだって目じゃないのではないだろうか！

自分の周りの灰色が、ちょっと前には少しぐらいは線状に流れていく景色だったのが、今では見えている範囲の全ての灰が一直線に自分の後ろめがけて跳び下がっていくだけになってしまっていた。

シェワードが言うように、この世界では障害物も何も無い。そして、自分が『もっと加速しよう』と“創造”したら、その通りに自

然と加速はできるはずなのだ。けれど、物理的にはできても、僕の精神的にはかなり無理があった。

当たり前前の事だが、僕だってここが死後の世界だろうが第三の世界だろうが、怖いものは怖いのだ。

たとえ一回死んでいたとしても、そして死んでいなかったとしても、死ぬという事は怖いのだ！

逆に、その死んでいるのかどうかをさせていない、という僕の今の心境がともむず痒かった。どちらかはつきりしてくれよ、と。そう今になって喚きたくなるのも変な話なのだが。

その後も、彼女はまだまだスピードを上げ続けた。

今や僕達のスピードは、これぐらいのレベルの速さだ、と実感できる類のものではなくなっていた。ただ単に、一番最近のある瞬間から比べて今の速度は速いであろう、というのが感覚的に伝わってくるだけなのだ。そして、それに放されまいと自分も速度を上げているんだ、という事を自覚するたび、心臓から毛が一本一本抜け落ちていくような恐怖が襲ってくる。

それでも、僕は懸命にシエワードにしがみ付いていこうと頑張る。

僕は、負けず嫌いとしつこい悪さには定評があるんだぞ！

そうやって、自分を鼓舞する。それで何とかやり過ごそうとしたが、進んで行くにつれ、だんだんと僕の中で恐怖心が抑えきれなくなってきた。そして、その後について吐き気や眩暈が一分の隙無く僕を苛めてくるのだ。

僕は、『表世界』でスケートは小学校の5、6年生ぐらいの時にスケート場に家族と時々行っていたから、ある程度はスケート靴の扱い等にかけては慣れているつもりだった。だが、こんなスピードのスケート、当然やったどころかどこでさえも見た事すら無い。

だが、僕が“こんなスピードのスケート、やったところか見た事すら到底無い”と思った瞬間だった。これまで、シェワードが言っていたように、

『僕は絶対にコケない』と思い込むことに必死に専念していたのが、その瞬間にふっと気持ちが悪く緩んでしまったのだ。

それは、大事に抱えていたものが、腕の中から零れ落ちるのと同じだった。

……すると、だんだんコケそうな気分、というか霧困気のようなものが僕の周りに濃厚に渦巻き出し、僕を幾重にも取り囲んでいるような気に急になってきた。僕は分かっている。それが幻覚であり、錯覚なのだと。だけど、一度緩んだ糸は、そう簡単には元には戻らない。

そして……しばらくすると、足が悪魔にでも掴まれているかのように、右足の踵の辺りから先が動かなくなってしまったのだ。

シェワードにとってみれば、これまた意外だった。

あのひ弱そうな感じのあいつが、少し遅めだとはいえ私のスピードに付いて来れている、だと？

九条涼太、これはもしかして本当にじいじの見込むだけのものがあるのかもしれない……

確かに、この世界は『第三世界』。この世界は、とにかく“創造”命！の世界なのだ。

だから、ぶつちやけたところ極論を言っただけ、

あいつ、九条涼太が『私は絶対にコケない』、『私はどこまでも、たとえ光の速度でもスケート靴で滑走する事ができる』と100%完璧に自らを“創造”する事ができるとすれば、この世界では素

足で光速に移動する事さえも造作ないのだ。

だが、私は断言する事ができる。そんな人間はほぼゼロなはずだ。それに、現にかなりあいつの顔色はかなり悪くなっていた。まあ、まだ私にスピードを緩めようと言い出さないのは見上げた根性だ。そこそこ骨のある奴だとは思っただが。

私は、素直に感心していた。

だが……

そう思っていた時、ふと奴へと視線を向けようと背後を見た時だった。

あいつが、九条涼太が急にバランスを崩していたのだ。

第32話：スケート・チェイス「初仕事編・八」（後書き）

まったりペースで進む異世界ファンタジーを読んでくださり、本当に感謝しています。

ちゃんと予定通り更新できてホッとしています。それと、自分で読み直してみても第一部がかなり直し甲斐がありそうなので、そちらも直していききたいです。

【用語】

“空奏師”……願いごとを叶える“力”があると『裏世界』で言い伝えられている者たちを指す。だが、どんな願いごとをどうやって叶えるのか、等は全く知られていない。通常、“パートナー”を一人助手として持っているらしい。

「黒の書」……『裏世界』についてこれまでに知られている事の全てが書いてあると言われている貴重な本。

第33話：生死を分ける“創造”世界「初仕事編・九」（前書き）

人生は深い。それは誰もが一度は思う事ではないだろうか。けど、当然人によって感じている深さは一様ではないのだろう。

「人生の目的なんて、見つけれないならば考えない方が気軽に良い」

そう思う事は多々あるのに、その反面、

「そんなの意味が無い」というのを良く愚痴にして零す。それは誰の何にとって意味の無いものなのか。……やっぱり、人生は深い。

第33話：生死を分ける“創造”世界「初仕事編・九」

私は瞬間的に感じ取る事ができた。本能的に、何とかしなければ
まずい事を。

ここであいつが転んで、そして転び際に『死ぬかもしれない』な
どと最悪な“創造”をダメ出ししてしまったとしたら……

まずい。

この世界で“創造”した事は100%そうなるという訳ではない。
だが、かなり高い確率でそうなってしまう方向へと事態が動く事は
確実なのだ。

それで、咄嗟に叫んだ。内容が出鱈目なのか何なのかは分からな
い。とりあえず、大声で叫んでいた。

『おまえは私の大事な“パートナー”なんだ！ 私が絶対に守って
いるから、コケるなんて事は有り得ない！

私の“力”で強制的にコケられないようになってるんだ！ 私
の“力”は伊達ではないぞ〜！』

そして、その後に無意識に自分の呟き声が続く。

「こんな所で、私を一人だけにしていくなんて決して許さないぞ。

もう、……寂しいなんて嫌だ」

右足の踵から先が動かない。だが、スピードはほとんど落ちない。
そうになると、僕はこれから先の展開が頭に読めてしまう気がして、
ますます動揺していく。足のつま先から震えが回ってくると、気が

付けば膝はもうバランスをとる機能を失っていた。慌てれば慌てるほど、事態は泥沼へ嵌り込んでいく。
もうダメだ。持たない。

『う、うわあ〜!』

そう感じてしまった時、叫び声を堪える事なんてもうできなくなっていた。

自分のその叫び声が頭の中を駆けずり回った時……

脳内に、『表世界』で数日に1日ぐらいの頻度でテレビニュースに流れてくる、交通事故後の現場映像が鮮烈にくつきりと映ってしまった。そしてそれに自分のこれからの展開が重なって…… 桁違いの恐怖で、何も考えられなくなっていく。

そして、心臓からの鼓動だけがバクバクと無駄に激しくなって……

ぐらりと大きく重心が揺れた。残った理性をフル稼働して、気力を振り絞って重心を引き戻そうとする。

だが、自らの全体重をこの精神状態では支えきる事などできる筈も無く…… 最後の決死の抵抗も功を奏さず、動きの利かない右側へとスケート靴は徐々に倒れ込んでいく……

その時だった。

『おまえは大事な“パートナー”なんだ! 私が絶対に守っているんだから、コケるなんて事は有り得ない!

私の“力”で強制的にコケられないようになってるんだ! 私の“力”は伊達ではないぞ〜!』

シェワードの方から、とてつもなく大音量の叫び声が耳に入ってきた。

しかし、僕の頭の中はパニックに次ぐパニックで、それに対して何もできない。そしてそのまま、目をぎゅっと閉じる事しかできなくなつた時……

不思議な事に、倒れる寸前の傾いたスケート靴が自分からすつくりと地面に対して垂直に戻つたのだ。

そして、僕が半ば茫然自失している内に、スケート靴はスピードを勝手に緩め、灰色の中にピタリと止まつた。

「おい、おまえ大丈夫だったか!？」

……馬鹿! あのスピードでコケたらどうするんだよ!」

僕が、ようやく気を確かに持つことができたのは、その後灰色の地面に尻餅をつき終わって、しばらくしてからだった。灰色は、ひんやりと冷たかつた。

「な、何故僕は無事なのですか……」

腰の抜けきつた声で、シェワードに尋ねる。おそらく、この時の僕の表情は、言葉には表せないほど凍り付いていただろう。

あんなスピードでバランスを崩し、そして持ちこたえられなかつたのだ。……有り得ない。

すると、シェワードの方からこほん小さな咳払いが聞こえ、彼女がやや詰まり気味にそのからくりを説明してくれた。

「おまえは運が良かったんだ。まあ、この『第三世界』独特の現象、なんだけどな。

運命の分かれ道は、おまえがあの状況で私から『私の“力”で強制的にコケられないようになって』と聞いた時だっただろう。

おまえの頭の中では、

これから自分が倒れて大怪我、もしくは死亡につながるような致命傷を負うのか、

それとも私の“力”によって自分が倒れられないようになっていくのか、

という二つの選択肢のうち、どちらがより“創造”しやすいのかの葛藤が起こった。

それは情など一切入る余地の無い非情なものだっただろう。当然、前者が選ばれる可能性もあった。

だが、おまえの頭は幸運にも私の叫び声の方、すなわち『私の“力”で強制的にコケられないようになっていく』方を“創造”する事ができた。

だから、当然スケート靴はコケる事などその瞬間以後はほぼ有り得ない。そして、おまえさんがフラフラになって『スケート靴で滑る』という“創造”が途切れたから、スケート靴はそのまま止まったんだ。

ま、ちょっと難しいだろうが、こんな事もこの『第三世界』では起こる、という事だ」

それを聞くと、急に僕は生きた心地がしなくなった。

もしあの時にシエワードが叫んでくれていなかったら。

そして、僕が無意識に自分の死を“創造”してしまったとしたら。そうすれば、ほぼ確実に自分の考えていた最悪のシナリオに限りなく近い状況に追い詰められていた、という事なのだから。

「シエワード、あなたにはお礼を何度言っても……」

涙の出そうな声で、僕はお礼を言いたくて彼女に近づいた。

「……ただ。僕が感謝の気持ちを思ったままに表現しようとしたら、シエワードはそれを、

「いや、そんな事は良いんだ。もとは、私の不注意だ。

おまえにはまだ私の“パートナー”としての“力”すらも授けられていない状態なのに、私が無茶な事を言ってしまったんだ。私が悪かった」

とさつとかわし、ぺこりと頭を下げってしまった。

「……そこまでシエワードがかしこまってしまうと、僕が逆に戸惑った。」

それで、お互い次の言葉が継ぎにくくなってしまい、しばらくその場で黙り込んでしまった。

僕は、こういうのは苦手なんだ。

こういう時に相手に何を言ったら良いのかなんて、皆目見当もつかなかった。

けれど、何にも喋り出さなかったら先には進まない。なので、兎にも角にも気になった事を聞いてみる事にした。

「……シエワード、そんなに謝られても僕が困ってしまいますよ。

感謝すべきなのは僕の方なんですから。

ところで、あの時とつさにあなたが叫んでくれた、あなたが僕を守ってくれている、というのは本当なんですか？」

すると、シエワードはしばらく僕の質問の意図を得ない、といった感じのぼかんとした顔をしていたが、徐々に頬の辺りが真紅に染まってきて……

私の願いごと

「そう思いたければ…… 思うのは自由だ」
と、優しい少女らしい口調になって、頭を傾けながらに答えてくれたのだった。

第33話：生死を分ける“創造”世界「初仕事編・九」（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

予定としては、この初仕事編は第40話近くまで続きそうです。

《主人公（九条涼太）とシエワードの装備「第三世界編」》

・主人公……多機能そうな腕時計、焦げ茶色のスケート靴、ポケットのたくさんある群青色のベスト、“クレンス・アーム”（武器）、等々。その他は普段着。

・シエワード……（主人公と同じ）腕時計、薄橙色のスケート靴、小さい橙色のポーチ、仕事用の黒いマント、（武器）、等々。その他は普段着。

第34話：相変わらずな二人「初仕事編・十」（前書き）

今日は何をしようか？

そうは言っても、おそらく僕が今日やる事は、昨日やったこと、昨日やった事と大差は無いだろう。

それが、普段通りな相変わらずの日常。

普段通り過ごしていて、幸せならばそれで良い……

第34話：相変わらずな二人「初仕事編・十」

場の空気がちょっとほんわかとした感じになって、どうにもいつもと調子が違っている事にやりずらさを感じてしまっていた。

だけどそんな事は、もう過去の話。そしてそれは僕の贅沢だった。今、実感としてそう思う。

「けどな…… おまえ、筋金入りの馬鹿だろう？」

自分の限界よりも無茶して飛ばそうとするから、そもそもこういう事になるんだ。

何が、『まだまだ、僕もこの程度ではないですよ』だ。どこか『この程度』ではないのか、私にはつきり説明してもらいたいものだ！『これ以上飛ばさないで』と私に向かって一言言うだけで、今の危険は避けられたものだろう？ ん、違うか、このたわけが！

そんな事で、本当に私の“パートナー”代理が務まると思うのか！ ちょっとは頭を使えよ、頭を！

まったく、近頃の人間はこれだから困る。どうしてそうちょっと先の展開すらも考えずに進もうとするのか！

ちよつとはこれからの展望を見通してから、それに見合う最善の選択肢を考えようとしはないのか！

これだから……」

和やかなシエワードがずっと続く訳も無い。これまでの少しながらの経験で、そうは分かっていた。

そして、彼女が僕に怒鳴りながら説教している内容にも一理あるとは思う。そして、僕が悪かったとも思う。

だけど、彼女の話し方、特に怒られている時なんかはやっぱり少し頭に来るんだよね……

先程まではえらく慎ましやかに僕に謝ってばかりだったのに、し

ばらくしたらこの豹変ぶり。何か、やり切れないものを感じる。

そんな事を考えながら、僕はようやく気分が落ち着いてきていた。さっきの出来事は、僕にとってあまりにも衝撃的だった。

この世界は、本当にそういう事が起こる世界だったのだ。それが骨の髄まで染み渡った。

そして、頭を使って行動する事が時には命を救ったりする、という事も。

彼女には、本当に感謝している。だって、彼女は今はガミガミと怒っているけれども、僕がこの世界で今生きているのは彼女のおかげなのだから。

「でも、本当にさっきはありがとうございました」

シェワードが怒っている合間を見計らって、ようやくお礼を言うことができた。

実は、今回のこの件で僕には分かっている事が一つある。まあ、シェワードには言わないけれど。

それは彼女の言った、『私の“力”で強制的にコケられないようになっている』というのはほぼ確実に嘘だろうと言う事だ。

それがもしも本当なら、シェワードだってあんなに深刻そうに僕に向かって謝りはしなかつただろう。どうせコケ得ないのだから。それに、そもそもスケート靴で移動し始める前にあらかじめ僕にそう言ってくれていれば良かったはずだ。

では何故シェワードが僕にそんな嘘を付いたのか、考えてみる。

先程の話からすると、僕が錯乱状態に陥っていた時、僕は無意識に、自分が思う通りのシナリオで『死ぬ』のか、『シエワードの“力”によって救われる』のか、のどちらかを“創造”するか葛藤していたらしい。これが運命の分かれ道だったと言う。

という事は、だ。当然僕がシエワードの“力”をどれくらいはつきりと“創造”できるかによって、僕が後者を“創造”し易くなる確率がかなり変わってくるに違いなかったのではないだろうか……

『シエワードの“力”でとりあえず救われる』と言う事だけでは、“創造”するには、あまりにも具体性に欠けるからだ。

だから僕が救われるために、彼女はあの場で、とにかく僕がシエワードの“力”によって『救われる』状況を僕がイメージしやすい台詞を叫ぶ必要があったのではないだろうか……？

そして、僕が出した結論はこうだ。

僕は、シエワードの“力”の明確なイメージをほとんど持っていない。

この事を彼女は重々分かっている、僕にそんな嘘を付いたのではないのだろうか、と……

そんな事を考えながら、僕はシエワードのお怒りの言葉をやり過ぎたのだった。

「お、おほん！」

またまた、僕の悪癖の一つ、いつの間にか周りを見ずに考え込んでしまう癖が出ていたようで、シエワードが不機嫌そうに目の前にずいと顔を近づけていた。

気が付けば、シエワードの説教の時間はもう終わっていたらしい。

「まあ、とりあえず出発するぞ。

……それから、おまえ、これを「ホーム」に忘れていったらどう
？」

そうやって、なんとシエワードは『黒の書』を持っていた。

学校に忘れ物を苦笑しながら持ってきた母親のような顔になって。

あ！ そうだ…… せっかくシエワードに渡してもらった『黒の
書』、忘れていた……

「おまえが筋金入りの馬鹿だという事もはっきりと分かった訳だ。
なので、『表世界』の…… えっと、二宮金太郎でも見習ってもら
う事にした。

私のスピードには遠く及ばないおまえだが、一応スケートは慣れ
ているみたいだし、気が向いたらスケートしながらでも良い。暇な
時に読め。時は金なり、だぞ。

それに、これまでかなりの距離を進んだが、亡霊の気配すらない。
どうやら今は運良く安全な時らしいからな」

そう言うと、シエワードは顔をしゃきっとさせて、少し微笑んで
僕に手を差し出してくれた。

そういえば、僕はまだスケート靴でコケてから尻餅をついたまま
だった。我ながら、どこか抜けていると思う自分……

まあ、良いか。

シエワードの差し出してくれた右手を掴みながら、ゆっくりとよ
うやく地面に対して真っ直ぐに立った。

「それに、さっきまでのスピードのお陰で、かなり順調に来ている。

この辺りでは、もうかなり目的地に近づいているはずだ。もうひと息で、目的の場所に着けるだろう。だから、時間はまだ十分にある事だし、スピードは出さない事にした。

おまえは、さっきあと一步で大惨事というものをいきなり味わった訳だし、またスピードを競い合っても仕方ないだろう？

……とにかく、さっき出発した時には言い忘れていたが、おまえは『私の“力”で強制的にコケられないようになって』のだ！
そして、私がしようがなく、おまえのような、不甲斐なさ過ぎる
どうしようもない“パートナー”代理を守ってやっているんだ。

だからこれしきの事でへたれるんじゃないぞ！」

そう、彼女は強く言い切ってくれた。それに、僕はにっこりと笑って返した。

……二宮金太郎、じゃないけどね。

その後、僕達二人は再びスケート移動を始めた。

だけど、さっきと違うのは、走っているスピードが一定しているという事だ。そして、二人並んで進んでいる、という事だ。

灰色の景色が規則的に後ろへと流れていく。そして、僕はシェワードの話聞いていた。

「まあ、これから色々ある。

それを一つ一つ経験していくと、おまえも“パートナー”らしくなっていくだろうさ」

シェワードが感慨深そうに、まるでこの世を悟り切ったような老獯な占い師のようなことを言う。

「そうだと良いですけどね。でも、僕頑張りますよ。負けず嫌いとし俵嫌いの往生際の悪さにかけては自信がありますから」

……人生の大先輩のようなシェワードの言葉が、少し染みたまるつきり、凄腕占い師に師事する若い弟子のような感じになっている僕。

そういえば、これまでに僕とシェワードでこんな感じの会話をした事が無かったよな。

「それがダメなんだぞ！

負けず嫌いも結構だが、実力の伴っていない意地比べは見苦しい。頑張ってくれるのは悪い気はしないがな」

「はは…… 手厳しいです」

それからも、しばらくは穏やかな感じの談話が続いた。

「それで……言にくい事だが、もうそろそろ目的地に着く頃だ。だから、いい加減この辺りで一つ言っておかなければいけない事があつたんだつた」
シェワードがその談話の中で、いきなり声に錘を乗せて切り出したのはそんな内容だった。

「え、何ですか？」

僕はそれをあまり意識せず、談話の一部として聞こうとした。

「それがな…… 私が、こんなに急がなければならぬには、実はれっきとした理由がある、という話なんだ」

ん？ 何か、またびっくりな事をシエワードは言おうとしているのか……？

灰色は、何処まで行けども灰色。そして、それは白っぽくなったり、黒っぽくなったりを繰り返してはいるけれど、根本的なところは何も変わらない。僕の双眼には、その全体像がどうなっているのかなんて見渡す事はできそうに無い。ただ、これから先もずっとそれだけなのだろうと思うのが精一杯だ。だが、その全体像を何処まで、僕の隣にいる小さな“空奏師”は知っているのだろうか……？

第34話：相変わらずな二人「初仕事編・十」（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

↳ 『裏世界』見物（その1）↳

・「ホーム」……シエワードが、主人公と会うまでに長い間過ごしてきた空間。元は真つ暗でがらんとした場所だったが、その後、リフォームしてすっかり“仕事”の事務所らしくなった。

【人物】

・クワ ゼット……口調からすると、かなりの老人。

シエワードからは『じいじ』と親しみを込めて呼ばれている。実は、シエワードの父親らしい。（シエワードは知らないが）

どうやらその過去には何か色々ありそうで……

第35話：注意事項云々「初仕事編・十一」（前書き）

『第三世界』。それは、どうにも捉えどころの無い世界。漠然とした中に、広大なスケールを持っている。

この世界はそうは甘くない……

さてさて、面白くなってきた……

クライマックスが迫ってくると、書いている本人が一番ワクワクする。まあ、そんな単純な私。

第35話：注意事項云々「初仕事編・十一」

シエワードはこれから何を言い出すのだろうか？

興味深いな、というぐらいに聞き耳を立てていると……

「単刀直入に言う。私達が安全にこの世界に存在できるのは、『表世界』の時間で換算すると、せいぜい72時間程度なんだ」

シエワードが、思い切りの良い口調で僕に告げた。

爆弾発言に危つくまたコケそうになるところだった。そんな事、初耳じゃないか！

「……もう、そういう事は僕にもちゃんと教えてくださいよ。僕だって、あなたに命を預けている訳ですから」

僕は、不満そうな声でシエワードの方をやや責める調子の目で見ると。まあシエワードの事だし、何らかの考えがあつての事なのかもしれない。だから、そんなに声に不満を含ませずに言った。……少なくとも、そのつもりだった。

「ぐっ…… そんな目で私を見るな！ おまえはいわば私の助手なんだぞ！

確かにそれは正論だが…… わ、私としては、自分の中ではそんな事は常識だったからすっかり忘れていたのだ。仕方ないだろうが」

すると、またまた意外な事にこれは彼女には結構効いたらしい。ばつの悪そうな顔をして、僕から顔をプイと背けてしまった。

まだまだ、シエワードについては分からないな。そう思うと、自分の顔の筋肉が自然と緩み、勝手に笑い顔になってしまう。

……まあ、ここはこれ以上シエワードを責めない方向で行く事にした。過ぎてしまった事は仕方ないし。

だけど、その話には大きな疑問がある。

「……いや、僕はそんな事では本気で怒りませんよ。

それより、この『第三世界』には共通の“時間”があるんですか？」

そう、『裏世界』には共通の“時間”なるものは無かったのだ。

それなのに、それよりも良く分かっている、かつ不安定な世界である『第三世界』に共通の“時間”があるなんて事は分かっているのか。

シエワードは、僕が本気で怒っている訳ではないと知ったからだろうか？ こちらの様子を素早く見た後、ちよつと安心したように見える。

そしてその僕の質問に対して、それを予想していたような涼しい顔で僕にさらつと答えた。

「『裏世界』と同じように、この世界にも共通な“時間”という概念が通用しないのは分かっている。

そのために、おまえにわざわざ出発前に腕時計を渡したんじゃないか」

そう言われ、反射的にシエワードから受け取った時計に視線を走らせる。そして、初めてその時計を意識的に観察し始めた。

すると、よく見たらこの時計は僕のもともと腕に付けていた腕時計と違い、ちゃんとアナログの針が時を刻んでいたのだ！

改めて、貰ったその時計を良く見てみると、全体的に薄い茶色をした、秀囲気としては少し古ぼけた感じのするそれ。

文字盤を覆っている部分は透明なガラスだろうが、古くて曇りが

ちになっている。それ以外の部分は頑丈な印象を受ける金属製で、腕に付ける部分は革製だろう。特徴としては、なんと言ってもその時計に付いているボタンの多さだ。ねじのように回すタイプ、単に押すタイプの大小のボタンが合計8個もある。

もう一つ大きいのは、文字盤がなんと24時間で1週するようになっている事と、日付が文字盤の一部に空けられた小さな穴から覗いている事だろう。良く見れば、かなり高性能だ。

そして、その時計は現在…… 1月13日。18時半を少し回ったぐらいの時間を指していた。

「ちなみに、『裏世界』と『第三世界』において、その腕時計と全く同じもの同士ならば共通の“時間”を共有する事ができる。

これはかなり便利で、なかなかの逸品だ。でも、うっかりしてはいけないのは、その腕時計を付けていない奴とは時間を共有する事が出来ない、という事だ。あくまでも、その腕時計に示される“時間”は私とおまえ、2人だけの間にだけ通用するものなのだ」

うむ…… 僕は、唸ってしまった。

シエワードがスピードをできるだけ出そうとしていたのは、単に僕と意地の張り合いをしていたというだけではなかったのか。

そう思うと、自分があまりにも子供っぽくて悲しくなった。自分はまだ何も考えずに意地の張り合いだけで死にかけたという事だ。

そして、シエワードが自分よりも全然大人なのだ。

時計の事なんて、貰った時には全然気にもしていなかった。単にシエワードの良いと思ったものを適当に選んでくれたのか、ぐらいの軽い気持ちでしかここまで捉えて来なかった。

「私達がこの『第三世界』に入ったのは、1月13日の真夜中の0時。私が意図的に合わせたものだ。

つまり、1月の16日の真夜中0時が、タイムリミットだ」

それから、僕がそのシエワードの言葉になるほどと相槌を打つと、それっきり僕達の間のお話はぷつりと途切れてしまった。シエワードの方は、なにやら考え事をしているようだし……

ただただ、灰色の大地が自分の後ろへと去っていく。

先程のシヨックはかなり和らいでいた。でも、シエワードの今の話はまたまたぶつ飛んだ話だった。

僕達がスケートで約18時間も移動していた、というのもおそろしく凄い事なのだが、これもまた『第三世界』の成せる技、という訳だろう。

そしてその衝撃もさることながら、もっと衝撃的だったのは、僕達の残り時間があと約50時間ちよつとだという事だ。

これまで、スケートしていた18時間は決して短い時間では無かった。でも、もうあつという間に過ぎ去ってしまった。

もう僕達は手渡された時間の内、その何分の1かをもう既に移動だけで使ってしまったのだ。まだ、“願いごと”どころの話ではないのに。

時間って短いものだ。そして無情なものだ。

これは『表世界』でも十分に身に染みていた話の筈だった。

私の願いごと

分。これまでにあいつにこの世界での注意事項を言って来なかった自

だけど、確かに考えたらあいつはまだ“パートナー代理”にしかならないんだ。

自分に命を賭けてくれる、とあいつは確かに言った。だから、この世界へとあいつを連れてこようと思えたのだ。

けれども、だからといってあいつの命を私が適当に扱って良いという訳ではないだろうに。

あいつが自分の身の危険ぐらい自分で分らないと、私ではどうしようもできない、という事だっただけからあるかもしれない。

確かに、注意事項ぐらいは伝えておくべきだろう。

そう、素直に少し反省してみる。

そういえば、私の“初仕事”の時と、今のあいつの心境は同じなのかもしれない……

ふと、また微妙な事が頭に浮かんできた。

あの時は、私は一人では無かった気がする。

そして誰かもう一人、凄く頼もしくって心強い凄腕の“空奏師”が私を支えてくれた人がいた気がして。

また、その人は常々口うるさくって、耳にたこができるほど私に注意ばかりしていたりしていたような気がして。

あの時、確か私はその“空奏師”と二人で笑って……

実は、私の記憶は“初仕事”の頃の事はほとんど抜け落ちている。

一番くつきりと覚えているような気がするの、その“空奏師”と二人でいて、心から笑えた事がある、という事ぐらいだ。

……とりあえず、あいつにちょっと注意事項ぐらいは話すか。

ちょっと切ない気持ちになってしまった。だけど、それをさっと振り払い、気持ちを切り替える。これからは、今回の“仕事”で大

事な部分なのだから。

「『第三世界』はこれまでに言ったように、実に不安定な世界なんだ。

だから、あまり長くこの世界に居座りつづけると、自分の“存在する力”自体がだんだんと不安定になっていく。これが、この世界に私たちが留まる事ができる時間には制限がある理由だ。

おまえ、さつきあそこまで嫌味を言ったよな。

だから、仕方ないのでさらっとこの世界での注意事項を一通り言っておいてやる。忘れるなよ。

まず、この世界の“縁”に出くわした時には決して触れてはいけないという事。

それと、おまえはまだ“空奏師”のパートナーとしての正式な力を与えられていないから、私と一緒にないとこの世界の内外との出入りは出来ない、という事だ。以上だ」

シェワードがいきなり口を開いたかと思うと、拗ねているようなめんどくさがっているような声で、僕に素早く話してくれた。

スケート移動にすっかりと慣れて、流れていく灰色の風景を見るのも暇になってきたので、いつそのことシェワードの言っていたようにスケートしながら『黒の書』でも読んでやるうかと思っていたところだった。

そこに彼女がこの世界の注意事項とやらをいきなりささっと話してくれたのだが、さてはて半分も理解できない。

この世界の“縁”って何？ 出入りって、そんな方法がこの灰一

色の空間であるのか？

またまた、スケートしながら自分の中で考えに耽るうかと思っ
ていたところ……

僕達の目の前に、灰色の地平線の向こうから僅かずつ白い光が漏
れ出ている事に気づいた。薄暗いこの空間だからこそ、余計に目立
っている。

あれは一体……？

そう思っていると、シエワードが声を明るくして待ちくたびれて
いたように言った。

「ああ、あそこだあそこだ。ようやく着いたか。

あの光を放っている先が、まず私達の目指していきたく最初の目的
地だ」

僕が好奇心からスピードを上げようとすると、シエワードも僕に
合わせてくれた。

そして、シエワードが誘導してくれる方に進んで行くと、その先
からじわじわと光が広がってくる。

そして、その光の源が灰色の中でその全体像が見えるようになっ
た時……

それは、この空間全体にポツポツと点在している、洞穴のような
ブラックホールのような“穴”のうちの一つだった。だけど、これ
までに数え切れない程に見てきた“穴”と違うのは、あれだけ光っ
ていると

そういえば、シエワードがまず光を発している穴に向かうと言っ
ていたような。

「このあちこちにある“穴”、これは「ラビュト」と呼ばれている。さて、これから先は『黒の書』を立ち読みしながら進むよつな、ゆるゆるな進み方はできないぞ」

そう言うと、シェワードが僕に急接近してきて、『黒の書』をさっと奪って、彼女のポーチの中にしまってくれた。

うむ…… シェワードの方が、僕よりも何十枚上なのだろうか？

僕の右腕に付けた時計は、19時半を指していた。

第35話：注意事項云々「初仕事編・十一」（後書き）

「ご一読、ありがとうございました。」

「『裏世界』見物（その2）」

「裏世界のロビー」……『裏世界』の中を移動するにあたり、必ず通らなければならない中継地点。

「というか、このロビーから『裏世界』へのあらゆる空間へと繋がっている。」

「裏商店街」……『裏世界』にある商店街。『表世界』とはずいぶん違った店が色々軒を連ねている。だけど、人通りはイマイチ『表世界』の商店街と比べると寂しい。雰囲気もちよっと暗い。」

第36話：淡い光のその奥へ 「初仕事編・十二」（前書き）

未知の世界、というのに興味がある人は沢山いる。

だけれど、実際に自分が身体を張ってその中に飛び込める人はその中でどれだけののだろうか？

肝心なのは、それが自殺願望のようなものではない事。

ちゃんと生きて返って来る予定があって、という事だ。

第36話：淡い光のその奥へ 「初仕事編・十二」

この淡い光に包まれた闇の中には、どんなものが広がっているのだろうか？

このブラックホールみたいな「ラビュト」に一歩一歩着実に僕が近づいていくのに対し、“空奏師”シェワードはするすると僕の先を行き、

『早く来いよ』
等と勝手な事を言っている。

だけど、僕はもう軽々しい行動は慎む事に決めた。

スケートで死にかけた事もあって、この『第三世界』には用心深く接する、と心に深く刻み込んだのだから。

僕の中の『第三世界の心得』第一条。

決して初見のものには容易に近づかない事。

第二条。

この世界で、シェワードに張り合ったり少しでも何かで勝とうとしない事。

第三条。

いつ何時でも、直情に任せた行動は慎む事。

……もうさっきのような事はこりこりだ、という事だ。

あの時は偶然何とかなった。

でもまた調子に乗って馬鹿をやったら一体どんな結末が待ち受けているのか分かったものじゃない。

私の願いごと

だが一方で、些細な事に過剰反応しているのも、これまたしょうがないという事は分かっていた。

まあ、彼女が行って飲み込まれなかったんだから大丈夫だろう。

その意を決して一気に近づいていき、僕もついにその「ラビュト」のまん前まで来た。

……僕が追いついても、しばらくの間シェワードは僕に何も話し掛けて来なかった。

てっきり、『さっさと中へ入るぞ』と走っていきそうだったのに。

そのしばらくの間、僕とシェワードはその前で「ラビュト」をじっと見つめていた。

目の前で見てみると、それは淵が金色に輝く黒いワームホールとでも言うのだろうか。

そして、その奥にはシェワードの言っていたような風景が溶け込んでいた。それは、一人の青年がキャンパスを目の前に、パレットを片手に絵を描いている様子だ。でも、その情景は刻々と時を経るにつれて変わる。時には目にはほとんど分からないくらいに微小にまた、少し時が経つと劇的に。

「さて、これで分かっただろう？ この「ラビュト」は決して人などを取って食ったり、中に無理矢理吸い込んだりはしないという事を」

……すっかり見透かされていた。ニヤニヤと笑いながらそう言うシェワード。

「い、いやそんな事は初めから分かっていますよ、はい」

乾いた声で返事を返す僕。それに対して、シェワードがくすくすと笑っているのが少し悔しい。

「さて、この奥は、同時に『第三世界』の奥でもある。

この中に入ったら、本当に未開の地だぞ。
此処から先は、何が出てくるか正直私にも予測できない部分が多々ある。

……もし、やばくなったらおまえだけでも逃げる。私には“空奏師”としての“力”があるが、おまえはまだ丸腰の人間だからな」

シェワードの声は、かなり緊迫したものになっていた。

どうやら、ここからが修羅場らしい。僕も、きちんと気を引き締め直した。

そのまま、二人で「ラビュト」の中へと進んでいった。

「ラビュト」を通り抜けるまさにその瞬間、僕は目は瞑ってしまっていた。

だけど、膜を通り抜けた時に感じたと思われるひんやりとした感覚。新鮮だった。

少し心配だったのが、シェワードが言う『本当にやばくなった時に僕はどうしたら良いのか、という事だったけれど……』

次に僕が目を開けた時……僕は、ちゃんと「ラビュト」の中にいた。

そしてここは、さっきまでのただっ広い灰空間とは似ても似つかない場所だった。

まず、周りは灰色ではなかった。薄暗いのは同じだが、今度は全体的に薄紫っぽい感じに包まれている。ただし、さっきまでの単色っぽい感じとは全然違った。

薄く広がる紫の大地の上に、僅かずつ藍、碧緑、そして薄紅や淡い黄色、等々の色が乗っていて、全体ではふわっとした和やかな雰

困気を醸し出している。それが、すごく綺麗で……

「綺麗だ」

そう、ポツリと思わず口に出してしまったほどだった。

そして、その軽い紫の絨毯のような色たちが天井や左右の壁、足元に敷かれていて、それが狭い通路が見えなくなるほど向こうまで続いている。

要は、向こうへと向かってすらっと一本道になっていた。

「ここは、『裏世界』にいるあの「万書館」の店主の心と、『表世界』にいるその店主の息子の心とが繋がっている場所なんだ」

シエワードが、その周りを穏やかな顔で眺めながらに、僕に話し掛けてくれた。

「実は、『第三世界』全体の面積は無敵大だと言われている。

あの灰色だけの空間が、何処までも地の果てまで続いているらしいんだ。

そして、『第三世界』には様々な「ラビュト」が無敵にある。そしてその穴は、一つ一つが『表世界』と『裏世界』を繋いでいるんだ。

実体の無いあらゆるものが、それを通して『表世界』と『裏世界』を行き来できるようになっている。

これは、私達“空奏師”がこれまでに限りなく長い時間をかけて、経験で分かった事だ」

私の願いごと

僕は、息を吞んでそれに聞き入っていた。

僕の知らない“世界”の捉え方がそこにはあった。

「では、進むぞ。『スケート靴のままでもスムーズに歩ける』と軽く“創造”すれば、靴は履き替えなくて済む。

ここからは、“クレンス・アーム”を自分の思う武器に換えて、構えておけ」

シェワードにそう言われて、とりあえず何かを創ってみよう目を瞑ろうとした時……気が付くと、シェワードは、一人でさっさと奥の方へ進んで行ってしまっていた。

「待って下さいよ!」

そう叫んで、とりあえず彼女の後ろ姿を追いかける。やっぱり、シェワードはよく分からないや。

そうして、僕達は「ラビュト」の中を進み出した。

シェワードが先、僕が後ろでお互いにスケート靴をコツコツ言わせながら進む。僕は、まだどんな武器を“創造”すれば良いのかで焦っているし、シェワードは何やらまた頭を悩ませている様子だ。

そんなこんなで、お互いずっと無言。そして周りは、妖しいほどにひたすら深い紫に包まれている。

それが、例のごとくずっと続いている……

先に耐え切れなくなったのは毎度毎度、僕の方だ。

歩きながらに、己の優柔不断さを理由にシェワードにアドバイスを求めた。

「……あの、武器の扱いとか戦いの心得のない初心者が、扱いやすそうな武器は何だと思えますか?」

こんな事を聞くのはとてもみっともない。だから、できる事なら

聞きたくは無かった。だって、何から何まで全てシエワードに頼っているだけになってしまっから。

だけど、僕には武器と言われてもそれがパツと“創造”できなかったのだ。剣は触った事すら無いし、銃なんて余計に無理だろうし。

それと、相変わらずシエワードは何というか……

一言で言えば、“一言も喋らなくても一生生きて行ける”

ように見えるというか。それを見ると、毎回毎回僕の方が寂しくなって話し掛けてしまっ。僕の寂しがりやも相当なものだ。これが、隠れたもう一つの話し掛けた理由だろう。

僕は、彼女を尊敬するし、支えてあげたいと思う。このままだとこの子が何処かで自分よりも大きなモノに独りで突っ込んでいっってしまうような気がするから。

「そうだなあ…… おまえさんでも、箒ぐらいは使えるだろう？
振り回すだけで良いから。」

私の予感としては、今回はそんなに強い亡霊が出ないような気がする。だから、それくらいで十分かもな」

すると、そんな適当な声だけの答えが返ってきた。

「……そんな武器で、亡霊と戦えるのですか？ 本当に」

箒なんて、考えもしていなかった。そもそも、彼女自身が『亡霊には注意しろ』と言っていたのに、そんな適当な用心で良いのかよ。

ここで、そんな僕の心の中の言葉を読んだのか、彼女はポツポツと話をし始めた。

「亡霊、すなわち『実体をほぼ失ってしまったが、まだ完全に虚構

になってはいない生物』は、具体的にはどうやって生まれて来るのかはつきり分かっていない。

噂では、この『第三世界』に長く居過ぎると亡霊になりやすくなる、と言う。

だが、この間おまえに話した72時間以内というのは、要はセーフティネットなんだ。3日以内ならば、これまでの生還率は100%、というだけだ。

“自らの存在が不安定になる”とは言っただけで、具体的にどうなるかなんて解っていない。1週間ぐらい滞在して大丈夫だった“空奏師”も過去にはいたらしいしな。

『表世界』の住人ならば、実体は確実に在る。

『裏世界』の住人ならば、実体はどうやっても無い。非常に中途半端な立ち位置にある生物なんだよ。亡霊は。

彼らが『第三世界』を訪れた者に対して攻撃をする本当の理由、というのは分かっていない。

だけど、私達はここまで全然亡霊に遭わなかった。これは事実だ。それをこれからも信じる」

シェワードの話は興味深いし、説得力もある。その辺りは、僕も認めている事なのだけれども……

「だからと言って、武器が幕で大丈夫なんですか？」

そこが今回は問題なんだ。とりあえず、亡霊と出くわした時にどうするか？ それが僕は知りたい。

「そんな事言っただけで…… どうせおまえ、ロクにこれまで武器を持っただ事、無いだろ？」

何時だって、この“仕事”に絶対に安全だという方法は無い。

逆に言えば、『願いごとを叶える』というのはそれだけ困難の伴うものなんだ。

それに、箒は“掃き清める”事ができるモノとして、『表世界』でも古来から宗教的なものにも用いられてきたものだぞ。箒を舐めるなよ?」

そう言われて、僕は結局……

その後も幻想的なこの風景の中、僕達は黙々と歩き続けた。

この細い一本道も灰色空間と同様に、何処まで続いているのだろうか?

第36話：淡い光のその奥へ 「初仕事編・十二」（後書き）

ご一読、ありがとうございました。

すみません…… 予定では、日付が回ってしまう前に投稿する予定だったのですが、だいぶん推敲で文章の足りない所を補っていたら、日付が回ってしまいました。本当にごめんなさい！

↳ 『裏世界』見物（その3）

〔裏市〕……言わば、『表世界』の闇市のようなもの。ここにしかないモノがある。だが、〔裏商店街〕からは距離が結構離れているので、人通りはますます少ない。

〔万書館〕……〔裏市〕に出ている出店の一つ。一見したところ、大した本の量が無いように見えるが、実は出店の癖にここは膨大な書物を保管してある地下倉庫がある。

私の願いごと

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2433d/>

私の願いごと

2009年5月11日16時15分発行